

食品安全モニター課題報告

「食品の安全性に関する意識等について」（平成 24 年 7 月実施）の結果

1. 調査目的

食品安全委員会では、定点調査として、毎年、食品安全モニターの方を対象に、食品の安全性に関する意識等について調査を実施しており、今年度においても、平成 24 年 7 月 11 日から 7 月 24 日までの間、食品安全モニター 470 名を対象に調査を実施（有効回答数 344 名（73.2%））した。

【食品安全モニターを対象とした調査】

【比較を行った食品安全モニターを対象とした調査】

- ・平成 16 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識調査」（以下「平成 16 年度調査」という。）
- ・平成 17 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 17 年度調査」という。）
- ・平成 18 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 18 年度調査」という。）
- ・平成 19 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 19 年度調査」という。）
- ・平成 20 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 20 年度調査」という。）
- ・平成 21 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 21 年度調査」という。）
- ・平成 22 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 22 年度調査」という。）
- ・平成 23 年度第 1 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 23 年度調査（第 1 回）」という。）
- ・平成 23 年度第 2 回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」（以下「平成 23 年度調査（第 2 回）」という。）

2. 調査項目

調査項目は、次の 4 項目である。

- 1) 食品の安全性に係る危害要因等について
(食品の安全性に係る不安感の程度、不安を感じる理由等)
- 2) 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について
(放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報源等)
- 3) 食中毒について
(食中毒の危険性の認知度等)
- 4) 食品安全委員会が自ら行う食品健康影響評価について
(自ら評価を行うべき物質等)

3. 実施期間

平成 24 年 7 月 11 日～7 月 24 日

4. 対象

食品安全モニター 470 名

有効回答数 344 名 (有効回答率 : 73.2%)

1) 食品安全モニターの回答者数の内訳

① 男女別 :

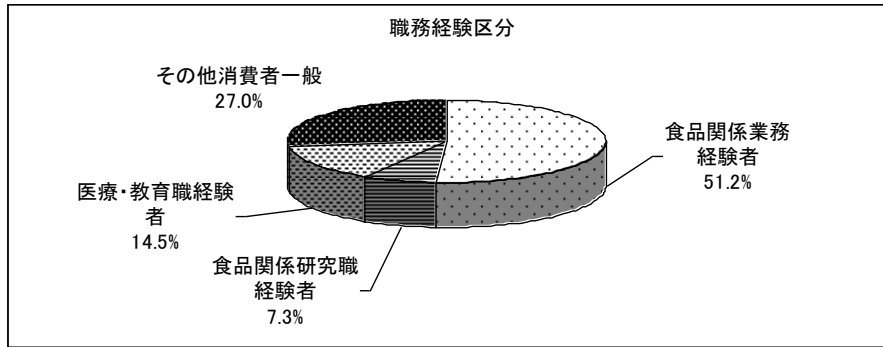
	回答者数	割合
全体	344 人	100.0%
男性	178 人	51.7%
女性	166 人	48.3%

② 年齢別 :

	回答者数	割合
全体	344 人	100.0%
20～29 歳	13 人	3.8%
30～39 歳	67 人	19.5%
40～49 歳	87 人	25.3%
50～59 歳	78 人	22.7%
60～69 歳	84 人	24.4%
70 歳以上	15 人	4.4%

③ 職務経験区分別 :

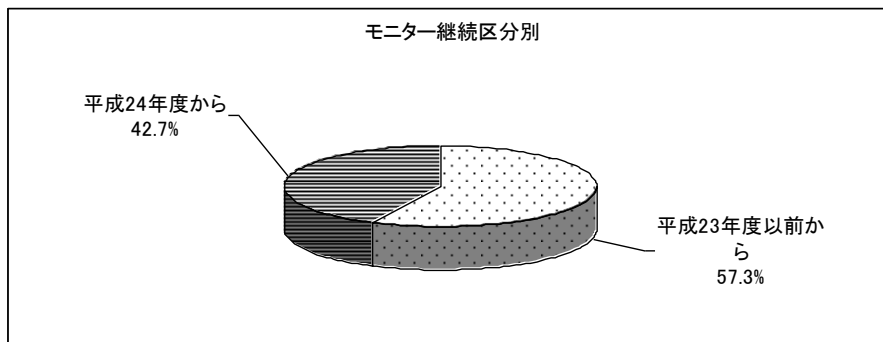
食品関係業務経験者	・現在もしくは過去において、食品の生産、加工、流通、販売等に関する職業(飲食物調理従事者、会社・団体等役員などを含む)に就いた経験を5年以上有している方 ・過去に食品の安全に関する行政に従事した経験を5年以上有している方	176 人
食品関係研究職経験者	・現在もしくは過去において、試験研究機関(民間の試験研究機関を含む)、大学等で食品の研究に関する専門的な職業に就いた経験を5年以上有している方	25 人
医療・教育職経験者	・現在もしくは過去において、医療・教育に関する職業(医師、獣医師、薬剤師、看護師、小中高校教師等)に就いた経験を5年以上有している方	50 人
その他消費者一般	・上記の項目に該当しない方	93 人



	男女別		年代区分別			全体
	男性	女性	20～39 歳	40～59 歳	60 歳以上	
食品関係業務経験者	123 人	53 人	32 人	82 人	62 人	176 人
	69.9%	30.1%	18.2%	46.6%	35.2%	100.0%
食品関係研究職経験者	21 人	4 人	7 人	9 人	9 人	25 人
	84.0%	16.0%	28.0%	36.0%	36.0%	100.0%
医療・教育職経験者	11 人	39 人	10 人	25 人	15 人	50 人
	22.0%	78.0%	20.0%	50.0%	30.0%	100.0%
その他消費者一般	23 人	70 人	31 人	49 人	13 人	93 人
	24.7%	75.3%	33.3%	52.7%	14.0%	100.0%

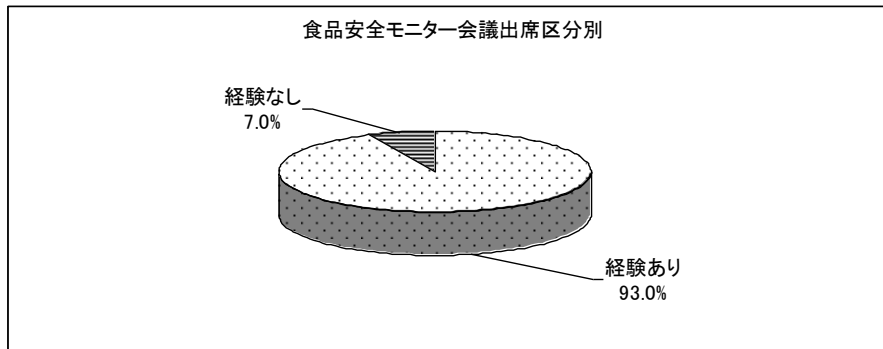
④ モニター継続区分別：

- 過去においても食品安全モニターに依頼されていた方
(以下、「経験モニター」という) 197 人
- 平成 24 年度から、食品安全モニターに依頼された方
(以下、「新規モニター」という) 147 人



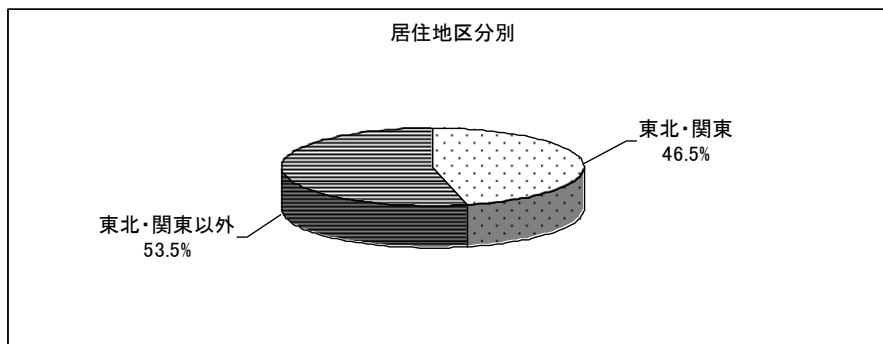
⑤ 食品安全モニター会議出席区分別：

- これまでに食品安全モニター会議に出席したことがある方 320 人
- これまでに食品安全モニター会議に出席したことがない方 24 人



⑥ 居住地区分：

- 東北・関東 160 人
- 東北・関東以外 184 人



※東北：北海道、青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県、福島県、新潟県
 関東：東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、茨城県、栃木県、群馬県、山梨県

1) 食品の安全性に係る危害要因等について

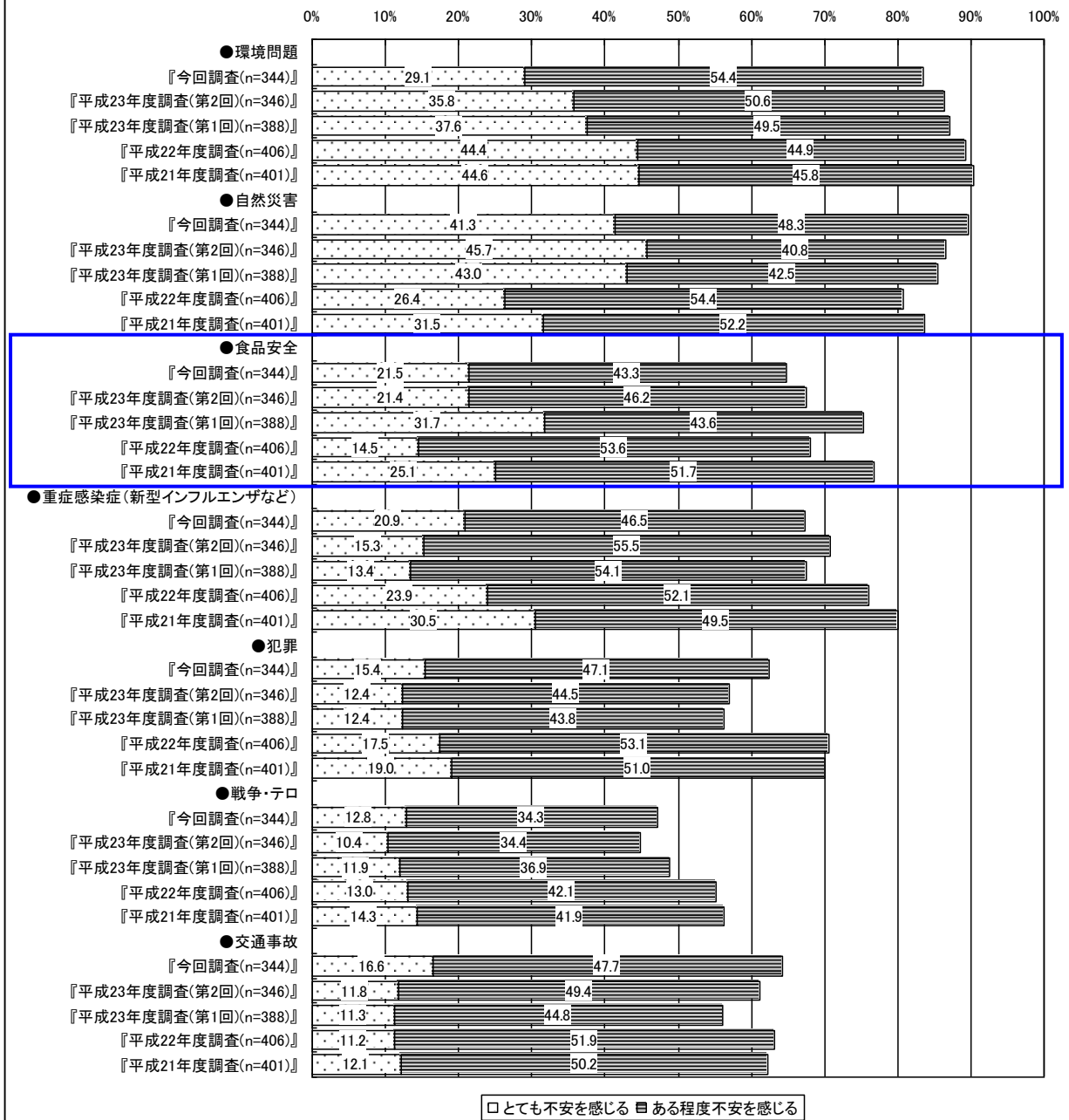
①日常生活を取り巻く分野別不安の程度（問1）

問1 A～Gに掲げる事項についてリスクの観点からあなたはどのように思いますか。それぞれの事項について、選択肢1～6の中から1つずつ選んでください。

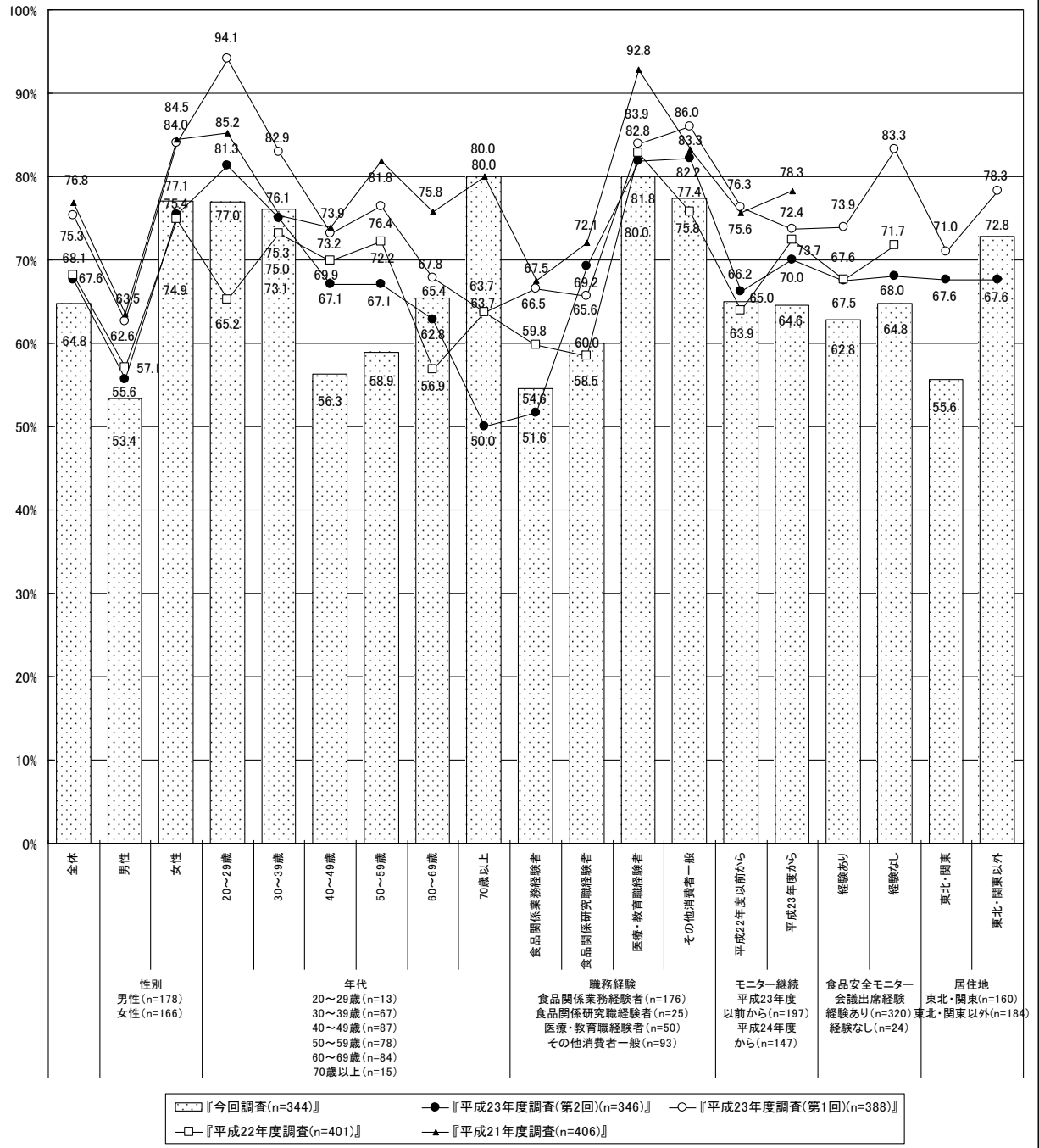
【事項】	【選択肢】
A 環境問題	1 とても不安を感じる
B 自然災害	2 ある程度不安を感じる
C 食品安全	3 どちらともいえない
D 重症感染症（新型インフルエンザなど）	4 あまり不安を感じない
E 犯罪	5 全く不安を感じない
F 戦争・テロ	6 よくわからない
G 交通事故	

- ◆ 平成24年度第1回調査（以下「今回調査」という。）では、食品安全について「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」とする回答割合は64.8%であり、平成21年度調査以降最も低い結果となった。他の分野と比較すると、自然災害（89.6%）、環境問題（83.5%）、重症感染症（新型インフルエンザなど）（67.4%）に比べ低いものの、交通事故（64.3%）、犯罪（62.5%）、戦争・テロ（47.1%）よりは高くなっている。
- ◆ 食品安全について、平成23年度調査（第1回）の結果で「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」とする回答割合は、東日本大震災から4か月後ということもあり、一時的に増加していたが、平成23年度調査（第2回）、今回調査と減少傾向にある。
- ◆ 食品安全について「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」とする回答割合の合計を属性別に比較すると、性別では男性53.4%、女性77.1%、職務経験区分別では、食品関係業務経験者54.6%、食品関係研究職経験者60.0%、医療教育職経験者80.0%、その他消費者一般77.4%、居住地別では東北・関東55.6%、東北・関東以外72.8%と、性別では女性、職務経験区分別では医療教育職経験者とその他消費者一般、居住地別では東北・関東以外が他の属性に比べて特になっている。
- ◆ 今回調査では、平成23年度調査（第2回）に比べて、食品安全について「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」とする回答割合の合計が、女性、30～39歳、60～69歳、70歳以上、食品関係業務経験者、東北・関東以外を除く全ての属性で減少している。特に、東北・関東で12.0%（67.6%→55.6%）、40～49歳で10.8%（67.1%→56.3%）と10%以上減少している。

日常生活を取り巻く分野別不安の程度（「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」）



日常生活を取り巻く分野別不安の程度(食品安全) (「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」)



②食品の安全性の観点から感じている不安の程度（問2）

問2 A～Lに掲げる事項について、食品の安全性の観点からあなたはどのように思いますか。それぞれの事項について、選択肢1～5の中から1つずつ選んでください。また、A～Lの事項以外に食品の安全性の観点で気になるものがあれば、「M その他」に具体的な例を記入し、それについても選択肢1～5の中から1つ選んでください。

【事項】

- A 食品添加物
- B 農薬
- C 家畜用抗生物質
- D 器具・容器包装からの溶出化学物質
- E 汚染物質（カドミウム、メチル水銀等）
- F 有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等
- G BSE（牛海綿状脳症）
- H 遺伝子組換え食品
- I 体細胞クローン家畜由来食品
- J いわゆる健康食品※
- K 肥料・飼料等
- L 放射性物質を含む食品の健康に与える影響
- M その他（具体的に記入してください）

【選択肢】

- 1 非常に不安である
- 2 ある程度不安である
- 3 あまり不安を感じない
- 4 全く不安を感じない
- 5 よく知らない

※ 「いわゆる健康食品」とは、健康増進法（平成14年法律第103号）に基づく特定保健用食品及び栄養機能食品以外のもので、健康の保持増進に資する食品として販売・利用されるものを広く指しています。

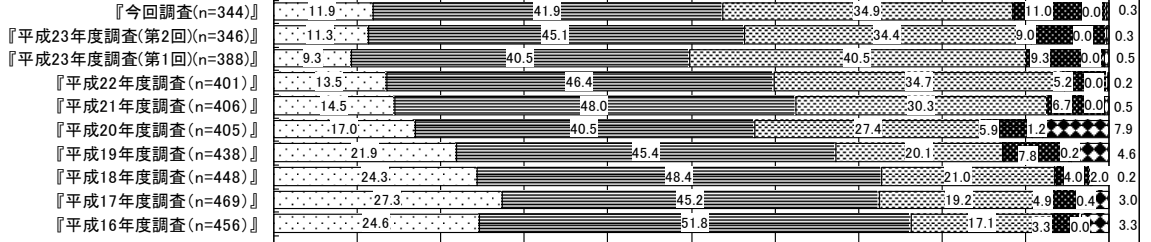
- ◆ 今回調査で、「非常に不安である」「ある程度不安である」という回答割合を合計した上位3事項は、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等（79.0%）、放射性物質を含む食品（74.2%）、汚染物質（カドミウム・メチル水銀等）（64.5%）であり、平成23年度調査（第2回）の上位3事項と同様の結果であったが、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等と放射性物質を含む食品の順位が入れ替わった。
- ◆ 今回調査では、平成23年度調査（第2回）に比べて、食品添加物並びにいわゆる健康食品及び放射性物質を含む食品を除く全ての事項で「非常に不安である」「ある程度不安である」とする回答割合が増加している。平成23年度調査（第2回）と比べ、最も回答割合が増加したのは、器具・容器包装からの溶出化学物質（5.0%増加、50.6%→55.6%）だった。一方、最も回答割合が減少したのは放射性物質を含む食品（6.1%減少、80.3%→74.2%）だったが、依然として高い水準にある。
- ◆ 放射性物質を含む食品について「非常に不安である」「ある程度不安である」とする回答割合の合計は、74.2%であり、性別では女性、職務経験区別では医療・教育職経験者およびその他消費者一般、居住地別では東北・関東以外が高くなっている。
- ◆ 今回調査と平成23年度調査（第2回）で、放射性物質を含む食品について「非常に不安である」「ある程度不安である」とする回答割合の合計を属性別に比較すると、60～69歳、医療・教育職

経験者、食品安全モニター会議出席経験なしを除く全ての属性で減少しており、特に 30～39 歳（10.6%減少、85.3%→74.7%）、70 歳以上（25.8%減少、85.8%→60.0%）、東北・関東（13.5%減少、81.7%→68.2%）で大きく減少している。

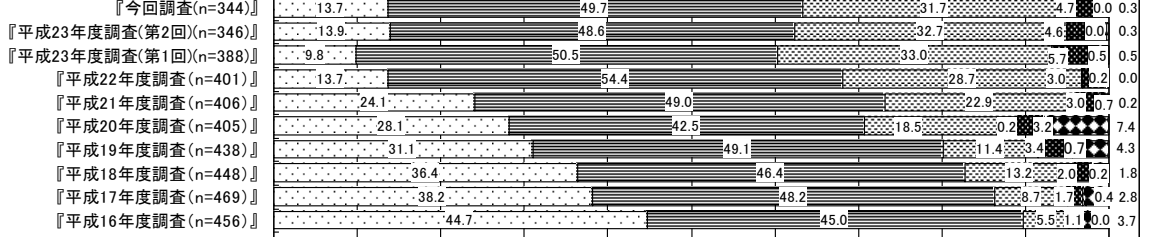
食品の安全性の観点から感じている不安の程度

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

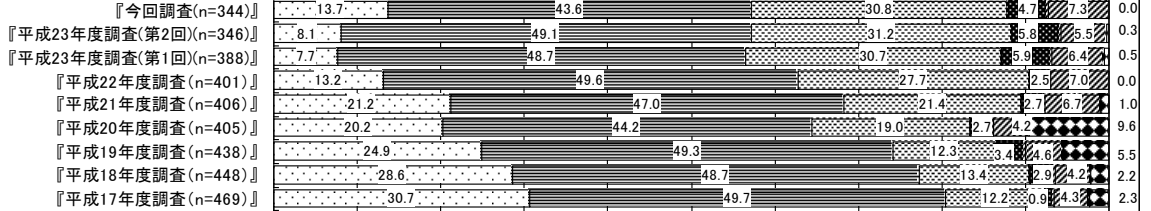
●食品添加物



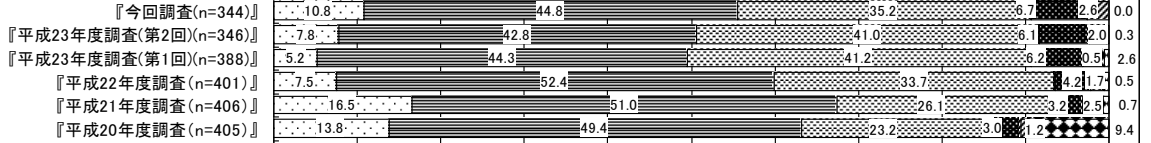
●農薬



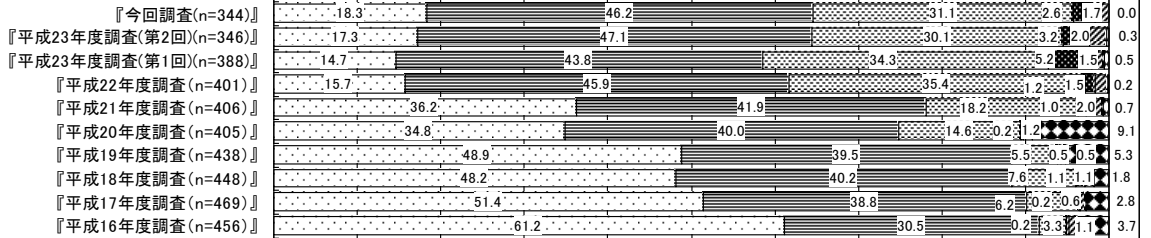
●家畜用抗生物質



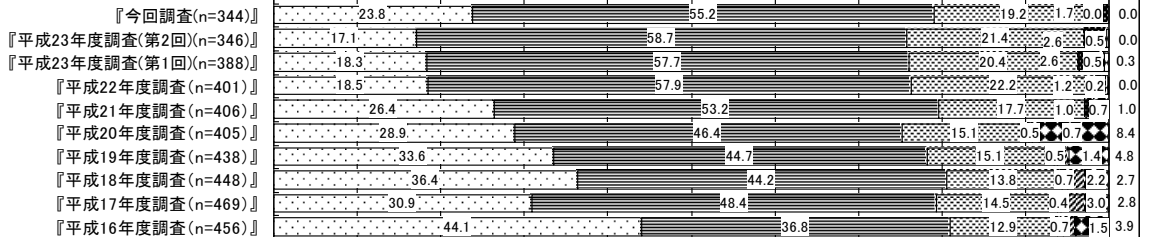
●器具・容器包装からの溶出化学物質



●汚染物質(カドミウム・メチル水銀等)

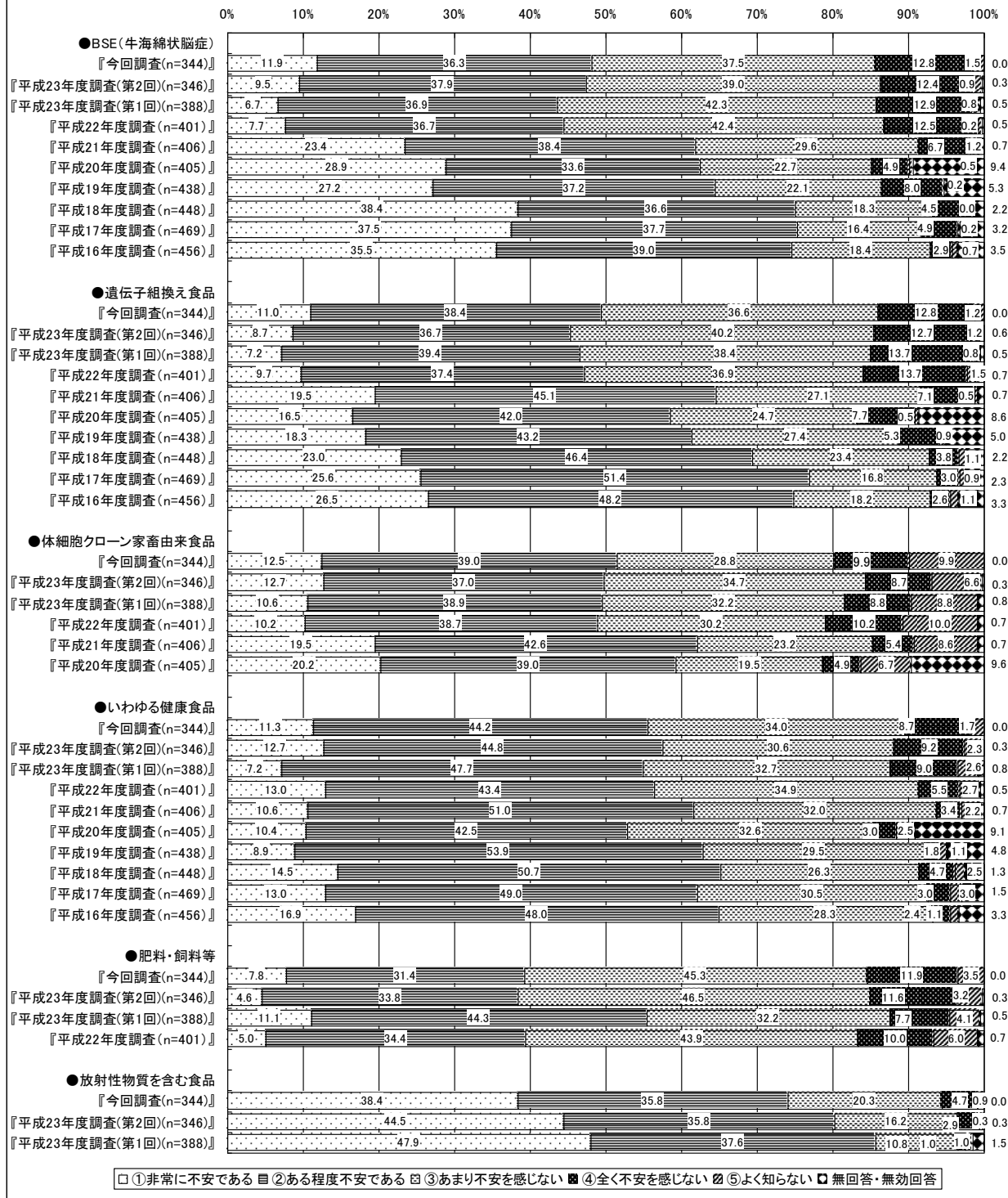


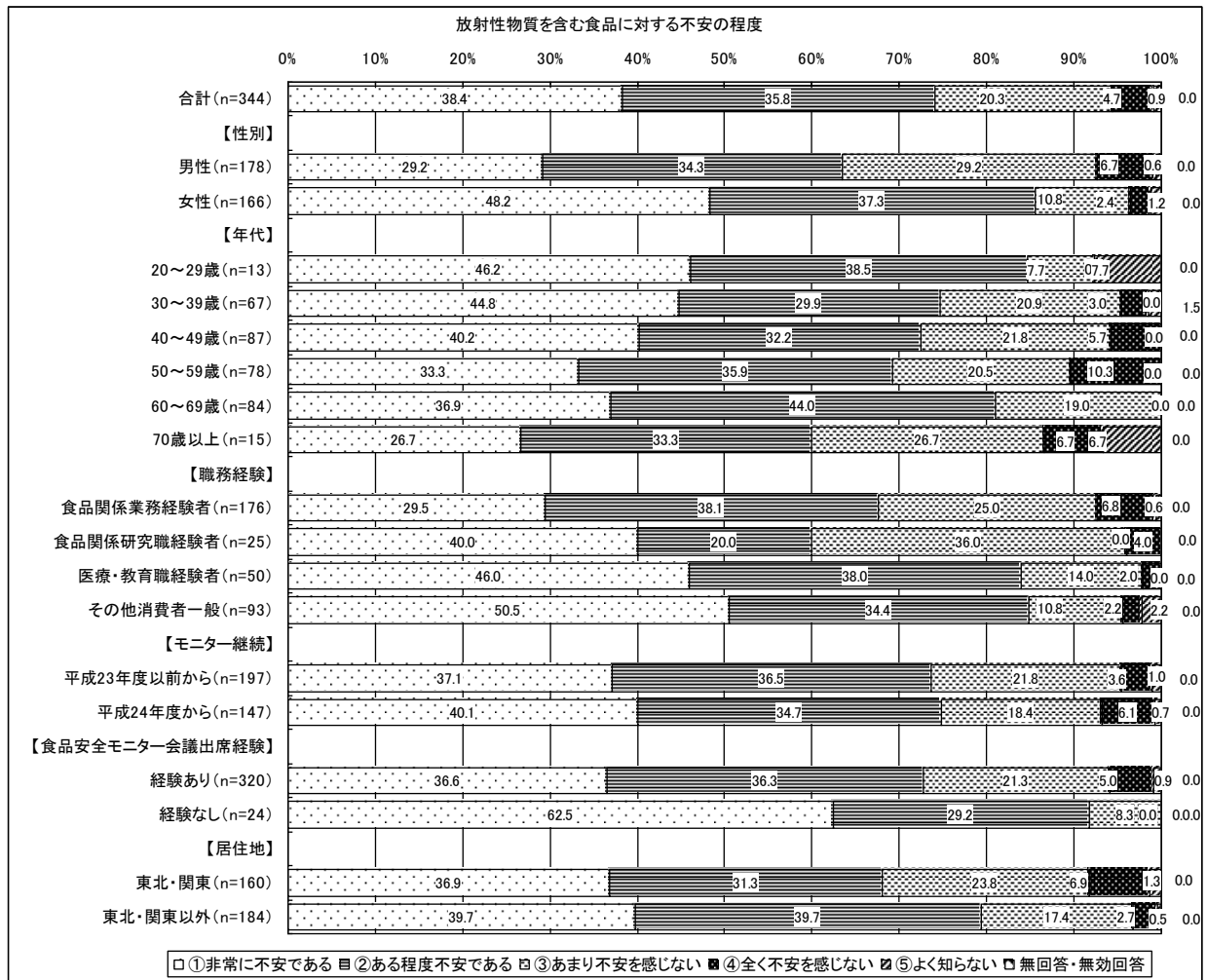
●有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等



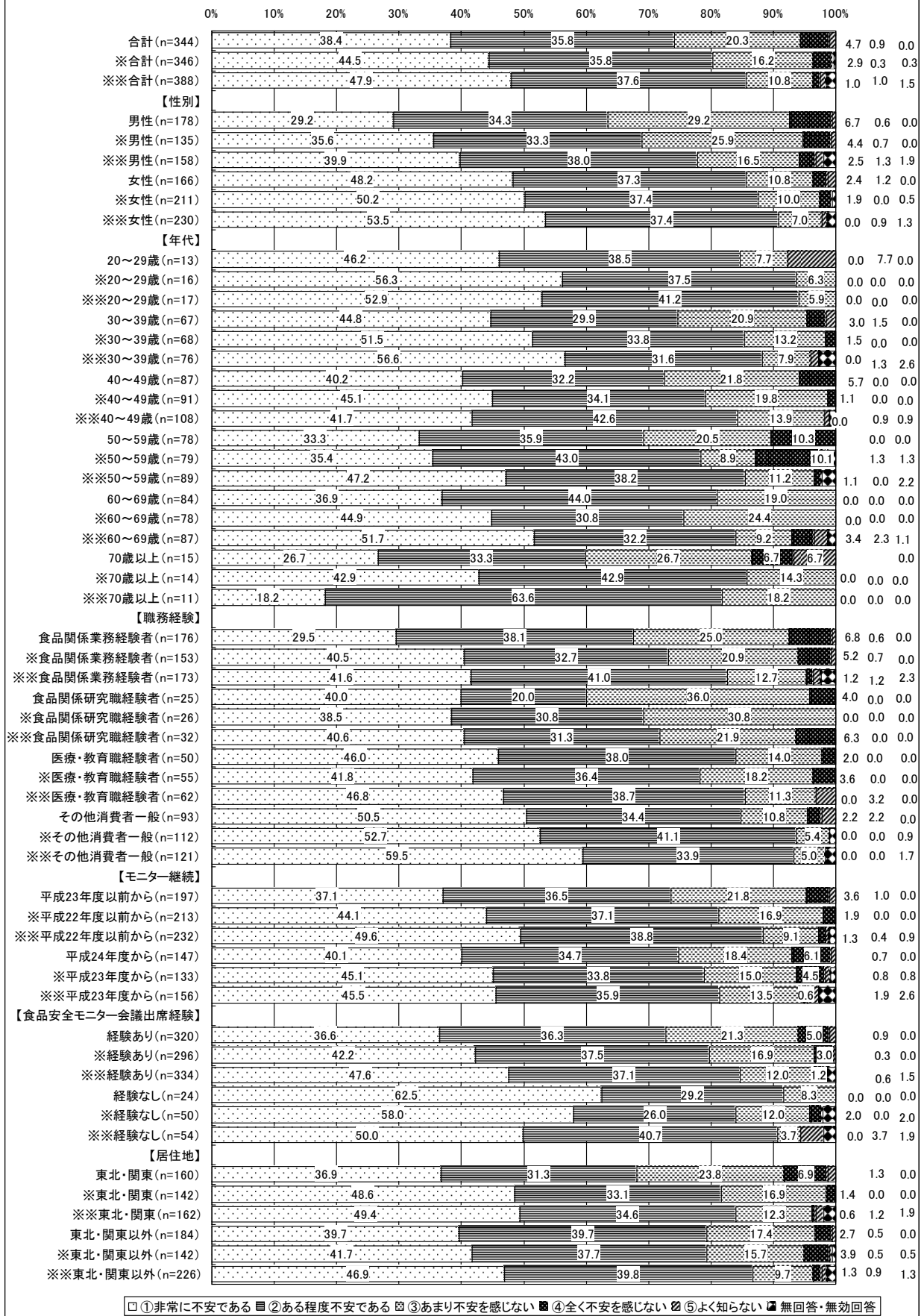
□①非常に不安である □②ある程度不安である □③あまり不安を感じない □④全く不安を感じない □⑤よく知らない □無回答・無効回答

食品の安全性の観点から感じている不安の程度





放射性物質を含む食品に対する不安の程度
 一段目：今回調査、二段目※：平成23年度調査（第2回）、三段目※※：平成23年度調査（第1回）



□①非常に不安である ②ある程度不安である ③あまり不安を感じない ④全く不安を感じない ⑤よく知らない 無回答・無効回答

問2：その他（具体的に記入してください）（回答者数 66名）

12 個の要因以外に食品の安全性の観点から不安を感じているものとして、アレルギー物質、輸入食品、ダイエット食品、食中毒、海底泥中のヒ素、肉の生食、臭素酸カリウム、自然毒、産地偽装などの意見があった。

③食品の安全性の観点から不安を感じている理由（問3）

問3 問2の事項A～K及びMにおいて、「1 非常に不安である」又は「2 ある程度不安である」を選んだ事項がある方にお聞きします。それぞれの事項について、不安を感じる理由を選択肢1～8の中から1つずつ選んでください。

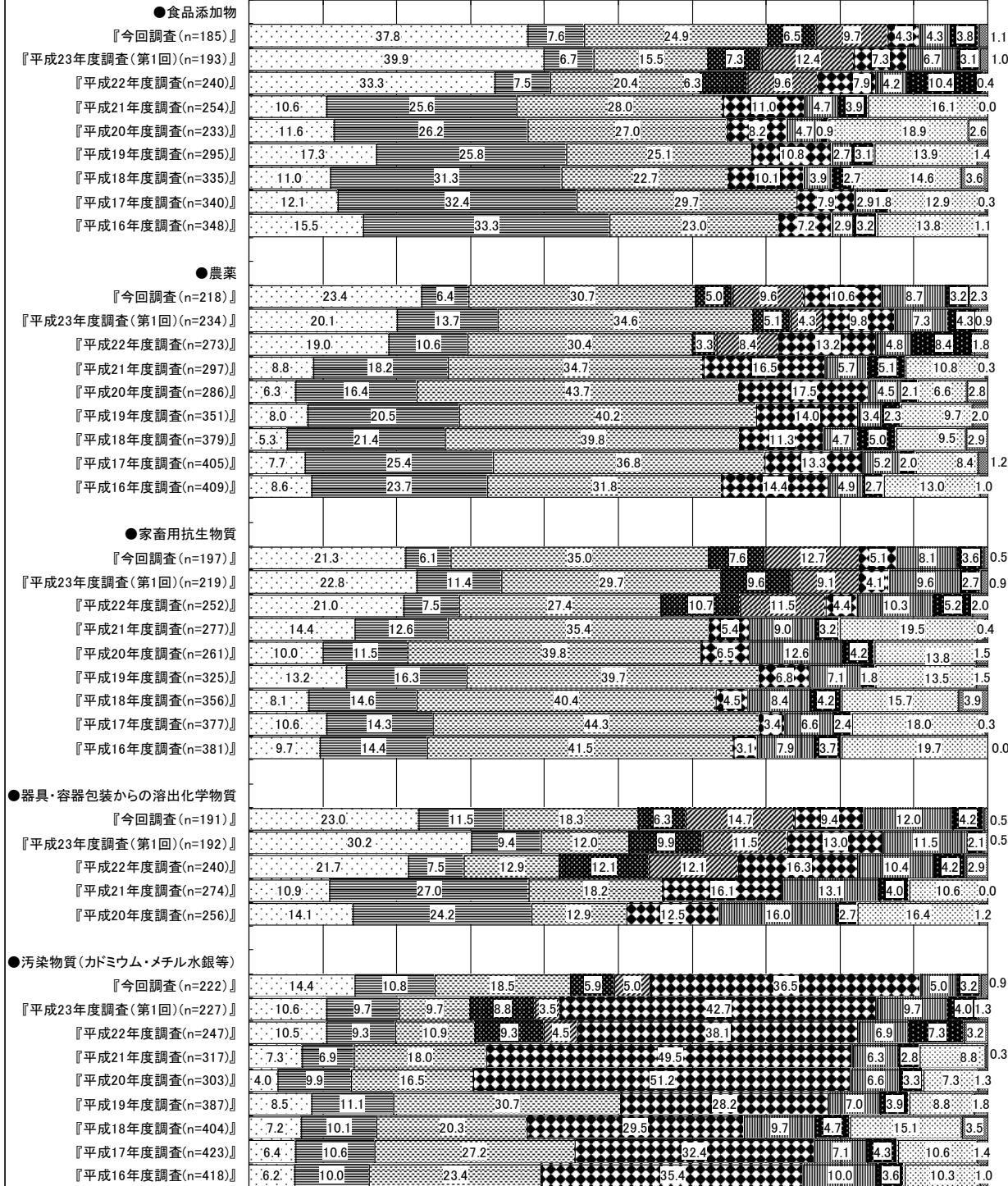
【選択肢】

- 1 安全性についての科学的な根拠に疑問
- 2 行政による規制が不十分
- 3 事業者の法令遵守や衛生管理が不十分
- 4 行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分
- 5 事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分
- 6 過去に問題になった事例があるために不安
- 7 漠然とした不安
- 8 その他（具体的に記入してください）

- ◆ 「安全性についての科学的な根拠に疑問」とする回答割合が高いのは、体細胞クローン家畜由来食品（49.7%）、遺伝子組換え食品（49.4%）、食品添加物（37.8%）、農薬（23.4%）、器具・容器包装からの溶出化学物質（23.0%）。
- ◆ 「行政による規制が不十分」とする回答割合が高いのは、いわゆる健康食品（20.9%）、BSE（牛海綿状脳症）（13.9%）、遺伝子組換え食品（12.4%）、器具・容器包装からの溶出化学物質（11.5%）、肥料・飼料等（11.1%）。
- ◆ 「事業者の法令遵守や衛生が不十分」とする回答割合が高いのは、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等（40.4%）、家畜用抗生物質（35.0%）、肥料・飼料等（34.8%）、農薬（30.7%）、食品添加物（24.9%）。
- ◆ 「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」とする回答割合が高いのは、体細胞クローン家畜由来食品（12.4%）、遺伝子組換え食品（8.8%）、家畜用抗生物質（7.6%）、BSE（牛海綿状脳症）（6.6%）、食品添加物（6.5%）。
- ◆ 「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」とする回答割合が高いのは、器具・容器包装からの溶出化学物質（14.7%）、肥料・飼料等（13.3%）、いわゆる健康食品（13.1%）、家畜用抗生物質（12.7%）、食品添加物（9.7%）。
- ◆ 「過去に問題になった事例があるために不安」とする回答割合が高いのは、BSE（牛海綿状脳症）（39.8%）、汚染物質（カドミウム・メチル水銀等）（36.5%）、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等（21.7%）、農薬（10.6%）、いわゆる健康食品（10.5%）。
- ◆ 「漠然とした不安」とする回答割合が高いのは、体細胞クローン家畜由来食品（15.3%）、器具・容器包装からの溶出化学物質（12.0%）、遺伝子組換え食品（11.8%）、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等（9.6%）、農薬（8.7%）。
- ◆ 今回調査と平成23年度調査（第1回）を比較すると、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」とする回答割合で、肥料・飼料等が特に増加している（13.4%増加、21.4%→34.8%）。

食品の安全性の観点から不安を感じている理由

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

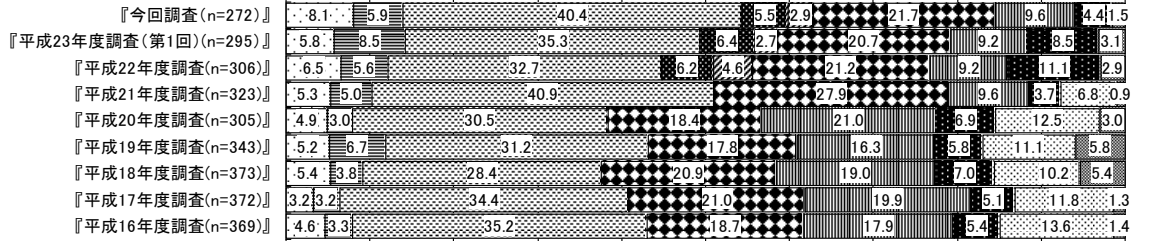


- ①安全性についての科学的な根拠に疑問
- ②行政による規制が不十分
- ③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分
- ④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分(平成22、23、24年度調査選択肢)
- ⑤事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分(平成22、23、24年度調査選択肢)
- ⑥過去に問題になった事例があるために不安
- ⑦漠然とした不安
- ⑧その他
- ⑨食品の安全性に関する情報が不足(平成16～21年度調査選択肢)
- ⑩無回答・無効回答

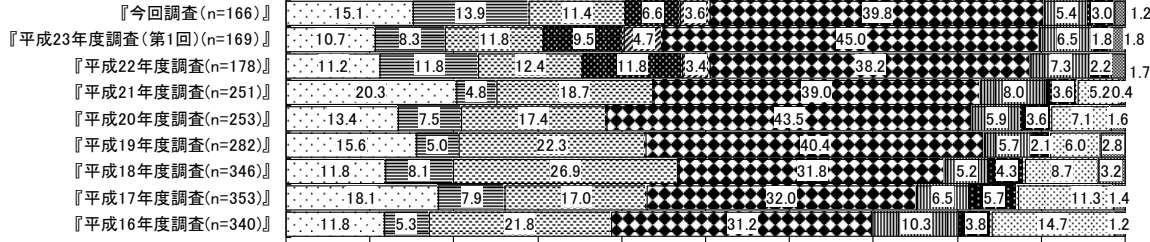
食品の安全性の観点から不安を感じている理由

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

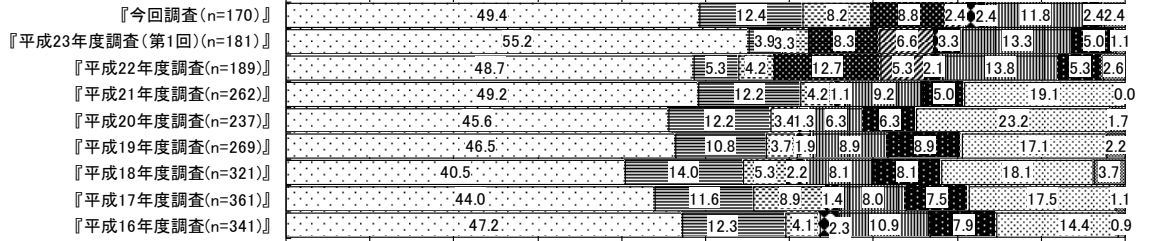
●有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等



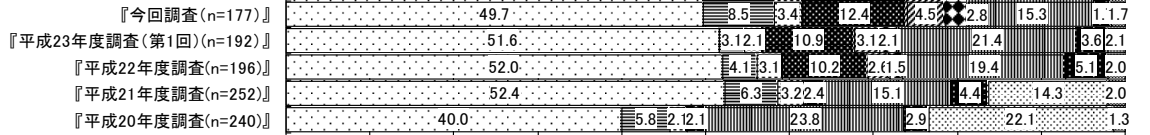
●BSE(牛海綿状脳症)



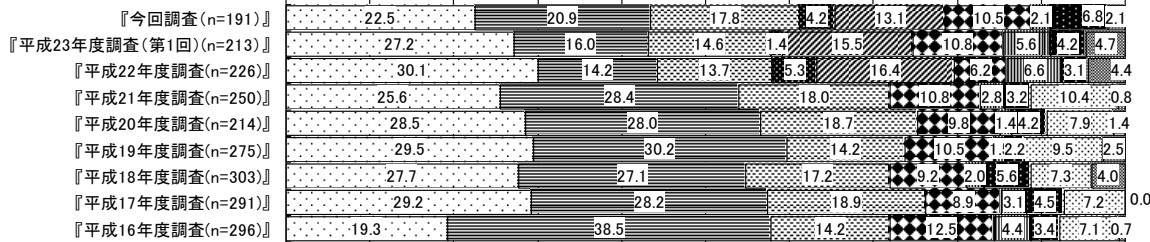
●遺伝子組換え食品



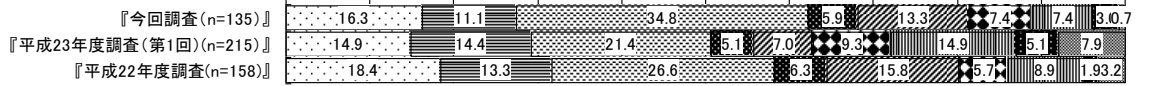
●体細胞クローン家畜由来食品



●いわゆる健康食品



●肥料・飼料等



- ①安全性についての科学的な根拠に疑問
- ②行政による規制が不十分
- ③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分
- ④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分(平成22、23、24年度調査選択肢)
- ⑤事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分(平成22、23、24年度調査選択肢)
- ⑥過去に問題になった事例があるために不安
- ⑦漠然とした不安
- ⑧その他
- ⑨食品の安全性に関する情報が不足(平成16~21年度調査選択肢)
- 無回答・無効回答

問3：その他（具体的に記入してください）

（1）食品添加物に不安を感じている理由（回答者数6名）

消費者の理解が不十分、未承認添加物の利用可能性などの意見があった。

（2）農薬に不安を感じている理由（回答者数6名）

輸入食品の問題がある、消費者の理解が不十分などの意見があった。

（3）家畜用抗生物質に不安を感じている理由（回答者数6名）

耐性菌の出現に対する不安、一般人に分かりにくいなどの意見があった。

（4）器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じている理由（回答者数7名）

中国などの輸入食品の包装に懸念、消費者の理解が不十分などの意見があった。

（5）汚染物質（カドミウム、メチル水銀等）に不安を感じている理由（回答者数7名）

ヒ素による健康被害があった、被害が顕在化していないものがある可能性、印刷工場での胆管がんや浄水場でのクロロホルム検出などの事例がある、消費者の理解が不十分などの意見があった。

（6）有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒に不安を感じている理由（回答者数12名）

未知、薬剤耐性、新型の有害微生物の登場、消費者の理解が不十分などの意見があった。

（7）BSE（牛海綿状脳症）に不安を感じている理由（回答者数5名）

治療方法がない、発症した人を見ると怖い、適正な管理が行われているか不安などの意見があった。

（8）遺伝子組換え食品に不安を感じている理由（回答者数4名）

組換え遺伝子が環境中に拡大、長期的なリスクが分からない、消費者の理解が不十分などの意見があった。

（9）体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じている理由（回答者数3名）

科学者のモラルが心配、消費者の理解が不十分などの意見があった。

（10）いわゆる健康食品に不安を感じている理由（回答者数13名）

健康に与える効果・影響が不明確で信頼できない、事業者の誇大広告、消費者の理解が不十分などの意見があった。

（11）肥料・飼料等に不安を感じている理由（回答者数4名）

事業者による管理に懸念、放射性物質の肥料・飼料への影響などの意見があった。

④食品の安全性の観点から不安を感じていない理由（問4）

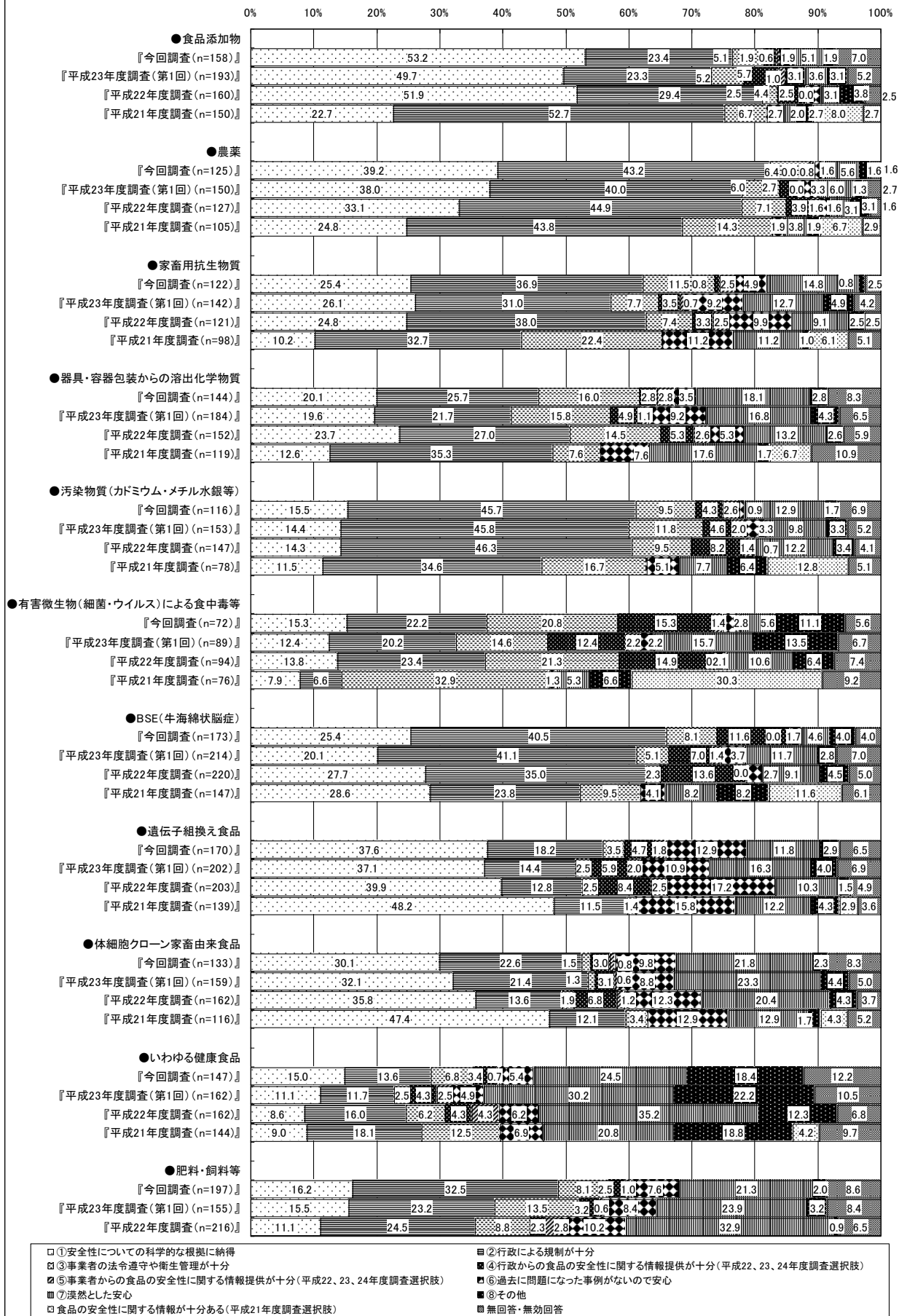
問4 問2の事項A～K及びMにおいて、「3 あまり不安を感じない」又は「4 全く不安を感じない」を選んだ事項がある方にお聞きします。それぞれの事項について、不安を感じない理由を選択肢1～8の中から1つずつ選んでください。

【選択肢】

- 1 安全性についての科学的な根拠に納得
- 2 行政による規制が十分
- 3 事業者の法令遵守や衛生管理が十分
- 4 行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分
- 5 事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分
- 6 過去に問題になった事例がないので安心
- 7 漠然とした安心
- 8 その他（具体的に記入してください）

- ◆ 「安全性についての科学的な根拠に納得」とする回答割合が高いのは、食品添加物（53.2%）、農薬（39.2%）、遺伝子組換え食品（37.6%）、体細胞クローン家畜由来食品（30.1%）、家畜用抗生物質（25.4%）、BSE（牛海綿状脳症）（25.4%）。
- ◆ 「行政による規制が十分」とする回答割合が高いのは、汚染物質（カドミウム・メチル水銀等）（45.7%）、農薬（43.2%）、BSE（牛海綿状脳症）（40.5%）、家畜用抗生物質（36.9%）、肥料・飼料等（32.5%）。
- ◆ 「事業者の法令遵守や衛生が十分」とする回答割合が高いのは、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等（20.8%）、器具・容器包装からの溶出化学物質（16.0%）、家畜用抗生物質（11.5%）、汚染物質（カドミウム・メチル水銀等）（9.5%）、BSE（牛海綿状脳症）（8.1%）、肥料・飼料等（8.1%）。
- ◆ 「行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分」とする回答割合が高いのは、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等（15.3%）、BSE（牛海綿状脳症）（11.6%）、遺伝子組換え食品（4.7%）、汚染物質（カドミウム・メチル水銀等）（4.3%）、いわゆる健康食品（3.4%）。
- ◆ 「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分」とする回答割合が高いのは、器具・容器包装からの溶出化学物質（2.8%）、汚染物質（カドミウム・メチル水銀等）（2.6%）、家畜用抗生物質（2.5%）、遺伝子組換え食品（1.8%）、肥料・飼料等（1.0%）。
- ◆ 「過去に問題にあった事例がなく、安心」とする回答割合が高いのは、遺伝子組換え食品（12.9%）、体細胞クローン家畜由来食品（9.8%）、肥料・飼料等（7.6%）、いわゆる健康食品（5.4%）、家畜用抗生物質（4.9%）。
- ◆ 「漠然とした安心」とする回答割合が高いのは、いわゆる健康食品（24.5%）、体細胞クローン家畜由来食品（21.8%）、肥料・飼料等（21.3%）、器具・容器包装からの溶出化学物質（18.1%）、家畜用抗生物質（14.8%）。
- ◆ 今回調査と平成23年度調査（第1回）を比較すると、「漠然とした安心」とする回答割合で、有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等が特に減少している（10.1%減少、15.7%→5.6%）。

食品の安全性の観点から不安を感じていない理由



問4：その他（具体的に記入してください）

（1）食品添加物に不安を感じていない理由（回答者数3名）

自分自身の知識から、ラベルに全て表示されているとの意見があった。

（2）農薬に不安を感じていない理由（回答者数2名）

関係する講座を受講していたのでとの意見があった。

（3）家畜用抗生物質に不安を感じていない理由（回答者数1名）

あまり取り沙汰されていないとの意見があった。

（4）器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じていない理由（回答者数4名）

自分で判断するだけの知識がない、業界による自主基準などの取り組みがある、意識したことがないなどの意見があった。

（5）汚染物質（カドミウム、メチル水銀等）に不安を感じていない理由（回答者数2名）

自分自身の知識から、自然界における微量汚染であり個体差による摂食方法が正しければ問題ないとの意見があった。

（6）有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等に不安を感じていない理由（回答者数7名）

自分自身の知識から、各微生物の特徴を把握すればよい、家庭で十分に注意している、自己防衛しやすいなどの意見があった。

（7）BSE（牛海綿状脳症）に不安を感じていない理由（回答者数7名）

自分自身の知識から、大きな被害報告はないから、規制が整備されているからなどの意見があった。

（8）遺伝子組換え食品に不安を感じていない理由（回答者数5名）

自分自身の知識から、大きな被害報告はないから、結局間接的には食しており使用せざるを得ない事情もあるからなどの意見があった。

（9）体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じていない理由（回答者数3名）

自分自身の知識から、可能性のある危害・課題が分からないなどの意見があった。

（10）いわゆる健康食品に不安を感じていない理由（回答者数26名）

健康食品が必要ない・食さないため、使用する個人の責任であると考えているためなどがあった。

（11）肥料・飼料等に不安を感じていない理由（回答者数4名）

行政による規制が存在、あまり気にしていない、あまり大きな問題を聞いたことがない、間接的な影響との意見があった。

⑤放射性物質を含む食品の健康に与える影響について不安を感じている理由（問5）

問5 問2の事項L（放射性物質を含む食品の健康に与える影響）において、「1 非常に不安である」又は「2 ある程度不安である」を選んだ方にお聞きします。不安を感じる理由を選択肢1～9の中から強く当てはまる順に3つ選んでください。

【選択肢】

- 1 過去に経験したことがない事態のため
- 2 放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため
- 3 自分の被ばく量がどの程度か解らないため
- 4 安全性についての科学的根拠が納得できない
- 5 新しい規制値では納得できない
- 6 食品の検査体制に不安を感じる
- 7 政府の情報公開が不十分
- 8 周囲が心配しているので自分も心配になる
- 9 その他（具体的に記入してください）

◆ 問2（p.3）において放射性物質を含む食品の健康に与える影響について「非常に不安である」、「ある程度不安である」と回答した人の不安感の理由の選択順位第1位から第3位までを合計した上位3事項の合計を比べると、「過去に経験したことがない事態のため」（63.5%）、「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」（59.2%）、「政府の情報公開が不十分」（47.5%）となっている。

◆ 今回調査と平成23年度調査（第2回）について、選択順位第1位から第3位までの合計を比べると、「安全性についての科学的根拠が納得できない」が増加（7.9%増加、39.2%→47.1%）しているが、平成23年度調査（第1回）よりは減少している。

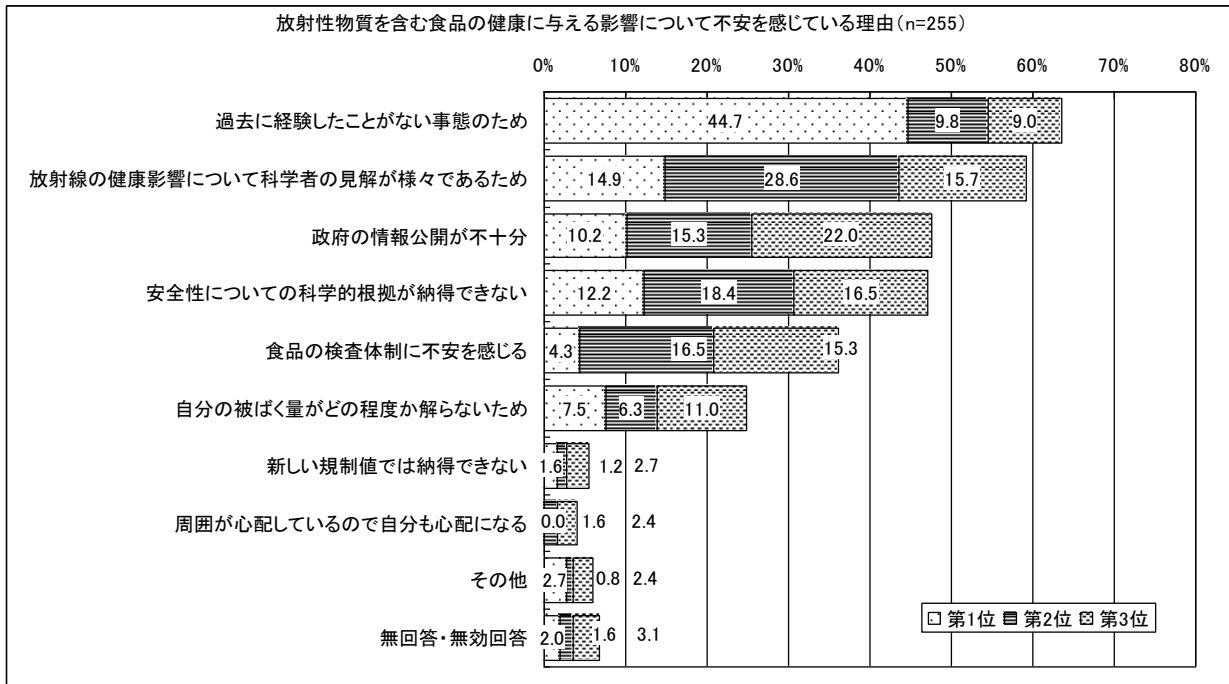
◆ 今回調査と平成23年度調査（第1回及び第2回）の結果について、選択順位第1位から第3位までの合計を比べると、「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」が減少傾向にある。また、今回調査では「新しい規制値では納得できない」が、これまでの平成23年度調査（第1回及び第2回※）と比較して選択順位第1位から第3位までの合計が10%以上減少している。

※平成23年度調査（第2回）の選択肢：「大人と子どもが基本的に同じ暫定規制値で運用されてきたことが納得できない」

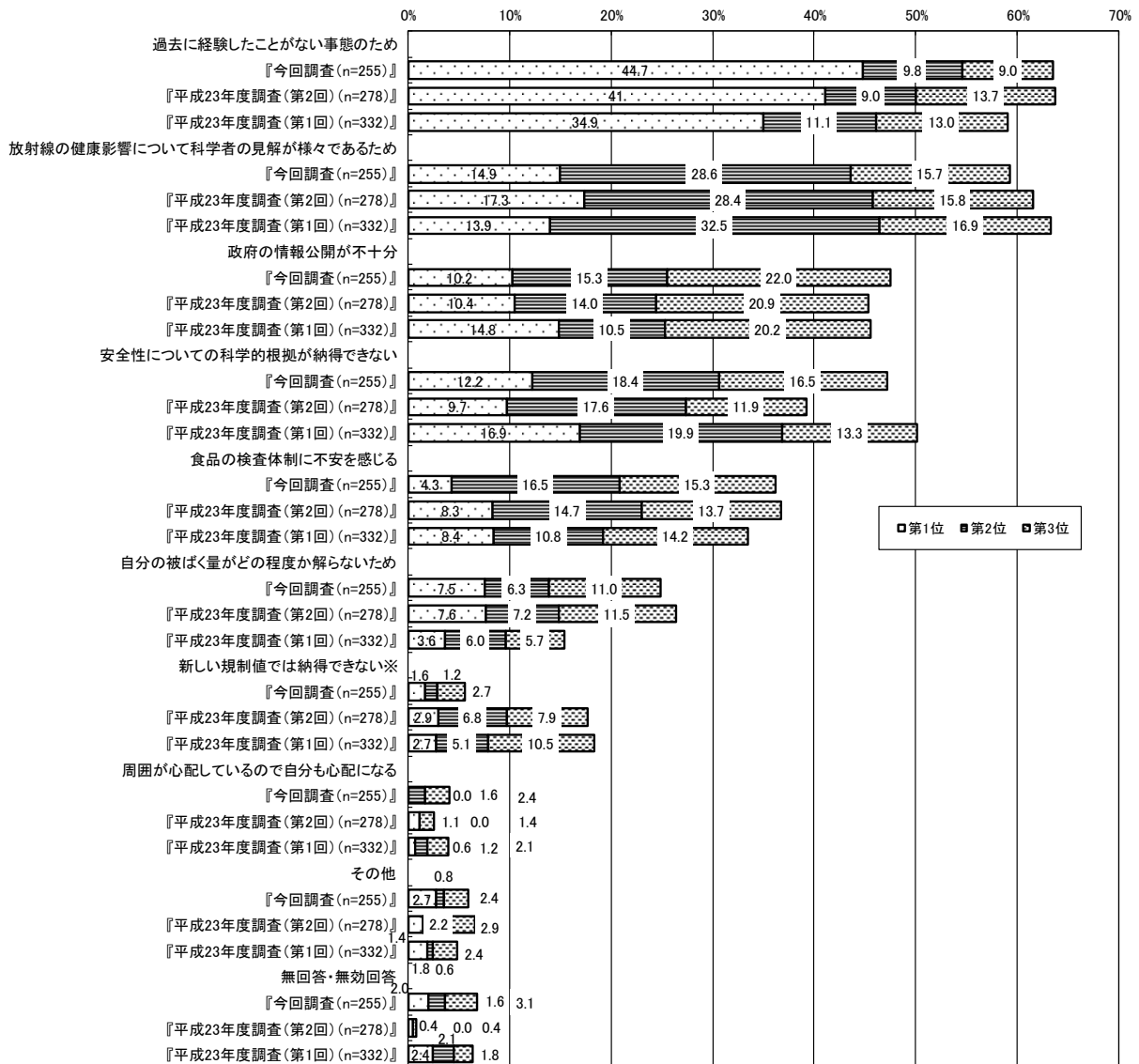
平成23年度調査（第1回）の選択肢：「大人と子どもが基本的に同じ暫定規制値であることが納得できない」

◆ 不安を感じている理由の選択肢ごとに第1位、第2位及び第3位の合計を「性別」で比べると、「政府の情報公開が不十分」と「安全性について科学的根拠が納得できない」では、これまで3回の調査結果ともに女性より男性の方が回答割合が高くなっている。また「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」は、今回調査では男性の方が回答割合が高いが、平成23年度調査（第2回）では女性の方が高かった。これまで3回の調査結果すべてにおいて男性より女性の方が回答割合が高いものは、「新しい規制値では納得できない」であった。「過去に経験したことがない事態のため」と「食品の検査体制に不安を感じる」は、今回調査では女性の方が回答割合が高かった。

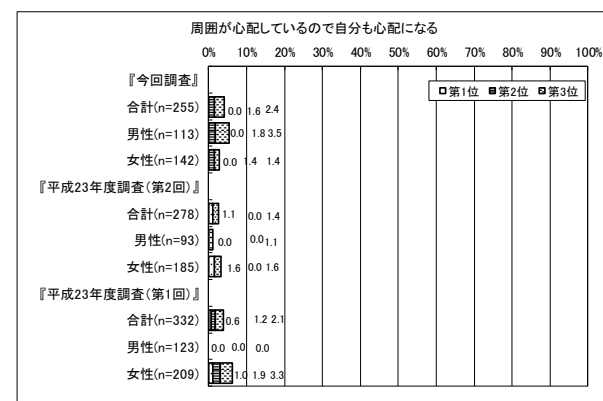
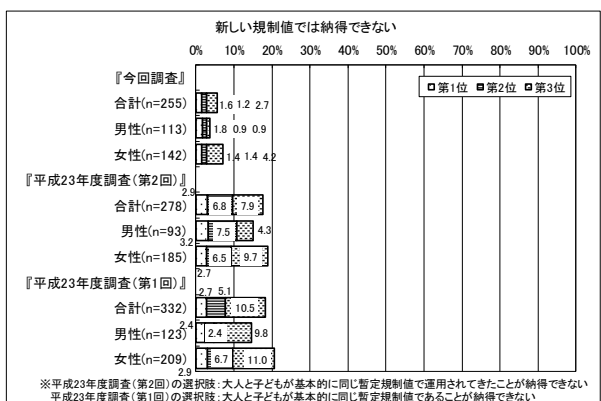
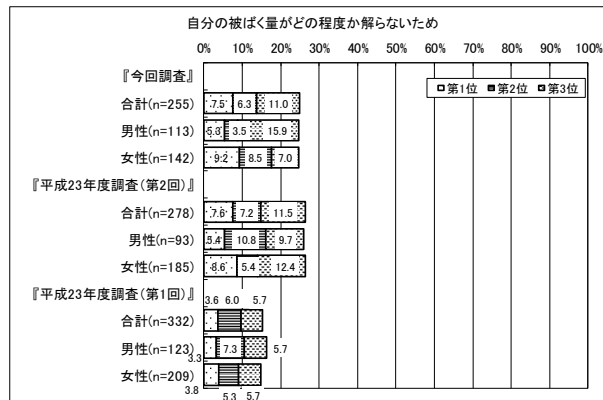
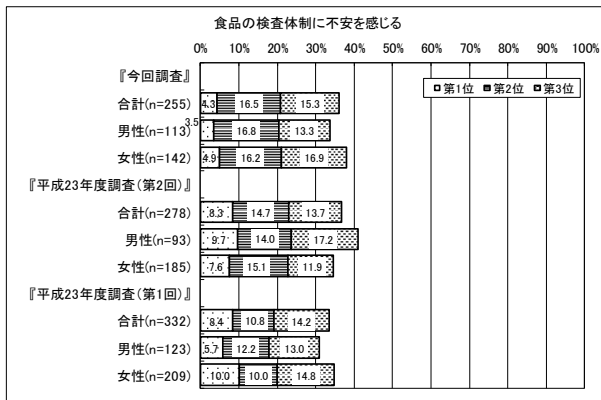
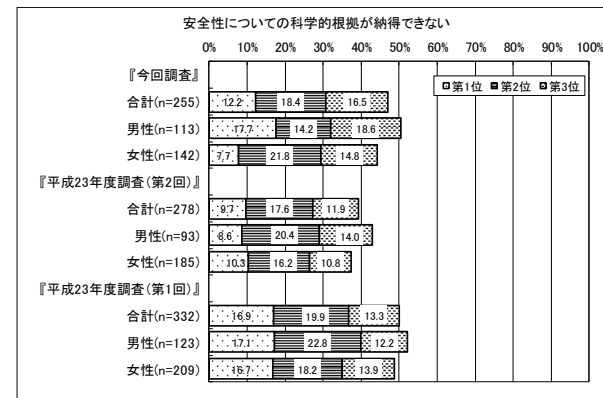
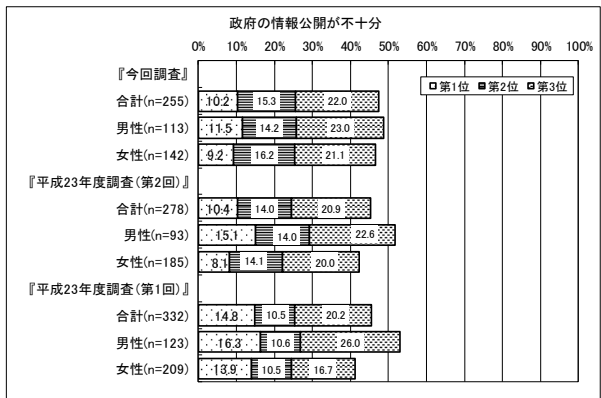
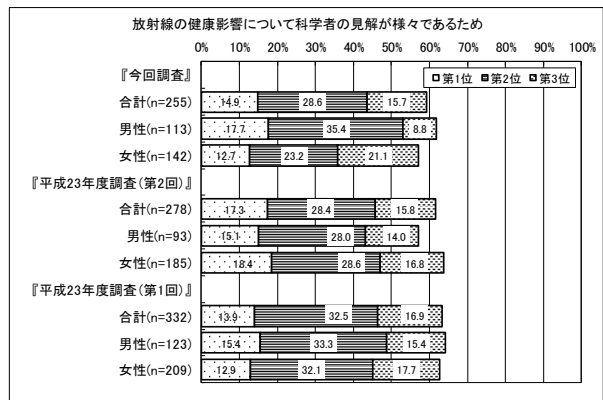
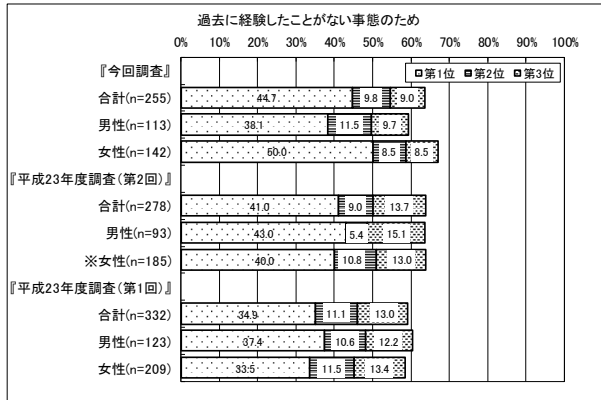
- ◆ 不安を感じている理由の選択肢ごとに第1位、第2位及び第3位の合計を「居住地別」で比べると、「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」は、平成23年度調査（第2回）では東北・関東以外が高いが、今回調査では同程度となっている。また、「食品の検査体制に不安を感じる」、「自分の被ばく量がどの程度か解らないため」では、平成23年度調査（第2回）では東北・関東が回答割合が高いのに対し、今回調査では逆転し、東北・関東以外の方が高くなっている。

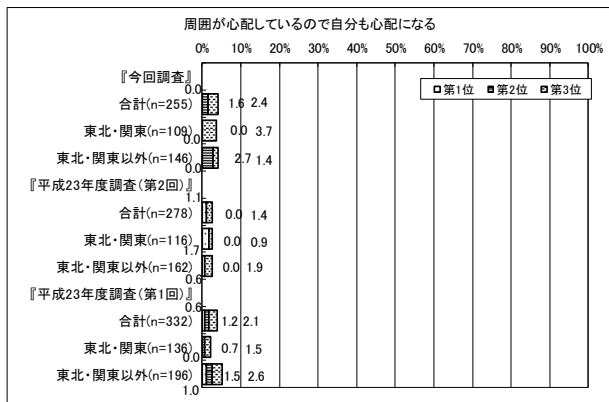
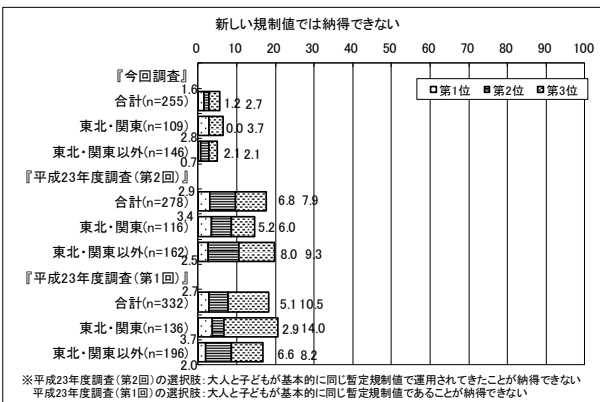
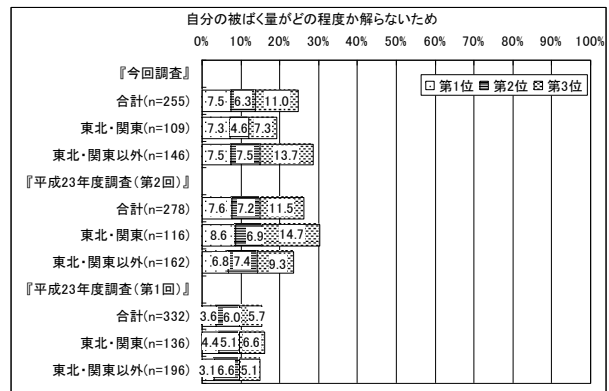
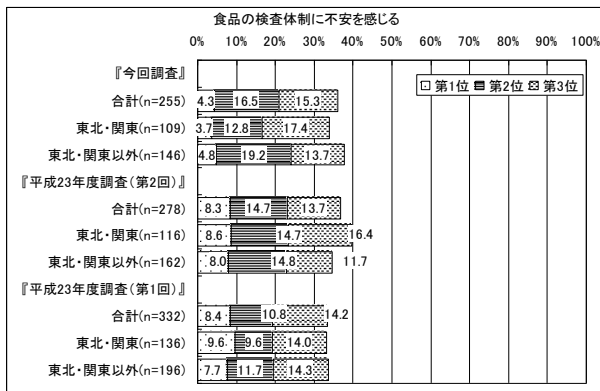
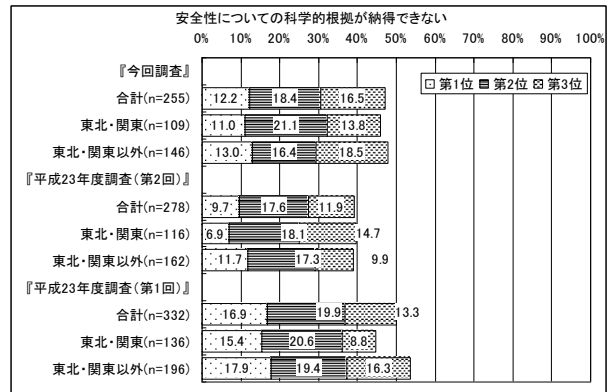
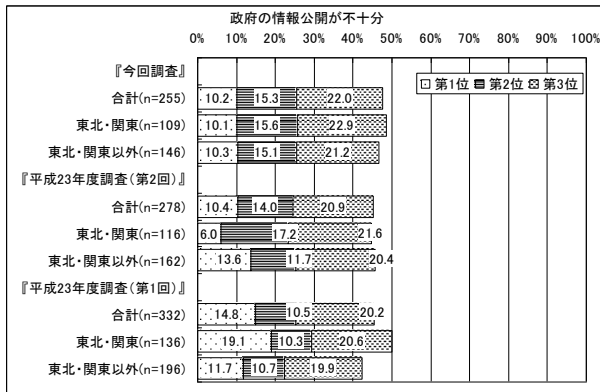
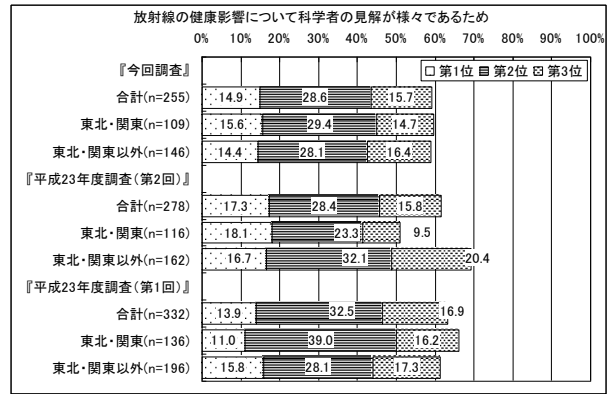
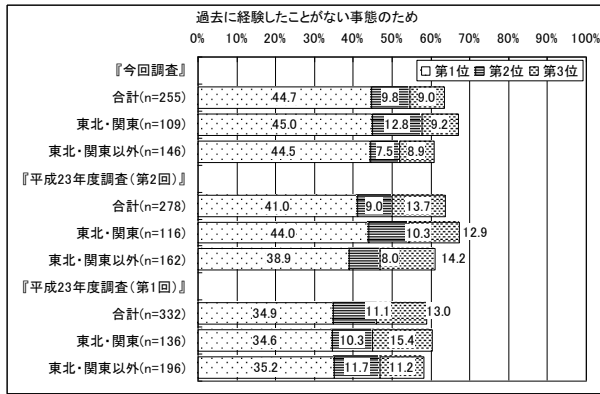


放射性物質を含む食品の健康に与える影響について不安を感じている理由



※平成 23 年度調査 (第 2 回) の選択肢: 大人と子どもが基本的に同じ暫定規制値で運用されてきたことが納得できない
平成 23 年度調査 (第 1 回) の選択肢: 大人と子どもが基本的に同じ暫定規制値であることが納得できない





問 5：その他（具体的に記入してください）

（1）1位（回答者数7名）

見えないものなので自己防衛できない、行政やマスコミなどにより隠蔽されていることが多い気がする、原発事故が収束していないなどの意見があった。

（2）2位（回答者数2名）

原子力行政に不安、行政による規制値に懸念があるとの意見があった。

（3）3位（回答者数5名）

行政やマスコミなどにより隠蔽されていることが多い気がする、被害状況の把握方法への懸念、基準値以下の低レベル汚染食品のデータ不足、将来的な影響への不安などの意見があった。

2) 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について

①放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先 (問6)

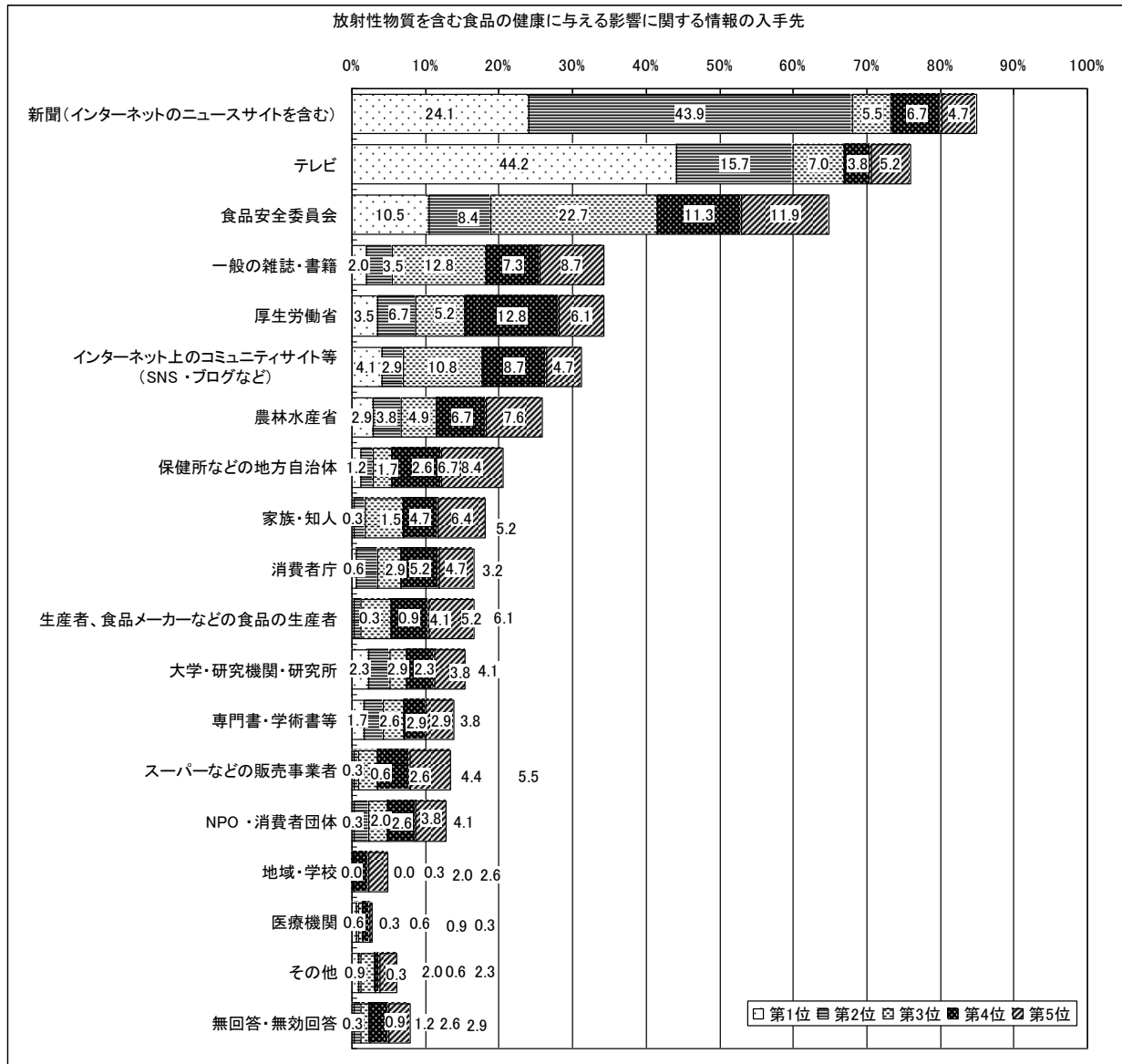
問6 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先についてお伺いします。選択肢の中から利用頻度の高い順に5つ選んでください。

【選択肢】

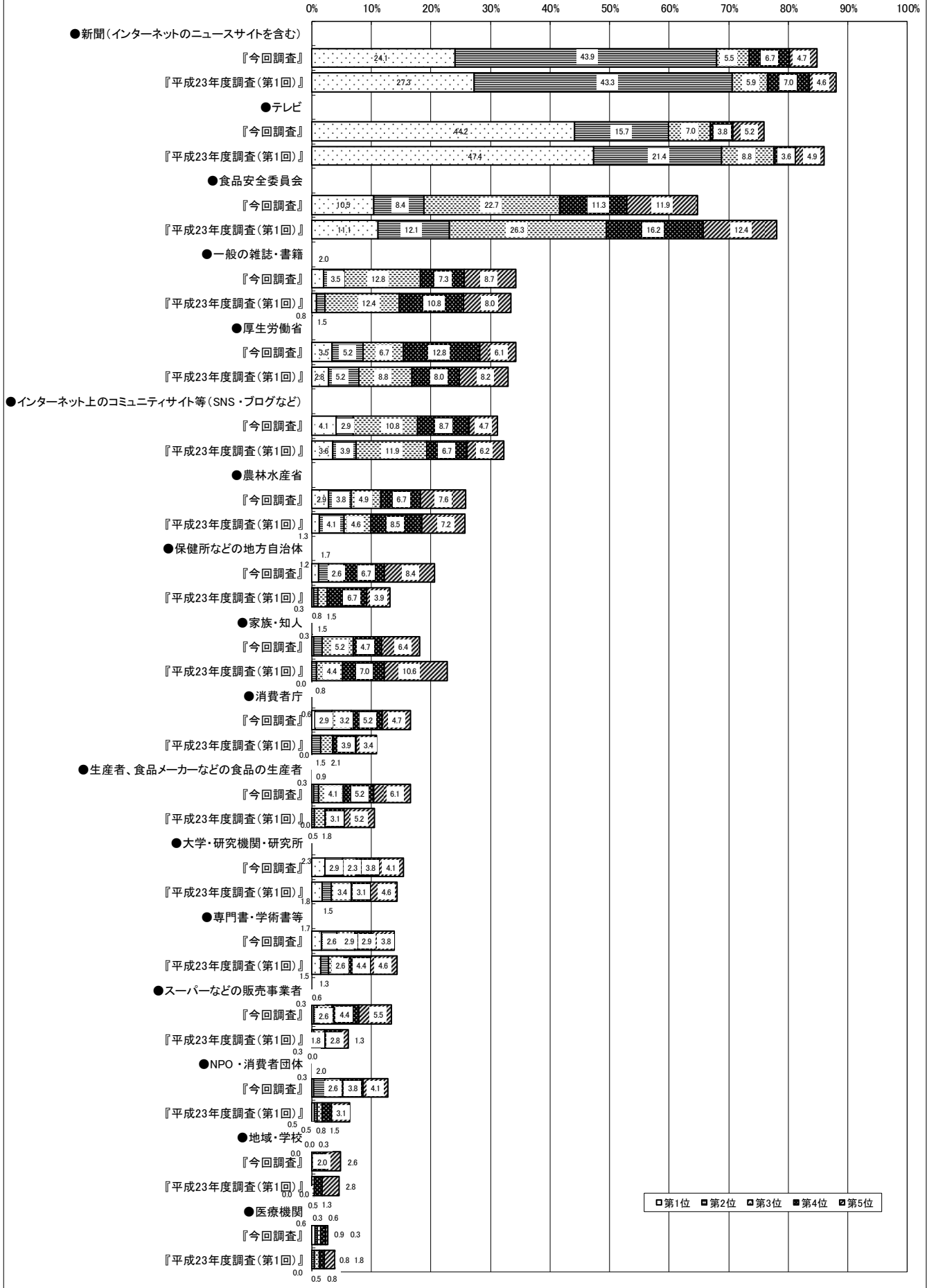
- 1 テレビ
- 2 新聞 (インターネットのニュースサイトを含む)
- 3 一般の雑誌・書籍
- 4 専門書・学術書等
- 5 インターネット上のコミュニティサイト等 (ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS)・ブログなど)
- 6 食品安全委員会
- 7 消費者庁
- 8 厚生労働省
- 9 農林水産省
- 10 保健所などの地方自治体
- 11 生産者、食品メーカーなどの食品の生産者
- 12 スーパーなどの販売事業者
- 13 大学・研究機関・研究所
- 14 医療機関
- 15 NPO・消費者団体
- 16 家族・知人
- 17 地域・学校
- 18 その他 (具体的に記入してください)

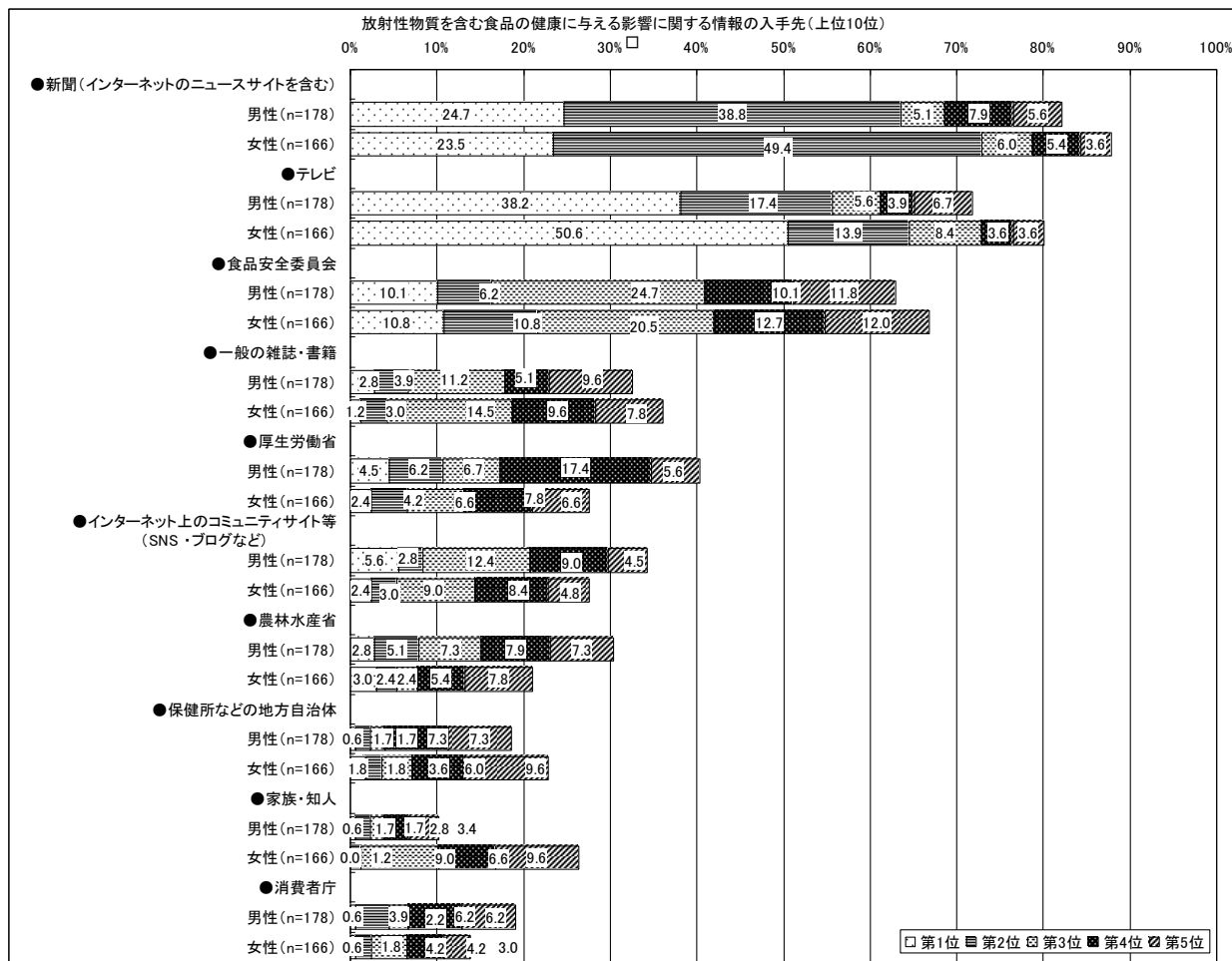
- ◆ 今回調査で選択順位第1位から第5位までを合計した上位3事項は「新聞 (インターネットのニュースサイトを含む)」(84.9%)、「テレビ」(75.9%)、「食品安全委員会」(64.8%)の順となっており、他の選択肢と比べ突出している。
- ◆ 選択順位第1位から第5位までそれぞれの順位ごとの回答割合を比べると、第1位では「テレビ」(44.2%)、第2位では「新聞 (インターネットのニュースサイトを含む)」(43.9%)、第3位では「食品安全委員会」(22.7%)、第4位では「厚生労働省」(12.8%)、第5位では「食品安全委員会」(11.9%)が最も高くなっている。
- ◆ 今回調査と平成23年度調査(第1回)について第1位から第5位の合計を比べると、特にテレビと食品安全委員会で回答割合が減少しており、テレビでは10.2%(86.1%→75.9%)、食品安全委員会では13.3%(78.1%→64.8%)減少している。
- ◆ 放射性物質を含む食品の健康影響に関する情報の入手先の第1位から第5位の合計を属性別に比較すると、性別、年代別、職務経験区分別で差が見られた。性別で比べると、男性では「厚生労働省」とする回答割合が女性に比べて12.8%高く、女性では「家族・知人」とする回答割合が男性に比べて16.2%高い。年代別で比べると、20~29歳では「食品安全委員会」、「厚生労働省」、「保健所などの地方自治体」とする回答割合が他の年代に比べて特に低く、60~69歳では「家族・知

人」とする回答割合が特に低い。職務経験別に比べると、食品関係業務経験者では「一般の雑誌・書籍」、食品関係研究職経験者では「保健所などの自治体」、その他消費者一般では、「厚生労働省」とする回答割合が他の職務に比べて特に低い。一方、その他消費者一般では、「家族・知人」とする回答割合が他の職務に比べて特に高い。

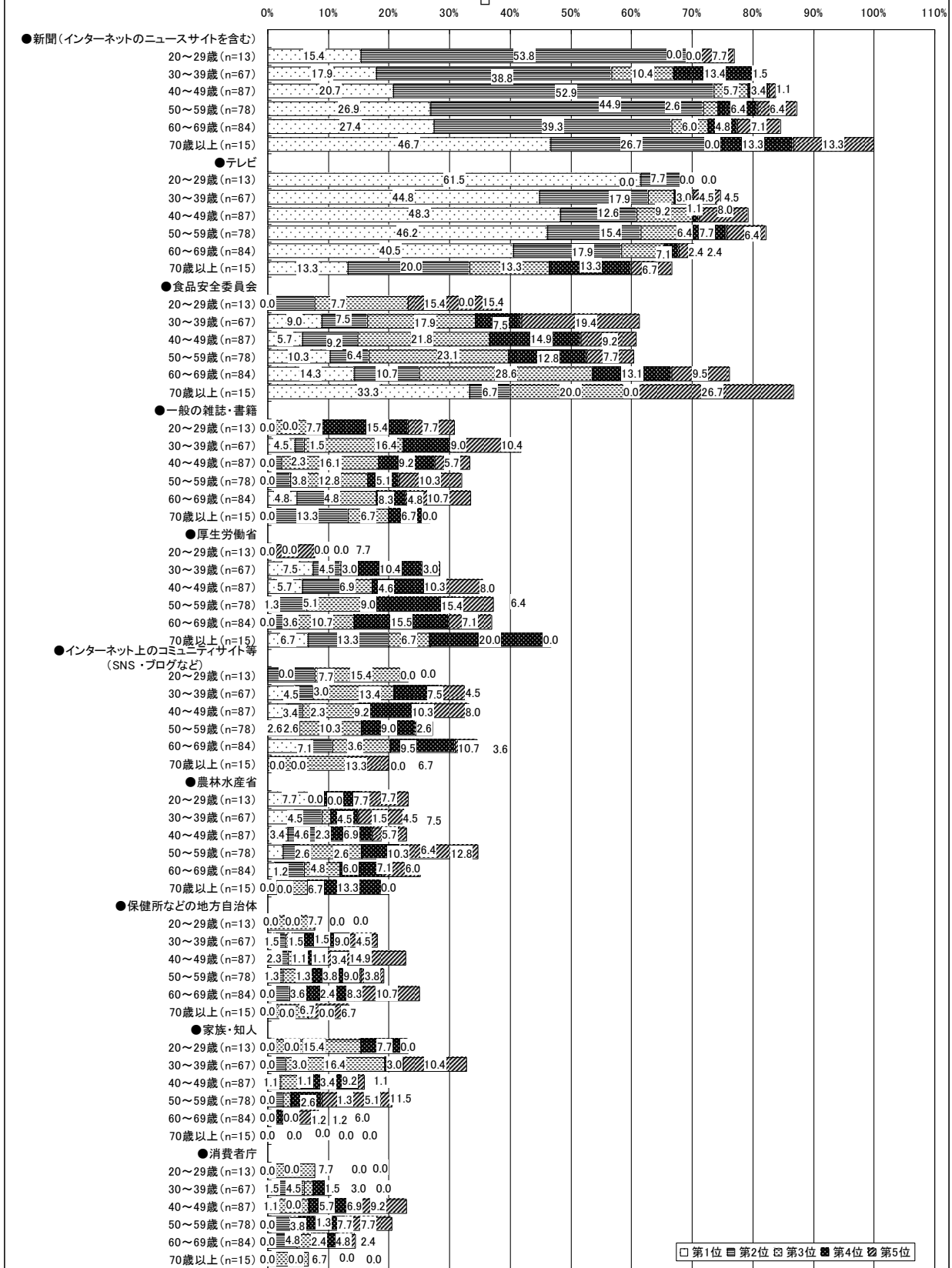


放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先
 (今回調査n=344、平成23年度調査(第1回)n=388)

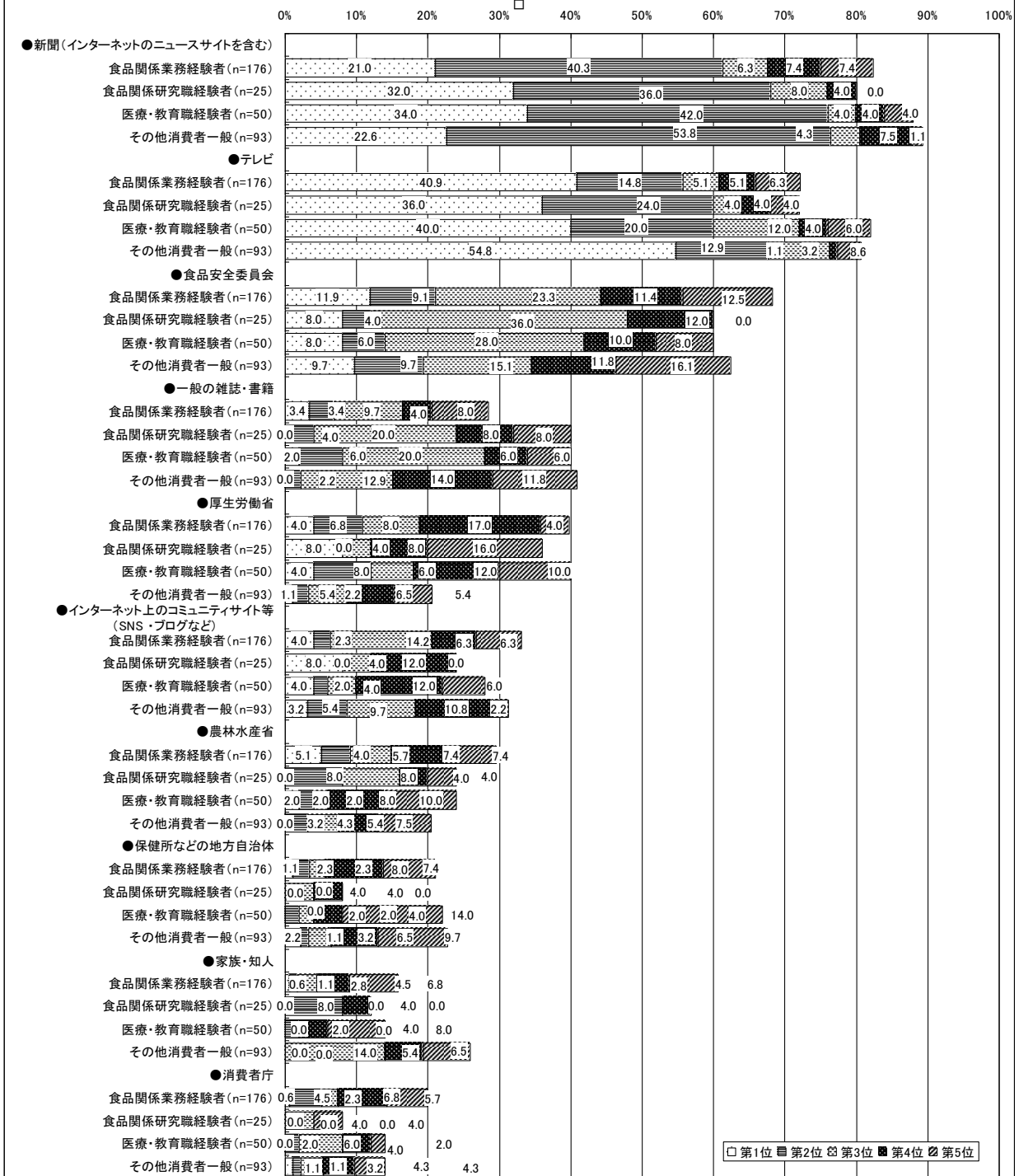




放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(上位10位)



放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(上位10位)



問 6：その他（具体的に記入してください）

（1）1位（回答者数 2名）

原子力関係の測定器メーカー、勤務先企業内の情報との意見があった。

（2）2位（回答者数 1名）

個人で参加している食品安全リスクコミュニケーションの勉強会との意見があった。

（3）3位（回答者数 6名）

専門家の講演資料、文部科学省、同業者間の話題、様々な機関の研修会、県政だよりとの意見があった。

（4）4位（回答者数 2名）

勤務先での情報、県の広報誌との意見があった。

（5）5位（回答者数 8名）

職場、ラジオ、会員制食品宅配業者発信情報、分析機関、業界新聞・業界誌、文部科学省資料などの意見があった。

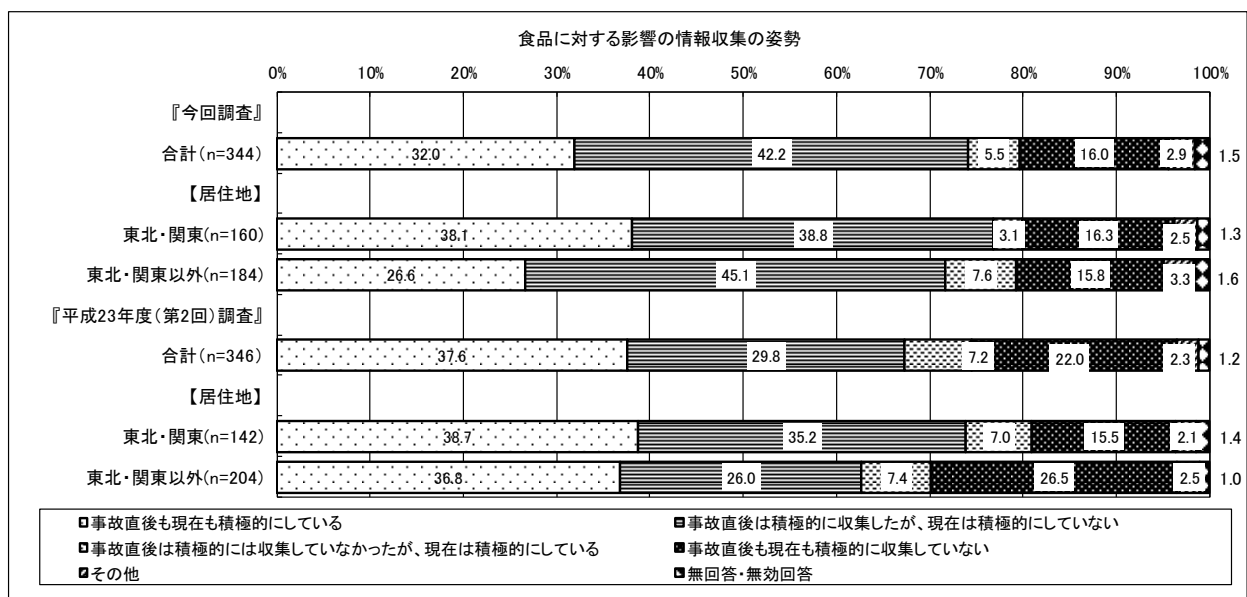
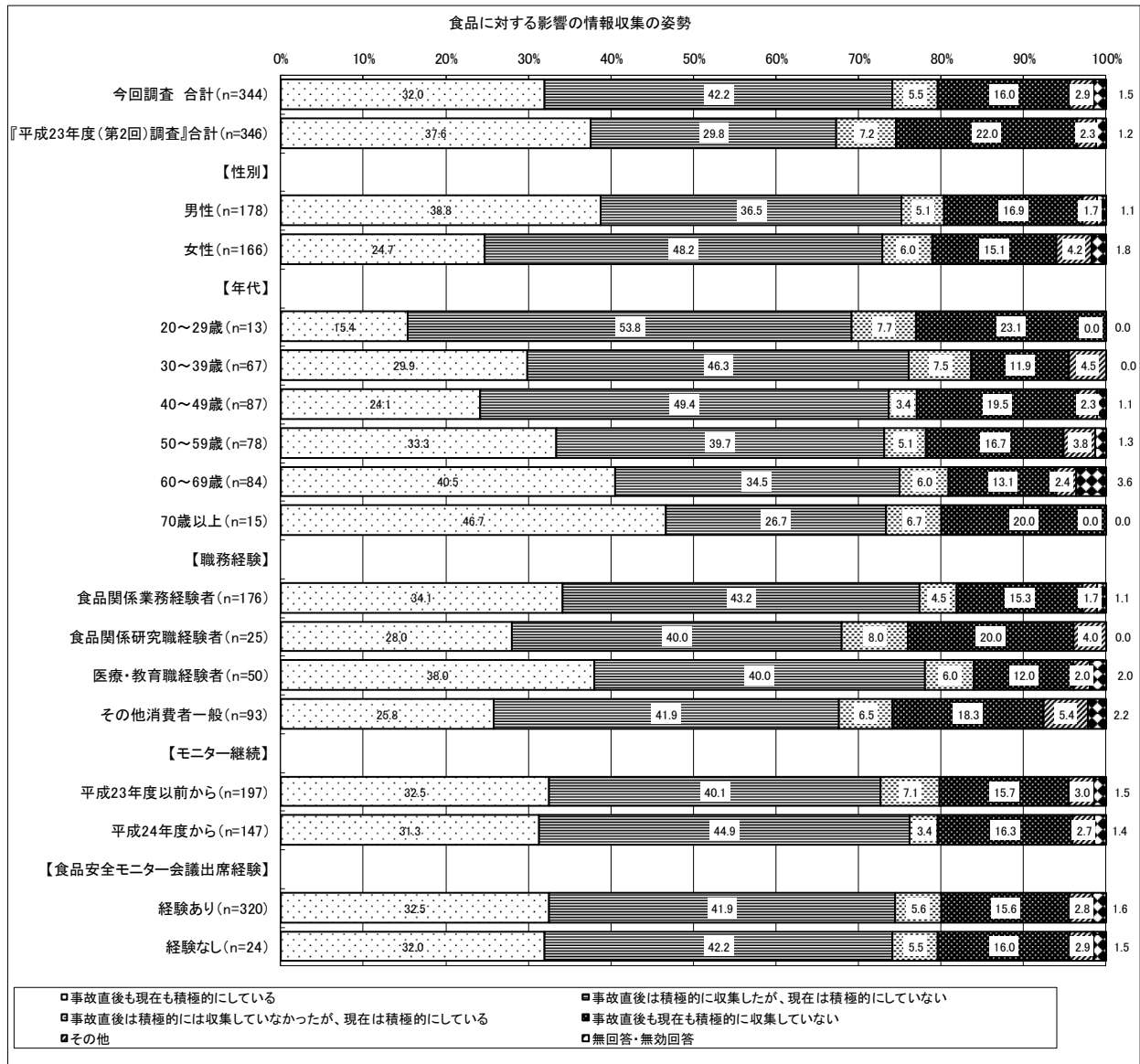
②食品に対する影響の情報収集の姿勢（問7）

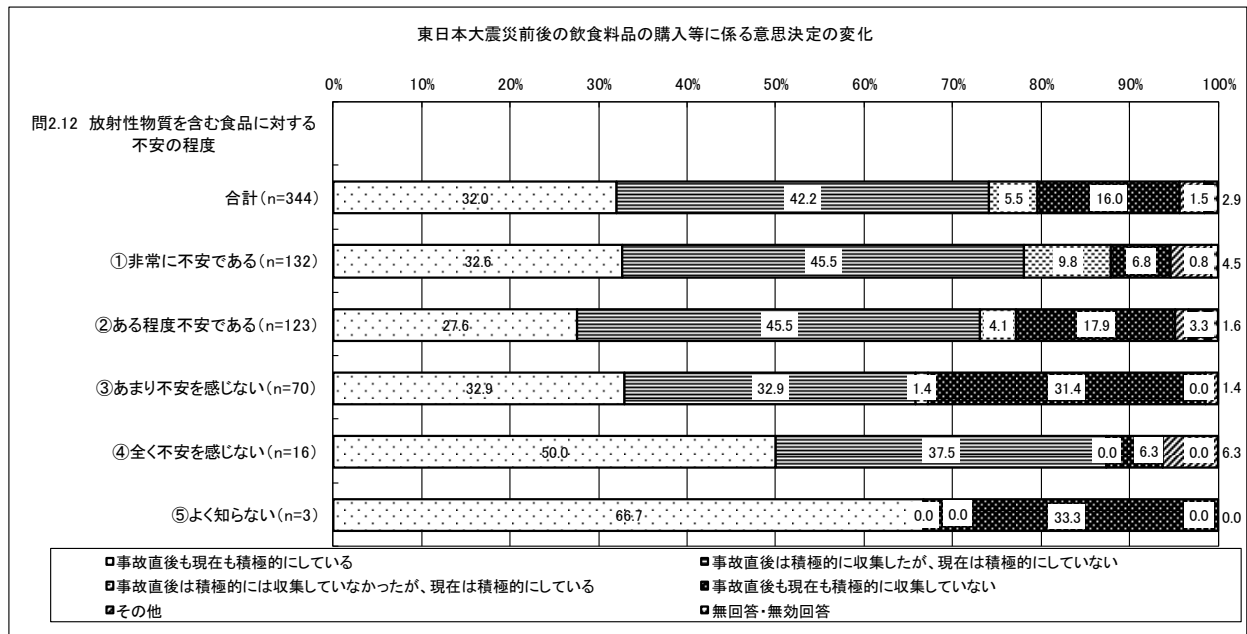
問7 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故発生後、食品に対する影響について情報収集を行っていますか。あてはまるものを選択肢1～5の中から1つ選んでください。

【選択肢】

- 1 事故直後も現在も積極的にしている
- 2 事故直後は積極的に収集したが、現在は積極的にしていない
- 3 事故直後は積極的には収集していなかったが、現在は積極的にしている
- 4 事故直後も現在も積極的に収集していない
- 5 その他（具体的に記入してください。）

- ◆ 各属性全体の回答割合は、「事故直後は積極的に収集したが、現在は積極的にしていない」(42.2%)、「事故直後も現在も積極的にしている」(32.0%)、「事故直後も現在も積極的に収集していない」(16.0%)、「事故直後は積極的には収集していなかったが、現在は積極的にしている」(5.5%)の順となっている。
- ◆ 今回調査では、平成23年度調査（第2回）に比べて、「事故直後は積極的にしたが、現在は積極的に収集していない」とする回答割合が増加（12.4%増加、29.8%→42.2%）している。
- ◆ 食品に対する影響の情報収集の姿勢を属性別に比較すると、性別では男性が「事故直後も現在も積極的にしている」が最も高いのに対し、女性は「事故直後は積極的に収集したが、現在は積極的にしていない」が最も高い。
年代別では、年代が高くなるにつれて、「事故直後も現在も積極的にしている」の割合が増加する傾向にある。
- ◆ 今回調査と平成23年度調査（第2回）の結果について居住地別で比べると、「事故直後は積極的にしたが、現在は積極的に収集していない」とする回答割合が、東北・関東以外で19.1%（26.0%→45.1%）大幅に増加している。
- ◆ 問2の放射性物質を含む食品の健康影響に対する不安感と情報収集の姿勢との関係では、「事故直後も現在も積極的に収集していない」とする回答割合は、問2で「あまり不安を感じない」とした人で31.4%であり、他の選択肢に比べて高い。





問7：その他（具体的に記入してください）（回答者数6名）

積極的という程ではないが収集している、気にしていても調べないなどの意見があった。

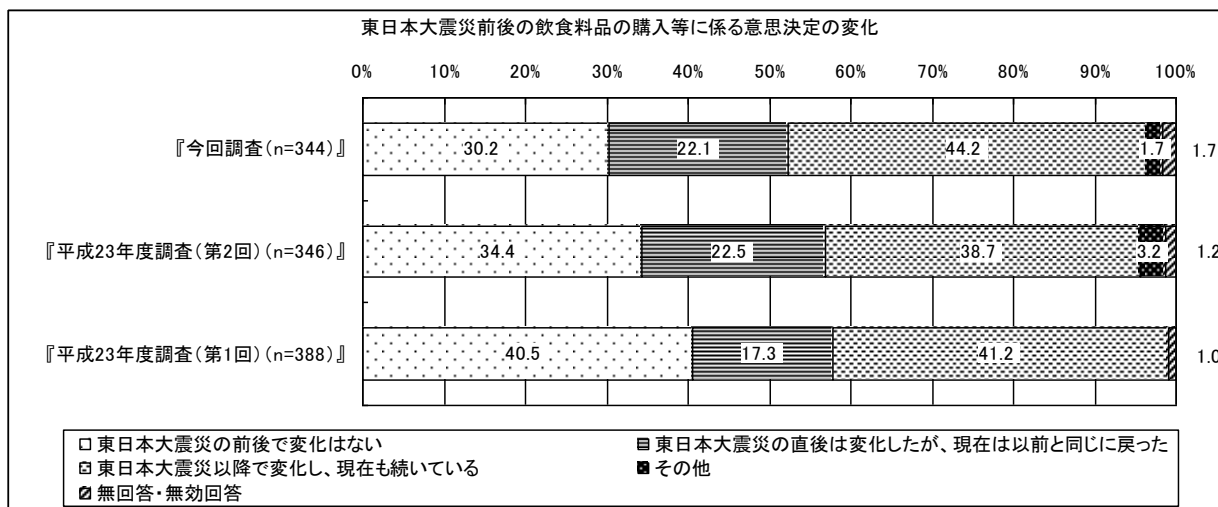
③東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化（問8）

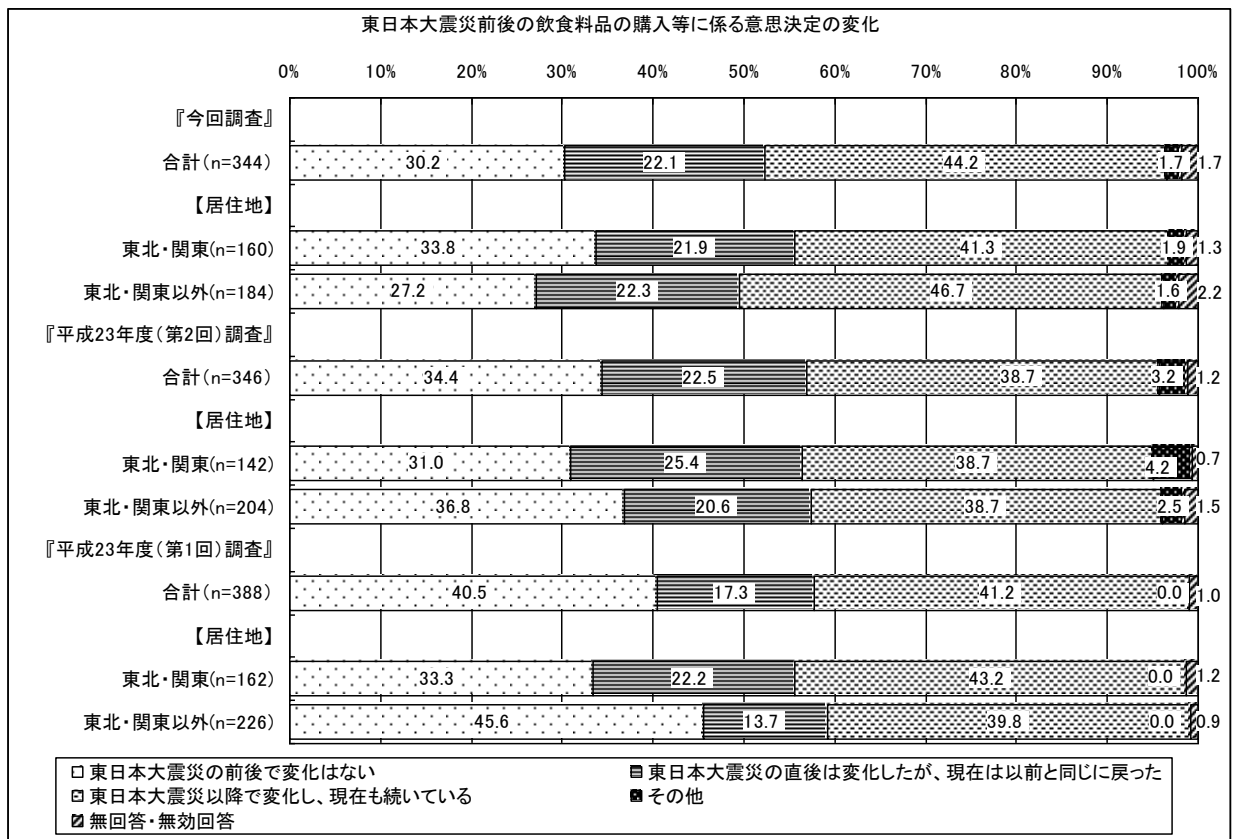
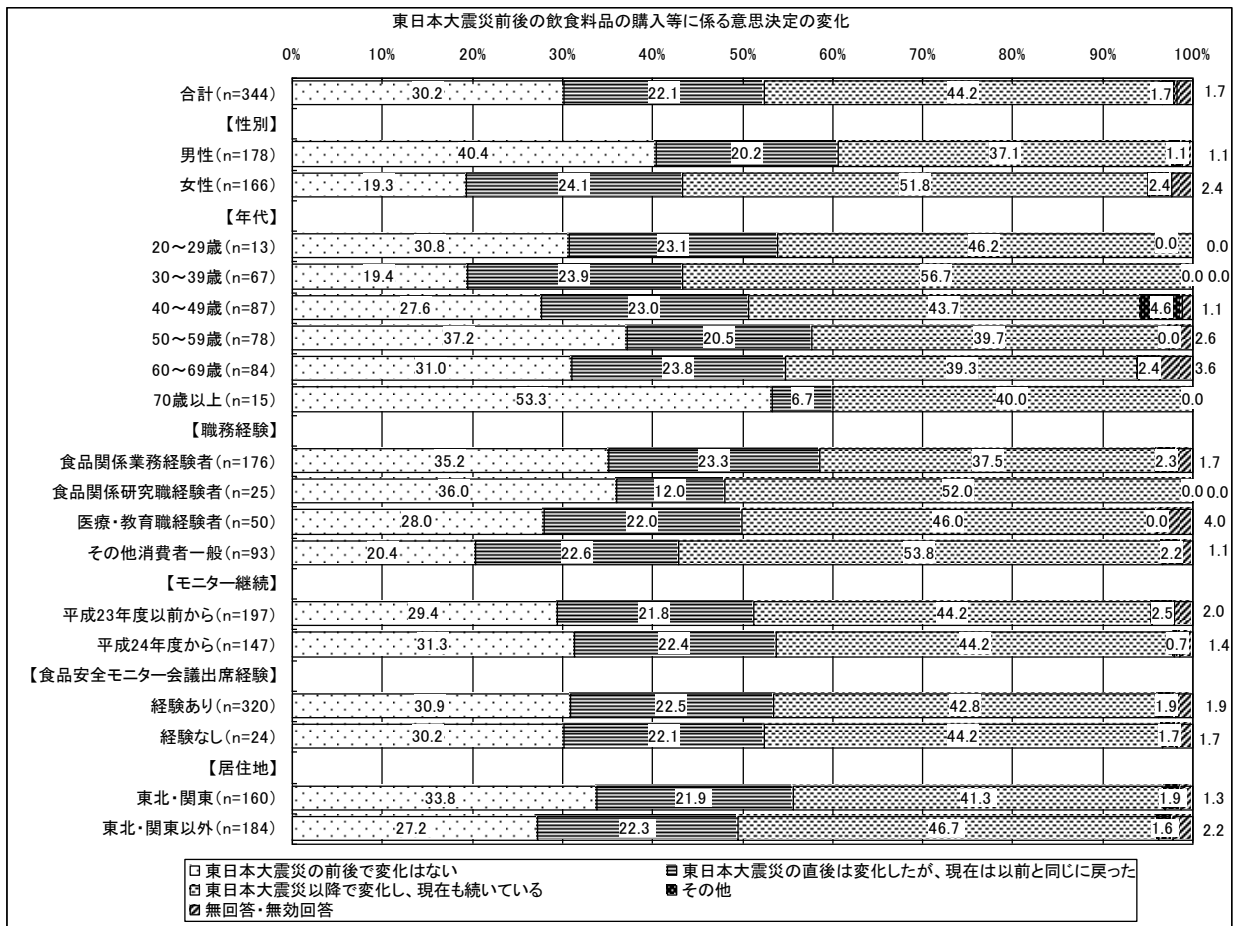
問8 東日本大震災の前後で、飲食料品（産地）の購入等に係る意思決定に変化はありましたか。選択肢1～4の中から1つ選んでください。

【選択肢】

- 1 東日本大震災の前後で変化はない
- 2 東日本大震災の直後は変化したが、現在は以前と同じに戻った
- 3 東日本大震災以降で変化し、現在も続いている
- 4 その他（具体的に記入してください。）

- ◆ 今回調査の回答割合は、「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」(44.2%)、「東日本大震災の前後で変化はない」(30.2%)、「東日本大震災の直後は変化したが、現在は以前と同じに戻った」(22.1%)の順となっている。
- ◆ 意思決定の変化を属性別に比較すると、性別で特に差が見られた。
- ◆ 性別で比べると、男性については「東日本大震災の前後で変化はない」とする回答割合が40.4%、女性については「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」が51.8%で最も高くなっている。
- ◆ 今回調査と平成23年度調査（第2回）、平成23年度調査（第1回）について居住地別で比較すると、東北・関東では顕著な変化は見られないが、東北・関東以外では、「東日本大震災の前後で変化はない」とする回答割合が減少傾向にあり、「東日本大震災の直後は変化したが、現在は以前と同じに戻った」とする回答割合は増加傾向にある。





問 8 : その他（具体的に記入してください）（回答者数 6 名）

贈答品を選ぶ際に注意するようになった、震災直後は変化したが今は生産者のことを考慮している、その都度変化しているなどの意見があった。

④ 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する科学的知見等の認識度と安心感（問9）

問9 放射性物質を含む食品による健康影響に関連して、これまでにいくつもの科学的知見等が示されています。以下のA～Hの事項について、知っていますか。【選択肢a】の中から当てはまるものを1つ選んでください。また、【選択肢a】の1～3の選択にかかわらず、以下の事項A～Hの事項についてどう感じますか。【選択肢b】の中から当てはまるものを1つ選んでください。

【事項】

- A 食品中の放射性物質のような低いレベルの放射線量での健康影響は、主に「がん」である。生涯でおおよそ100ミリシーベルトを追加で被ばくすると、健康影響の可能性が高まるのが科学的に確認されている。
- B 昨年原発事故以降の1年間で、日本人が食品から摂取した放射性物質は、0.002ミリシーベルト程度（東京）～0.02ミリシーベルト程度（福島や宮城）と厚生労働省により推計されている。他にも、京都大学や消費者団体など複数の団体が、おおよそ同程度と推計している。
- C 核実験や原発事故がなくても、もともと食べ物には、カリウム40などの自然放射性物質が含まれており、肉や魚、野菜では、食品1kg当たり100～200ベクレル程度とされている。
- D カリウム40などの自然放射性物質も、ヨウ素131やセシウム137などの原発事故由来の放射性物質も、人の健康影響のメカニズム（DNAの損傷）は同じである。健康影響の強さは、核種や年齢により異なり、乳幼児ではカリウム40の方がセシウム137よりも2～3倍程度影響が強いが、成人ではセシウム137の方がカリウム40よりも2倍程度影響が強いとされている。
- E 人間の体内にも自然放射性物質があり、体重65Kgの男性だと7900ベクレル程度と試算されている。
- F 日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、平均1.5ミリシーベルト程度（うち食品からは0.4ミリシーベルト程度）である。
- G 日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、地質によっても異なるため、日本国内でも0.4ミリシーベルト程度の地域差があるが、それらの地域によるがんリスクの差は科学的に確認されていない。
- H 国立がんセンターによると、放射線によるがんリスクと、生活習慣によるがんリスクは、以下のよう
に比較されている。
- ・ 喫煙や大量飲酒によるがんリスクは、放射線量に換算すると1,000-2,000ミリシーベルト程度
 - ・ 肥満や痩せすぎ、運動不足や塩分の摂り過ぎによるがんリスクは、放射線量に換算すると200-500ミリシーベルト程度
 - ・ 野菜不足や受動喫煙によるがんリスクは、放射線量に換算すると100-200ミリシーベルト程度

【選択肢a】

- 1 よく知っている
- 2 何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない
- 3 まったく知らない

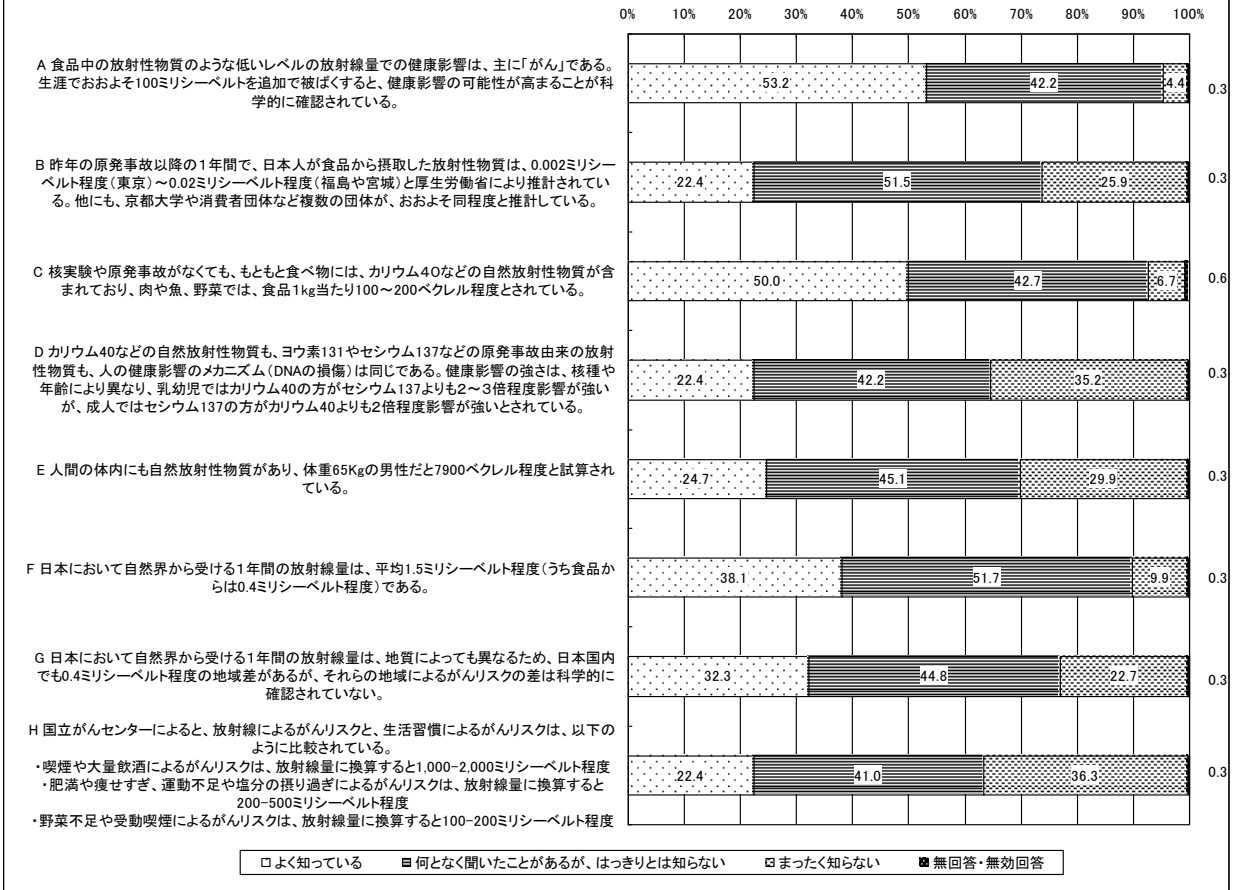
【選択肢b】

- 1 安心感がある（安心感がある理由を記入してください）
- 2 安心感がない（安心感がない理由を記入してください）

【認識度】

- ◆ 今回調査で「よく知っている」とする回答割合が高いのは、「A 食品中の放射性物質のような低いレベルの放射線量での健康影響は、主に「がん」である。生涯でおおよそ 100 ミリシーベルトを追加で被ばくすると、健康影響の可能性が高まることが科学的に確認されている。」(53.2%)、「C 核実験や原発事故がなくても、もともと食べ物には、カリウム 40 などの自然放射性物質が含まれており、肉や魚、野菜では、食品 1 kg 当たり 100~200 ベクレル程度とされている。」(50.0%)であり、いずれも半数を超えている。ただし、回答者が食品安全委員会から評価結果等の情報提供が定期的になされている食品安全モニターである点に留意する必要がある。
- ◆ 一方、「まったく知らない」「何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない」とする回答割合が高かったのは、
 - 「B 昨年の原発事故以降の 1 年間で、日本人が食品から摂取した放射性物質は 0.002 ミリシーベルト程度（東京）~0.02 ミリシーベルト程度（福島や宮城）と厚生労働省により推計されている。他にも、京都大学や消費者団体など複数の団体が、おおよそ同程度と推計している。」(77.4%)、
 - 「D カリウム 40 などの自然放射性物質も、ヨウ素 131 やセシウム 137 などの原発事故由来の放射性物質も、人の健康影響のメカニズム（DNA の損傷）は同じである。健康影響の強さは、核種や年齢により異なり、乳幼児ではカリウム 40 の方がセシウム 137 よりも 2~3 倍程度影響が強いが、成人ではセシウム 137 の方がカリウム 40 よりも 2 倍程度影響が強いとされている。」(77.4%)、
 - 「H 国立がんセンターによると、放射線によるがんリスクと、生活習慣によるがんリスクは、以下のように比較されている。
 - ・喫煙や大量飲酒によるがんリスクは、放射線量に換算すると 1,000~2,000 ミリシーベルト程度
 - ・肥満や痩せすぎ、運動不足や塩分の摂り過ぎによるがんリスクは、放射線量に換算すると 200~500 ミリシーベルト程度
 - ・野菜不足や受動喫煙によるがんリスクは、放射線量に換算すると 100~200 ミリシーベルト程度」(77.3%)、
 - 「E 人間の体内にも自然放射性物質があり、体重 65 kg の男性だと 7900 ベクレル程度と試算されている」(75.0%)
- ◆ 各科学的知見について属性別で比べると、性別で差が見られた。いずれの科学的知見についても「よく知っている」とする回答割合は男性の方が高く、D を除く全ての科学的知見で 10% 以上の差がある。一方、いずれの科学的知見についても「まったく知らない」とする回答割合は女性の方が高く、B では 17.5%、D では 12.4%、E では 17.9%と差が大きい。

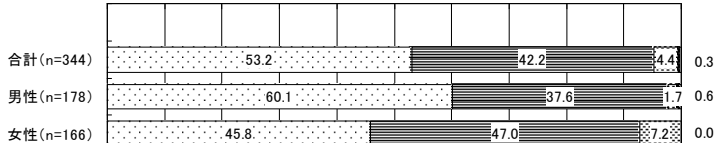
放射性物質を含む食品による健康影響に関する科学的知見等の認識度



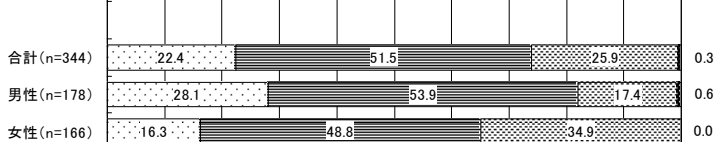
放射性物質を含む食品による健康影響に関する科学的知見等の認識度

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

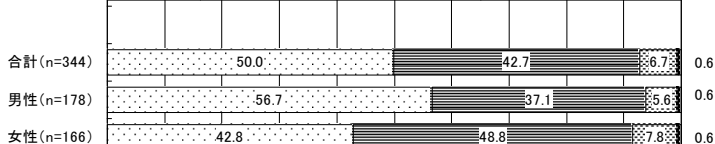
A 食品中の放射性物質のような低いレベルの放射線量での健康影響は、主に「がん」である。生涯でおおよそ 100 ミリシーベルトを追加で被ばくすると、健康影響の可能性が高まるのが科学的に確認されている。



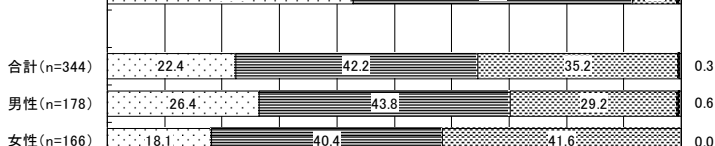
B 昨年の原発事故以降の1年間で、日本人が食品から摂取した放射性物質は、0.002ミリシーベルト程度(東京)~0.02ミリシーベルト程度(福島や宮城)と厚生労働省により推計されている。他にも、京都大学や消費者団体など複数の団体が、おおよそ同程度と推計している。



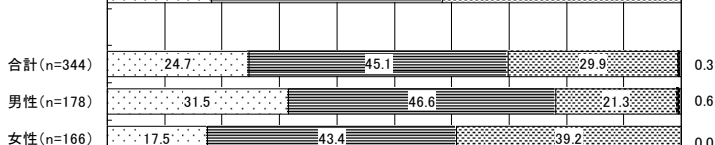
C 核実験や原発事故がなくても、もともと食べ物には、カリウム40などの自然放射性物質が含まれており、肉や魚、野菜では、食品1kg 当たり100~200 ベクレル程度とされている。



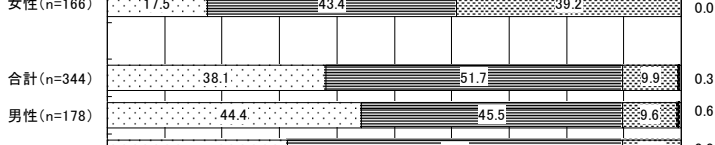
D カリウム40などの自然放射性物質も、ヨウ素131やセシウム137などの原発事故由来の放射性物質も、人の健康影響のメカニズム(DNAの損傷)は同じである。健康影響の強さは、核種や年齢により異なり、乳幼児ではカリウム40の方がセシウム137よりも2~3倍程度影響が強いが、成人ではセシウム137の方がカリウム40よりも2倍程度影響が強いとされている。



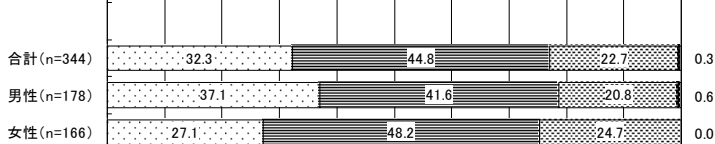
E 人間の体内にも自然放射性物質があり、体重65Kgの男性だと7900ベクレル程度と試算されている。



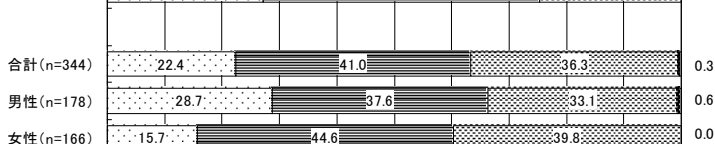
F 日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、平均1.5ミリシーベルト程度(うち食品からは0.4ミリシーベルト程度)である。



G 日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、地質によっても異なるため、日本国内でも0.4ミリシーベルト程度の地域差があるが、それらの地域によるがんリスクの差は科学的に確認されていない。



H 国立がんセンターによると、放射線によるがんリスクと、生活習慣によるがんリスクは、以下のように比較されている。
 ・喫煙や大量飲酒によるがんリスクは、放射線量に換算すると1,000-2,000ミリシーベルト程度
 ・肥満や痩せすぎ、運動不足や塩分の摂り過ぎによるがんリスクは、放射線量に換算すると200-500ミリシーベルト程度
 ・野菜不足や受動喫煙によるがんリスクは、放射線量に換算すると100-200ミリシーベルト程度

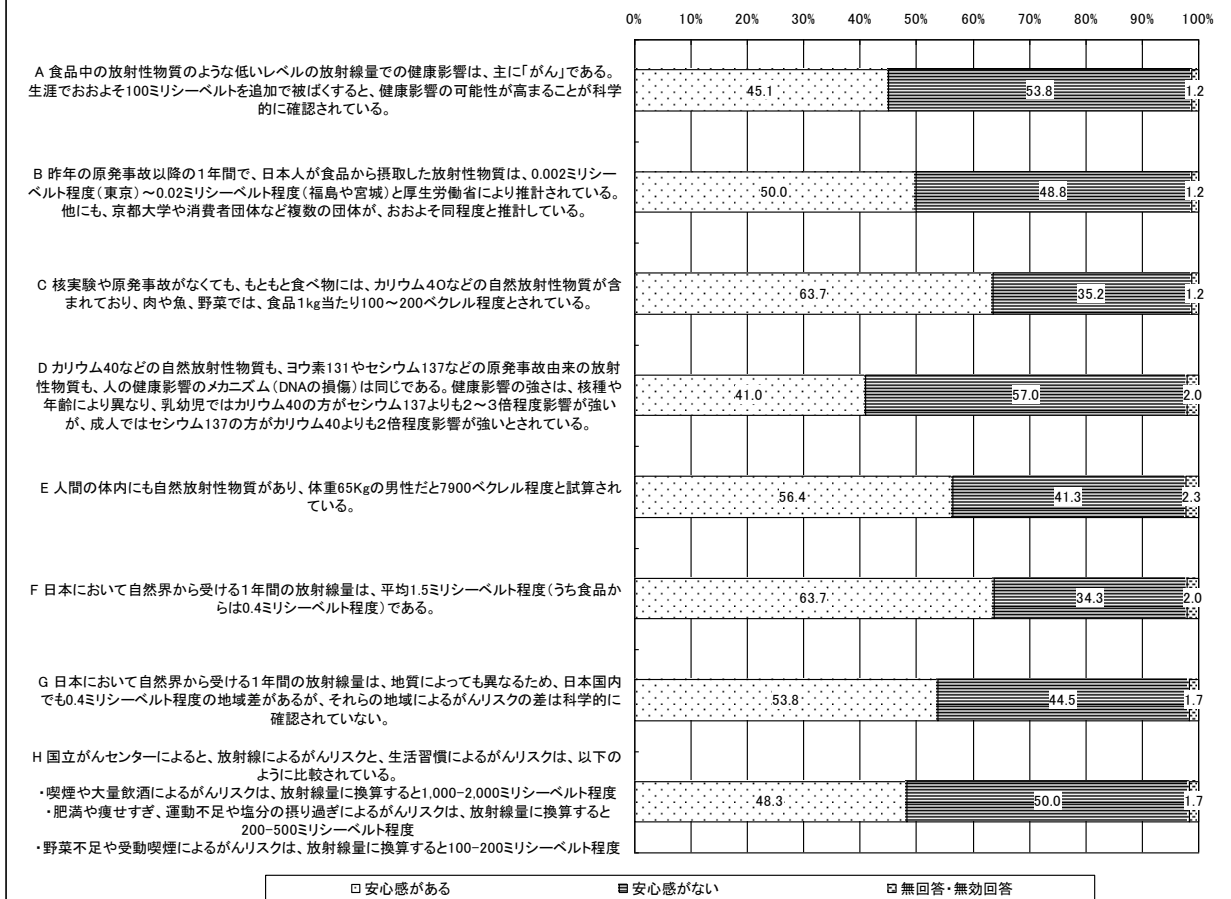


□ よく知っている ■ 何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない ▨ まったく知らない ■ 無回答・無効回答

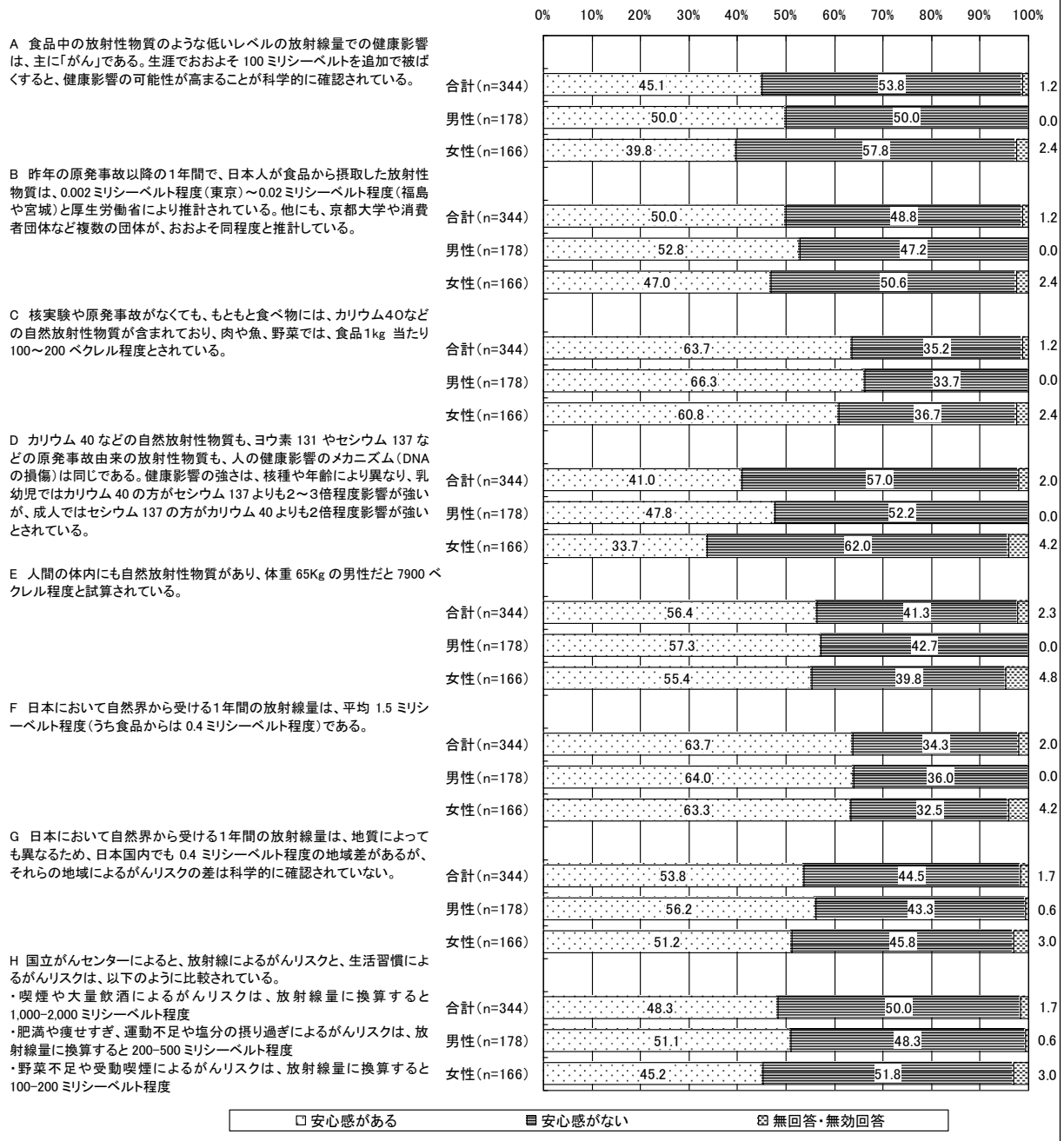
【安心感】

- ◆ 今回調査で「安心感がある」とする回答割合の上位3事項は、
 - 「C 核実験や原発事故がなくても、もともと食べ物には、カリウム40などの自然放射性物質が含まれており、肉や魚、野菜では、食品1kg当たり100~200ベクレル程度とされている。」、
 - 「F 日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、平均1.5ミリシーベルト程度（うち食品からは0.4ミリシーベルト程度）である。」、
 - 「E 人間の体内にも自然放射性物質があり、体重65Kgの男性だと7900ベクレル程度と試算されている。」であり、いずれも「安心感がない」とする回答割合より高くなっている。
特に「C」と「F」では、「安心感がある」と「安心感がない」の差がそれぞれ28.5%、29.4%と大きい。
- ◆ 「安心感がない」とする回答割合が「安心感がある」に比べて高いのは、
 - 「A 食品中の放射性物質のような低いレベルの放射線量での健康影響は、主に「がん」である。生涯でおおよそ100ミリシーベルトを追加で被ばくすると、健康影響の可能性が高まることが科学的に確認されている。」、
 - 「D カリウム40などの自然放射性物質も、ヨウ素131やセシウム137などの原発事故由来の放射性物質も、人の健康影響のメカニズム（DNAの損傷）は同じである。健康影響の強さは、核種や年齢により異なり、乳幼児ではカリウム40の方がセシウム137よりも2~3倍程度影響が強いが、成人ではセシウム137の方がカリウム40よりも2倍程度影響が強いとされている。」、
 - 「H 国立がんセンターによると、放射線によるがんリスクと、生活習慣によるがんリスクは、以下のように比較されている。
 - ・喫煙や大量飲酒によるがんリスクは、放射線量に換算すると1,000-2,000ミリシーベルト程度
 - ・肥満や痩せすぎ、運動不足や塩分の摂り過ぎによるがんリスクは、放射線量に換算すると200-500ミリシーベルト程度
 - ・野菜不足や受動喫煙によるがんリスクは、放射線量に換算すると100-200ミリシーベルト程度」となっている。
- ◆ 各科学的知見について属性別で比べると、性別で差が見られた。いずれの科学的知見についても
「安心感がある」とする回答割合は男性の方が高く、Aでは10.2%、Dでは14.1%と差が大きい。
一方、EとFを除く全ての科学的知見について「安心感がない」とする回答割合は女性の方が高い。

放射性物質を含む食品による健康影響に関する科学的知見等の安心感



放射性物質を含む食品による健康影響に関する科学的知見等の安心感



3) 食中毒について

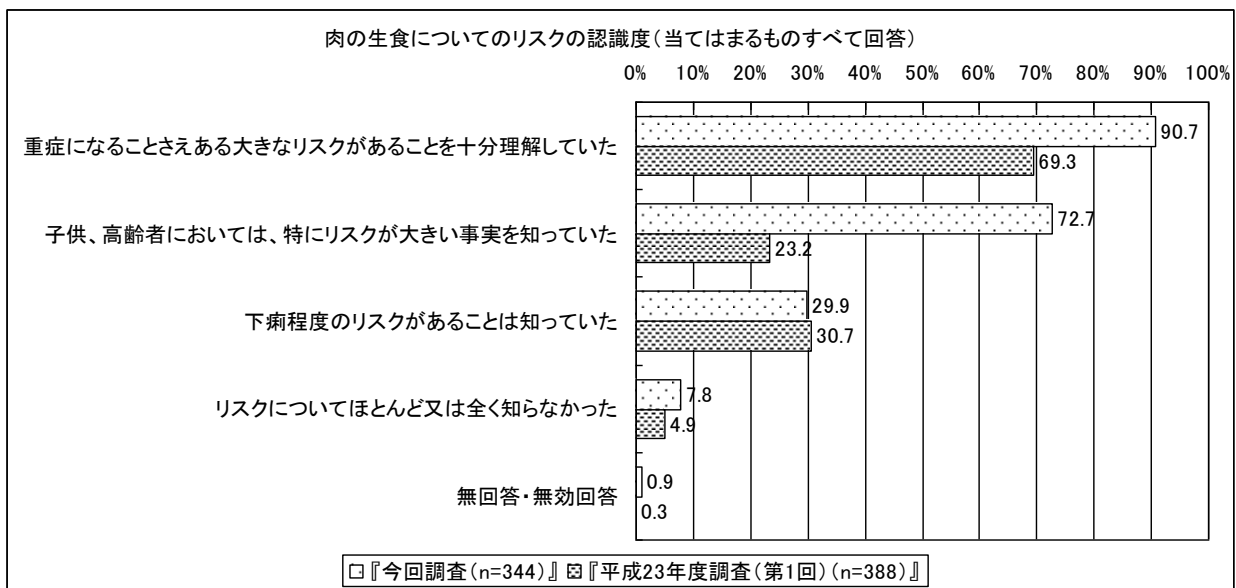
①肉の生食についてのリスクの認識度 (問 10)

問 10 肉（臓器を含む）を生で食べることのリスクについて知っていますか。選択肢 1～4 の中から当てはまるものをすべて選んでください。

【選択肢】

- 1 重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している
- 2 下痢程度のリスクがあることは知っている
- 3 リスクについてほとんど又は全く知らない
- 4 子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っている

- ◆ 肉の生食についてのリスクの認識度の回答割合の高かった順は、「重症になることさえある大きなリスクがあることを充分理解していた」(90.7%)、「子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っていた」(72.7%)、「下痢程度のリスクがあることは知っていた」(29.9%)、「リスクについてほとんど又は全く知らなかった」(7.8%)の順となっております、上位 2 項目が突出していた。
- ◆ 今回調査と平成 23 年度調査（第 1 回）を比べると、「重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解していた」、「子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っていた」で回答割合が増加しており、特に「子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っていた」では、49.5% (23.2%→72.2 %) 大幅に増加している。



②肉の生食の場所と頻度（問 11）

問 1 1 過去 1 年間に馬、豚、鶏の肉（臓器を含む）を生で食べたことがありますか。その場所について、肉の種類別に選択肢 1～4 の中から 1 つずつ選んでください。

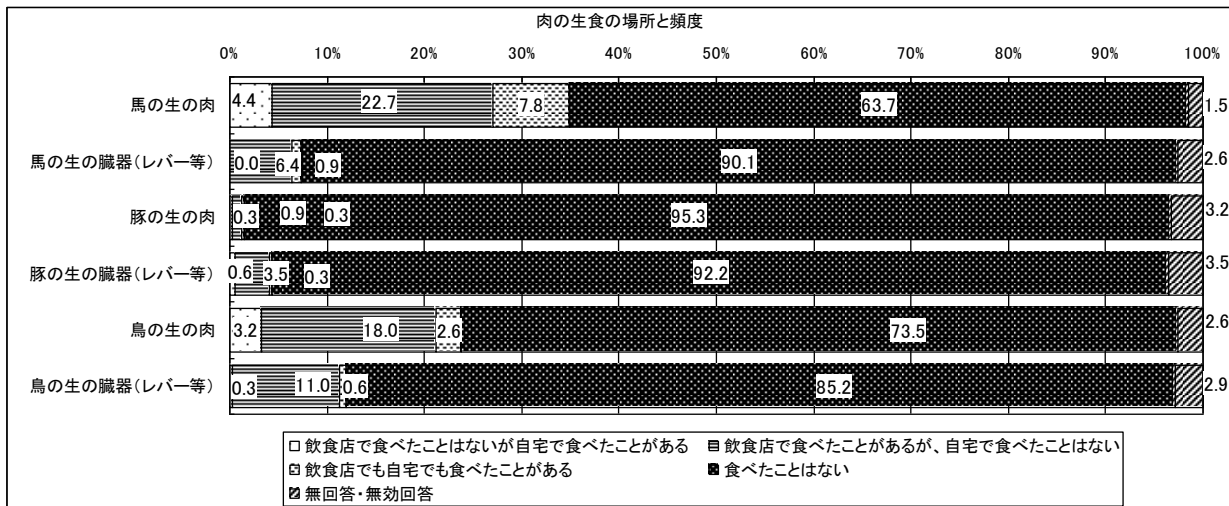
【肉の種類】

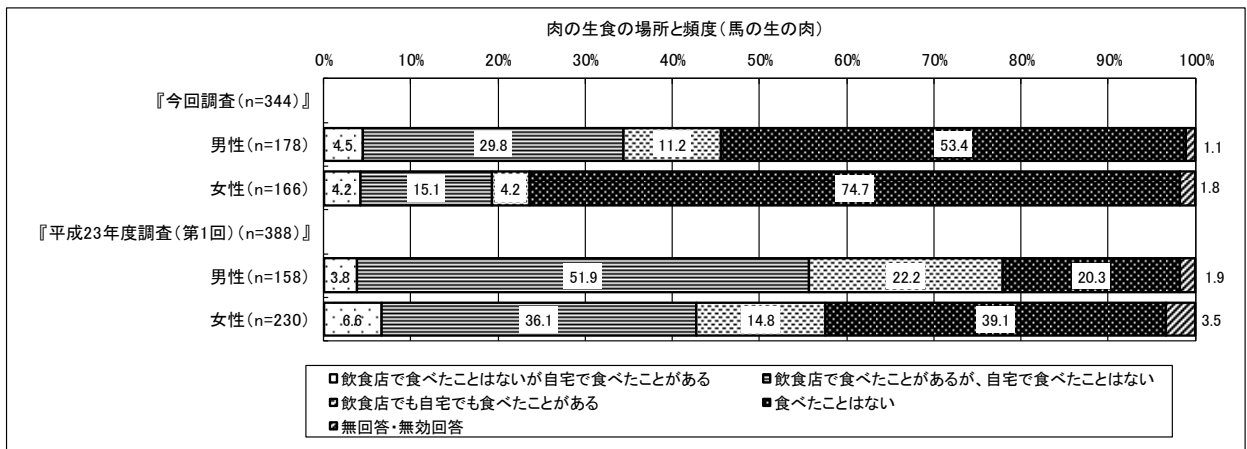
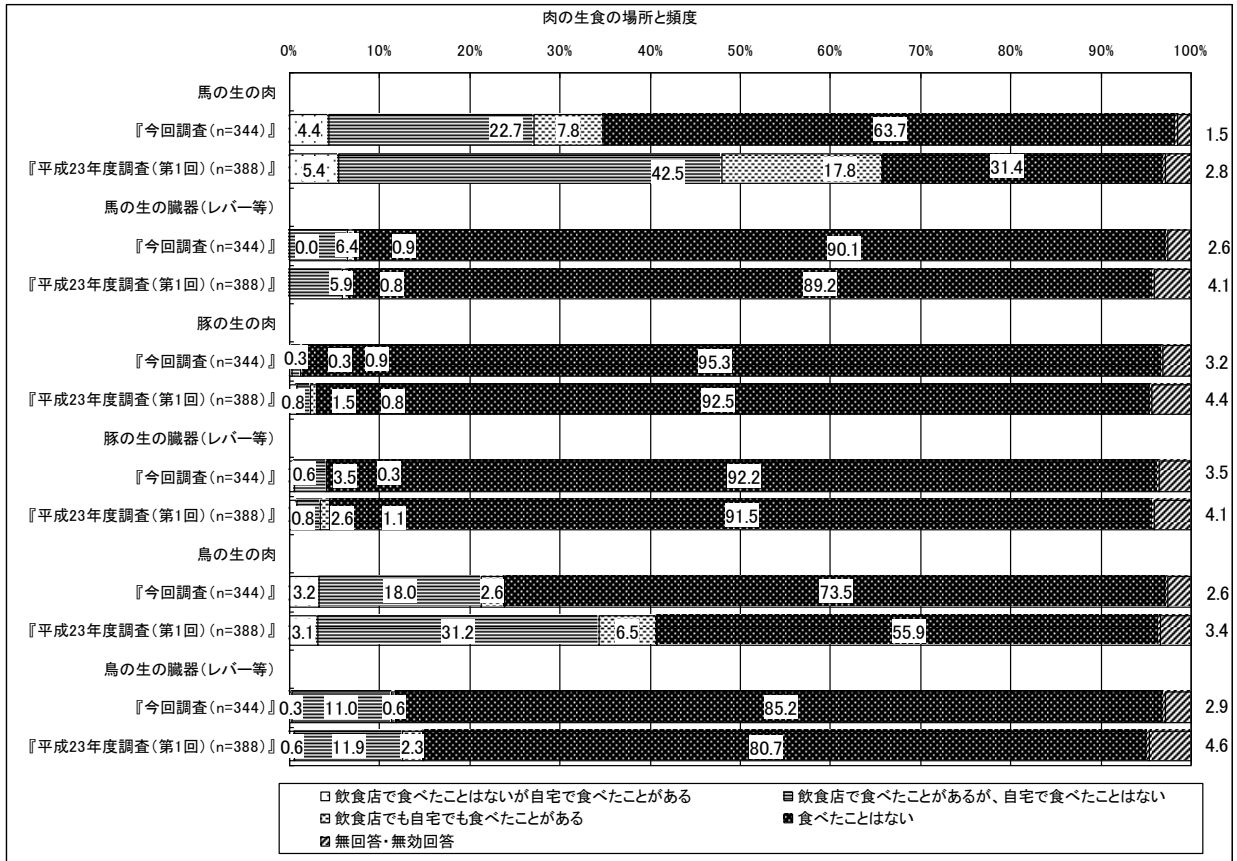
- A 馬の生の肉
- B 馬の生の臓器（レバー等）
- C 豚の生の肉
- D 豚の生の臓器（レバー等）
- E 鶏の生の肉
- F 鶏の生の臓器（レバー等）

【選択肢】

- 1 飲食店で食べたことはないが自宅で食べたことがある
- 2 飲食店で食べたことがあるが、自宅で食べたことはない
- 3 飲食店でも自宅でも食べたことがある
- 4 食べたことはない

- ◆ 肉の生食の場所と頻度の回答割合を比べると、馬の生の肉、鳥の生の肉については、それぞれ 20% 以上が食べたことがあると回答している。食べたことがあるとする回答割合は、馬の生の肉（34.9%）、鳥の生の肉（23.8%）、鳥の生の臓器（レバー等）（11.9%）、馬の生の臓器（レバー等）（7.3%）の順となっている。
- ◆ また、食べたことがあると回答した人が生食をした場所については、「飲食店で食べたことがあるが、自宅で食べたことはない」とする回答割合が全てにおいて最も高い。
- ◆ 今回調査と平成 23 年度調査（第 1 回）を比べると、全ての種類の肉について「食べたことはない」とする回答割合が増加。特に馬の生の肉、鳥の生の肉ではそれぞれ、32.3%（31.4%→63.7%）、17.6%（55.9%→73.5%）と大幅に増加している。
- ◆ 馬の生の肉について、属性で比較すると、性別で女性の方が「食べたことはない」とする回答割合が高くなっており、男性との差は 21.3%となっている。





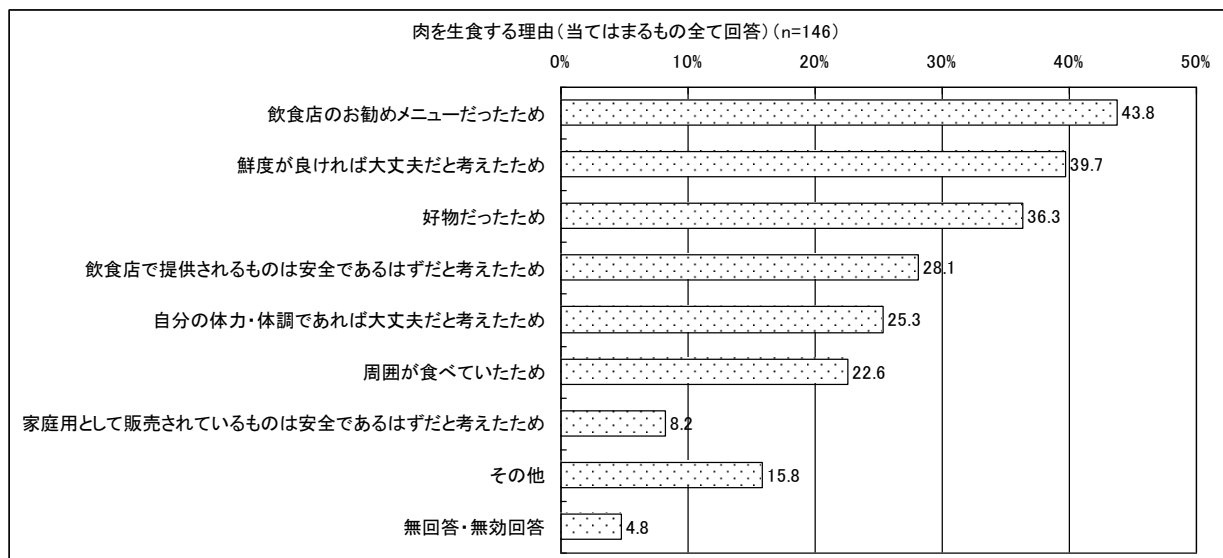
③肉を生食する理由（問12）

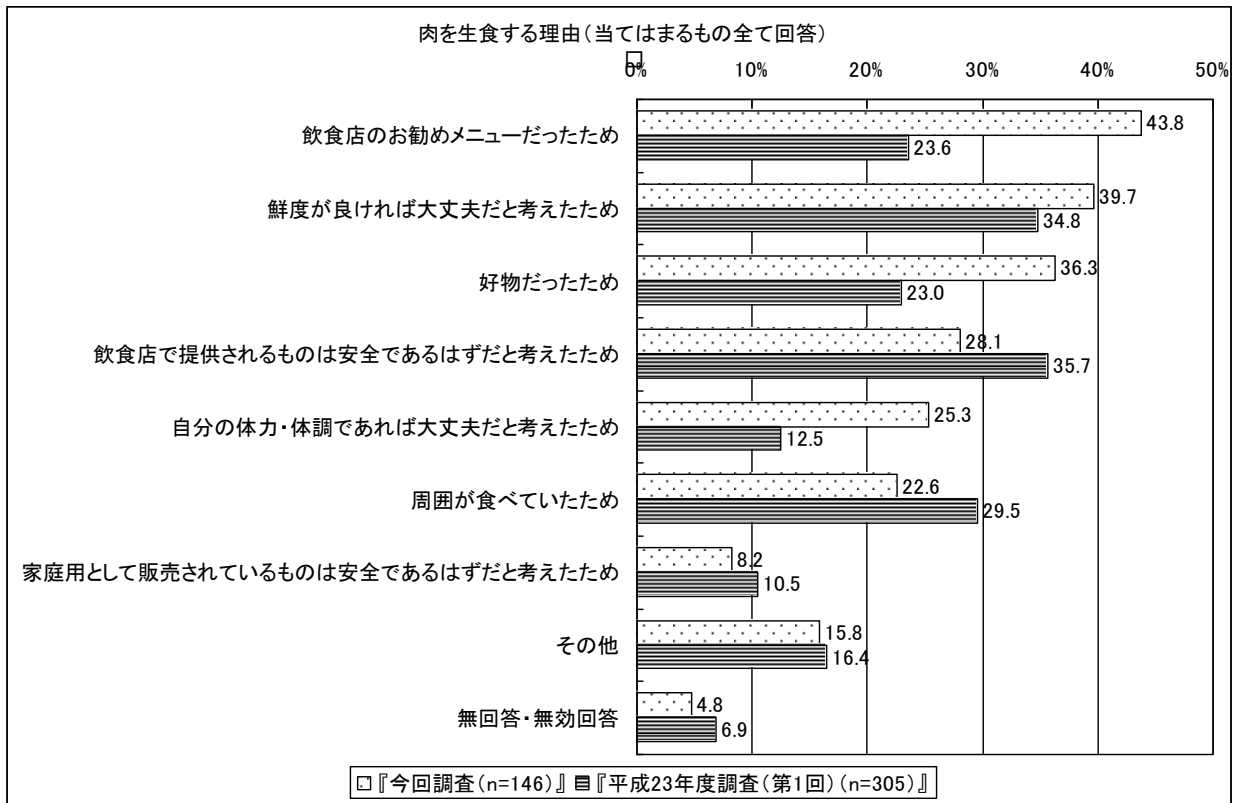
問12 問11において食べたことがある方（1～3を選んだ方）にお聞きします。馬、豚、鶏の肉（臓器を含む）を生で食べた理由について、選択肢1～8の中から、当てはまるものをすべて選んでください。

【選択肢】

- 1 好物だったため
- 2 飲食店のお勧めメニューだったため
- 3 周囲が食べていたため
- 4 鮮度が良ければ大丈夫だと考えたため
- 5 飲食店で提供されるものは安全であるはずだと考えたため
- 6 家庭用として販売されているものは安全であるはずだと考えたため
- 7 自分の体力・体調であれば大丈夫だと考えたため
- 8 その他（具体的に記入してください）

- ◆ 肉を生食する理由の回答割合の上位3事項は、「飲食店のお勧めメニューだったため」（43.8%）、「鮮度が良ければ大丈夫だと考えたため」（39.7%）、「好物だったため」（36.3%）となっている。
- ◆ 今回調査と平成23年度調査（第1回）を比べると、「飲食店のお勧めメニューだったため」、「鮮度が良ければ大丈夫だと考えたため」、「好物だったため」、「自分の体力・体調であれば大丈夫だと考えたため」で回答割合が増加しており、特に「飲食店のお勧めメニューだったため」（20.2%増加、23.6%→43.8%）、「好物だったため」（13.3%増加、23.0%→36.3%）、「自分の体力・体調であれば大丈夫だと考えたため」（12.8%増加、12.5%→25.3%）は大きく増加している。





問12：その他（具体的に記入してください）（回答者数 24 名）

その土地の特産品であったから、馬肉の衛生管理は信用している、食中毒になる可能性は覚悟している、知人に誘われて断ることができずに、食中毒になったとしても食べたい等の意見があった。

4) 食品安全委員会が自ら行う食品健康影響評価について

①自ら評価を速やかに進めるべきと考える物質等 (問 13)

問 13 あなたが、「自ら評価」を速やかに進めるべきと考える物質等があれば、次の選択肢の中から当てはまるものをすべて選んでください。特になければ「6 なし」を選択してください。1～5以外に進めるべき物質等があり、「7 その他」を選んだ場合においては、具体的な物質名を記入するとともに、ア (評価の必要性)、イ (危害要因に関する情報)、ウ (国内外における評価状況、管理状況等)の情報についても必ず記入してください。

【選択肢】

- 1 鉛 (※)
- 2 オクラトキシン (※)
- 3 ヒ素 (※)
- 4 アルミニウム (※)
- 5 アクリルアミド (※)
- 6 なし
- 7 その他 (具体的に物質等を記入してください。また、次のア～ウについても必ず記入してください。)

ア 評価の必要性 (漠然とした不安ではなく、科学的知見に基づき自ら評価を必要と考える具体的な理由、健康被害の有無等を記入してください。)

イ 危害要因に関する情報 (どのような食品に含まれ、人がどの程度摂取しているか、また、新たな科学的知見の根拠となる文献等があれば、その出典名を記入してください。可能であれば文献等は送付してください。)

ウ 国内外における評価状況、管理状況等

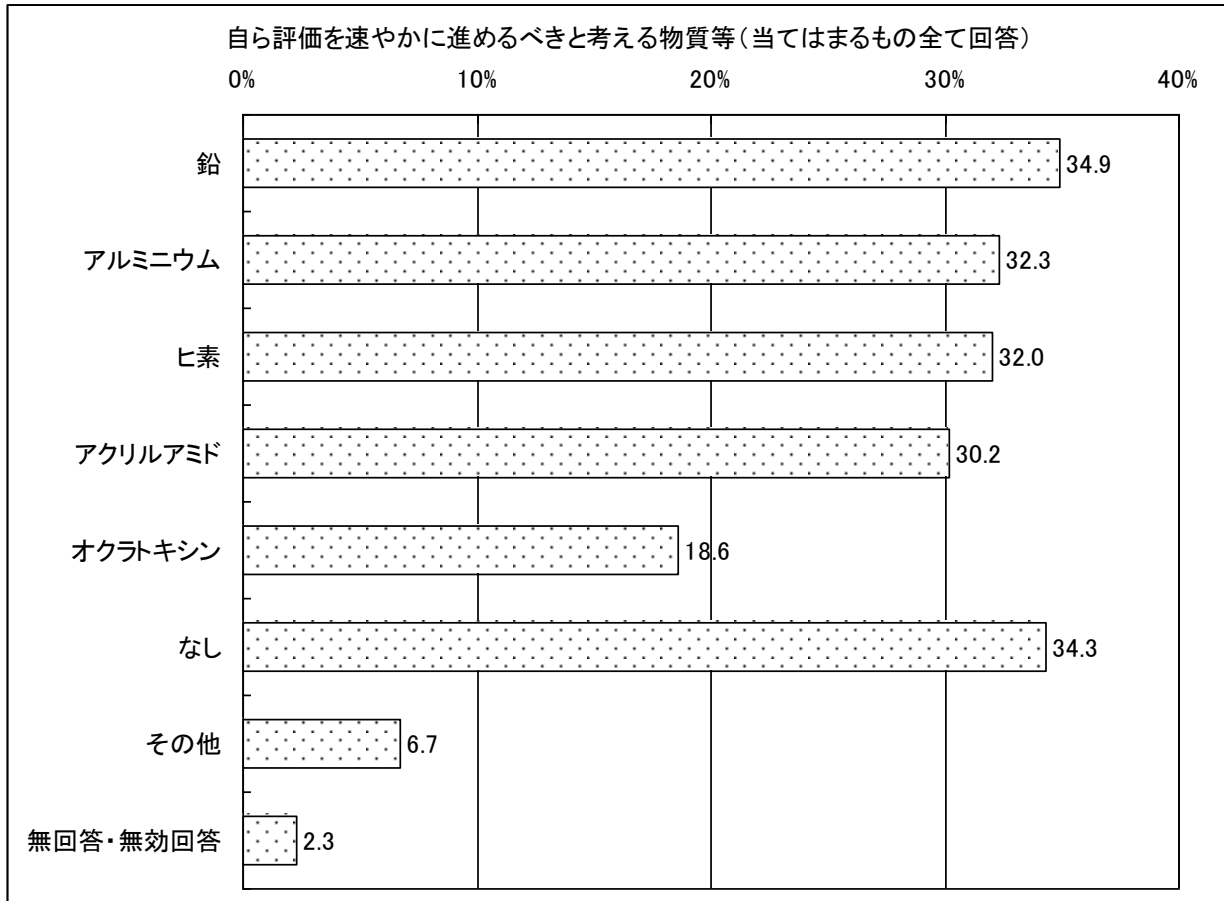
なお、過去に「自ら評価」の対象案件として提案されて企画等専門調査会において審議されたが候補とならなかった又は食品健康影響評価が行われなかった案件 (別紙1及び別紙2参照)については、その後、新たな科学的知見が得られていない場合、除外事由に該当し、選考の対象になりませんのでご注意ください。

御提案いただいた物質等に関連する情報については、食品安全委員会事務局において案件候補として整理し、企画等専門調査会で審議されます。

「自ら評価」の選定の考え方については、「別紙3」を御参照ください。

(※) 過去に「自ら評価」の対象案件として決定され、現在、評価中のもの

- ◆ 食品安全委員会が自ら評価を速やかに進めるべきと考える物質の回答割合は、「鉛」(34.9%)、「アルミニウム」(32.3%)、「ヒ素」(32.0%)、「アクリルアミド」(30.2%)、「オクラトキシン」(18.6%)の順となっている。



問13：その他（具体的に記入してください）（回答者数16名）

選択肢以外（その他）の回答では、亜硝酸塩、飲料水中のバナジウム、カルシウム塩、寄生虫、魚醬（キムチ）、クドア、人工アミノ酸、人工甘味料（スクラロース等）、セシウム、ソルビン酸・放射線、豆乳アレルギー、ポリブチレンテレフタレートとほうろう用銅版、ラック色素といった意見があった。これらの意見を含め、現在、企画等専門調査会で自ら評価案件の選定が行われているところである。

分類整理表

1) 食品の安全性に係る危害要因等について

①食品の安全性の観点から感じている不安の程度（問2）

問2 A～Lに掲げる事項について、食品の安全性の観点からあなたはどう思いますか。それぞれの事項について、選択肢1～5の中から1つずつ選んでください。また、A～Lの事項以外に食品の安全性の観点で気になるものがあれば、「M その他」に具体的な例を記入し、それについても選択肢1～5の中から1つ選んでください。

問2のA～Lの事項以外に食品の安全性の観点で気になる事項について、具体的な例を不安の程度（問2）、不安を感じる理由（問3）、不安を感じない理由（問4）を整理。

（回答者数=64人）

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由（その他）	不安を感じない理由	不安を感じない理由（その他）
食品関係業務経験者	男性	20～29歳	風評被害について	①非常に不安である	⑤事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分			
		30～39歳	賞味期限の張り替え	①非常に不安である	②行政による規制が不十分			
			低塩の塩辛、漬物や低糖のジャム等、伝統的な保存食品だが製法が変わって水分活性が高くなっているようなもの（選択肢F. 有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等に含まれるのかもしれませんが）	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	微生物制御への知識が十分でないままレシピ変更している事例があるのではないかと、過去事例があるということもあって、思う		
		40～49歳	アレルギー物質表示違反	②ある程度不安である				
			食品、化粧品アレルギー	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
			アレルギー	②ある程度不安である				
			未知の食中毒微生物、毒性物質	②ある程度不安である				
			食品テロ	③あまり不安を感じない			⑦漠然とした安心	

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
食品関係業務経験者	男性	50～59歳	食肉の生食(規制逃れ)	①非常に不安である	②行政による規制が不十分			
			食品安全に係る課題や不安が生じた場合、食品安全委員会からのメディアや消費者庁への正しい情報提供と国民への食に関する正しい情報提供と周知への取り組みに関し、情報及び方向性に関する適切なハンドリングの期待	①非常に不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分			
			中国産輸入食品	①非常に不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
			水産物の放射能汚染	①非常に不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問			
			汚染有機物の影響	③あまり不安を感じない				
			飲料水、先日のホルムアルデヒド騒動	②ある程度不安である				
			脂質、糖分、塩分など官能に響く食事嗜好とバランスが気になる	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安			
			最近注目されるようになった寄生虫	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
			食料の需給動向	①非常に不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
			食品表示	①非常に不安である	⑧その他			
			アレルギー物質	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
			浄水場への毒物混入	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安			

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
食品関係業務経験者	男性	50～59 歳	アレルギー物質の表示について表示を奨励されている18品目	①非常に不安である	②行政による規制が不十分			
			食品安全に関するマスコミ報道	①非常に不安である	⑧その他			
		60～69 歳	放射性物質による食品の汚染が生産者、消費者双方に不安と不信感を与えている	①非常に不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問			
			アレルギー	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分			
			栄養バランス	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安	若い世代で食育が浸透していない		
			食糧危機	①非常に不安である	⑦漠然とした不安	やがて来る食糧危機、安全の譲歩が起きることの懸念		
			特定の食品等に関わる意図的な安全情報	②ある程度不安である	⑧その他	テレビのキャスター等素人が知識のないまま無責任な発言をし、社会が容認している		
			魚介類中の寄生虫による健康危害(業務上)	②ある程度不安である	⑧その他	目視確認が難しいアニサキス、目視できないクドアは営業者にとって驚異的な存在		
			情報公開や表示	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分	情報が一般に理解できるように開示されているのか、又それが本当に正しいのか		
			街中の温泉	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
食品関係業務経験者	男性	60～69歳	上記すべての事項にかかわる人間の管理の確実性=ヒューマンエラー	①非常に不安である	⑧その他	ヒューマンエラーを防ぐてだては何か		
			韓国・中国輸入の食品	①非常に不安である	②行政による規制が不十分			
			印刷塗料	②ある程度不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問			
		70歳以上	マイコトキシンに関する規制を急ぐべきでは	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
			今規制されている以外の事例が出てきた場合	①非常に不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問			
			飲料水	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安			
	女性	30～39歳	電子レンジによる電磁波や栄養損失の影響	①非常に不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問			
			表示偽装	①非常に不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分			
		60～69歳	スーパーにおける衛生管理	①非常に不安である				

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
食品関係研究職経験者	男性	30～39 歳	中国からの輸入品	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
			賞味期限の定義について国民の理解が乏しいと思われまます。特に期限が切れてしまったら危険であるとか、保存温度が異なっても期限内は安全と勘違いしている等があり、情報提供に努める必要がある	②ある程度不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分			
			製造における衛生面での管理体制のとても不安を感じます。特に外食産業での厨房内衛生管理体制の誤認識による経度な食中毒やなどが多く見受けられます。また、アレルギー物質に対する認識と表示の温度差も多く(特に量販店惣菜など)消費者への偏った情報伝達の主要因になっていると感じています	①非常に不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分			
		40～49 歳	消費者の誤認識	①非常に不安である	⑧その他	当局が正しい情報を流しつづけたとしても、一部の消費者が不安をあおるような行動を周囲を巻き込んで行いがち。放射性物質に対する最近の例のように		

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
食品関係研究職経験者	男性	50～59歳	臭素酸カリウム	①非常に不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問			
			自然毒摂取(動植物、キノコ)	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安			
		60～69歳	ダイエット食品	②ある程度不安である				
			食中毒菌に対する抵抗力が低下しているのではないかと思います	②ある程度不安である	⑧その他	やみくもに細菌数を低減する風潮が強いこと		
			トクホ商品	②ある程度不安である	⑧その他	トクホ制度自体に疑問がある		
医療・教育職経験者	男性	40～49歳	輸入食品の安全性	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分			
		50～59歳	上記の情報提供のあり方	①非常に不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	行政からだけでなく、正しい情報をもっとだす必要がある		
		60～69歳	獣肉・魚肉生食	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分			
	女性	50～59歳	A添加物の中に含まれるが、肉の色付け(JAに努めている人から色をつけていると聞いた)、安全量をまもっていても、長年食べたり、鮮度がわからなかったりする	②ある程度不安である				
			輸入食品(特に中国製)	①非常に不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分			

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
医療・教育職経験者	女性	60～69 歳	食品添加物の食い合わせ	①非常に不安である	⑧その他	体内での添加物同士の化学変化による害はわからない		
			偏った食生活	①非常に不安である	⑧その他	好きなもの中心の食生活は健康を害するリスクが高くなる		
その他消費者一般	男性	30～39 歳	水の汚染	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安			
		40～49 歳	放射性物質は目に見えない。どれだけ汚染されていて、どれだけ危険なのか広く知られてない。隠そうと思えばいくらでも隠し通せる。それに、被害が出てもすぐに症状には表れない。やっかいな物質である。危険性をもっと広く周知させるべきである。そして避難の方法も	①非常に不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問			
		50～59 歳	海底泥に含まれるヒ素	②ある程度不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問	海底の泥にヒ素が含まれているらしいが、ヒジキは日本では規制がない。食べて蓄積した場合などの安全性の根拠に不審がある		

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
その他消費者一般	男性	60～69 歳	情報化時代にもかかわらず、消費者の食中毒に対する認識(微生物等)が乏しいように感じます。国は食中毒(事故)の未然防止のための情報提供やスピーディな対策を講じていただきたい	②ある程度不安である		③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分		
	女性	30～39 歳	口蹄疫や鳥インフルエンザなど	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安			
			食品表示全般に関する信頼性	①非常に不安である	⑧その他	企業自主性の表示であり、公的なチェックや検査があるわけがなく、信頼性が低い		
			ノロウイルス	①非常に不安である	⑧その他	子供など学校で感染することが多いので		
			食品の産地のいつわり(食品の生産地と消費地の両方の表示及び放射能検査表示がほしい)＝信頼問題	①非常に不安である				
		40～49 歳	食品衛生	②ある程度不安である	⑧その他	行政が事業者にとって適切な指導をしているのかが不安。そして消費者ができていないのかも不安。悪循環。行政は税金の無駄使いばかりで伝授できてない		

職務経験	性別	年代	事項	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)
その他消費者一般	女性	40～49 歳	食肉の生食のリスク	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	生食用としての販売が禁止されている中、お得意様には…や、裏メニューとして、また炙りレバーなどといった微妙な形で市場に出ているのを見聞きすると、販売者はもちろん、消費者へも生食の危険性を理解してもらえていないことに不安である		
		50～59 歳	産地偽装食品。アルミニウム認知症への影響	①非常に不安である			④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	

②食品の安全性の観点から不安を感じている理由（問3）

問3 問2の事項A～K及びMにおいて、「1 非常に不安である」又は「2 ある程度不安である」を選んだ事項がある方にお聞きます。それぞれの事項について、不安を感じる理由を選択肢1～8の中から1つずつ選んでください。

（1）食品添加物に不安を感じている理由

（回答者数=6人）

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49歳	未承認添加物の使用
	女性	40～49歳	事業者の法令遵守に全面的な信頼ができない
		60～69歳	規制はあるが行政による管理監督が不十分
その他消費者一般	男性	50～59歳	一般人にわかりにくい
	女性	30～39歳	大人にはたいして思わぬが、子どもにはよくないと多少思う不安
		40～49歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と、消費者の理解が不十分

（2）農薬に不安を感じている理由

（回答者数=6人）

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	女性	40～49歳	各農家の方により希釈倍率や出荷前の日数、散布頻度など使用方法をきちんと守っているか信用出来ない人もいると思うが、農協などの事業所で監視しきれないと思うから
		60～69歳	規制はあるが行政による管理監督が不十分
食品関係研究職経験者	男性	50～59歳	輸入食品の問題があるため
その他消費者一般	男性	50～59歳	一般人にわかりにくい
	女性	30～39歳	田畑で農薬は必要なことがあるが、全くないに超したことはないから
		40～49歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と、消費者の理解が不十分。しかし以前に比べて消費者の意識と関心は高まったのではないかと思う

(3) 家畜用抗生物質に不安を感じている理由

(回答者数=6人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と、選択肢の5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」の両方。情報が少なくよく分からず不安である
		50～59歳	耐性菌の出現に対する不安、特に人畜共通の抗生物質は使用すべきでない
	女性	40～49歳	家畜を飼育している中で抗生物質の取扱注意などの指導をされている為、影響は大きいので
医療・教育職経験者	男性	50～59歳	事業者自身の安全性に対する認識の程度
その他消費者一般	男性	50～59歳	一般人にわかりにくい
	女性	40～49歳	人でも副作用はあるのに家畜となると、どこまで診断、判断できるのか！人に及ぼす影響は

(4) 器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じている理由

(回答者数=7人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59歳	適切に検査・通関されていると信じているが、法が不備な国で加工・包装済とされた食品が輸入販売されていることや、他国で容器からの溶出報道があるため
		女性	30～39歳
		40～49歳	中国産の食品の容器包装には漠然とした不安がある
その他消費者一般	男性	50～59歳	一般人にわかりにくい
	女性	30～39歳	アルミニウム能症で痴呆になることを知っているから
		40～49歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と消費者の理解が不十分。事業者は理解し製造販売しているのか？普及は問題がある 多種多様なシリコン商品が急速に出回り安全性に疑問

(5) 汚染物質（カドミウム、メチル水銀等）に不安を感じている理由

(回答者数=7人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39 歳	幼稚園にて栽培したジャガイモのソラニンによる中毒事件がしばしば起こる。子をもつ親の立場から、このような例の安全管理は行政がしっかり指導しているのか、幼稚園側は危険性の認識がされているのか不安になる
		40～49 歳	1) 近隣の神栖市でヒ素による健康被害があった。発達障害になってしまった子供の事やその家族の事を考えると同情に堪えない。過去の公害問題や事件ではない現実がある
	女性	30～39 歳	今現在問題が表面化していないものが存在するかもしれず不安
		50～59 歳	印刷工場で胆管癌の発症や浄水場でクロロホルム検出など、今後、どのような事態が発覚するかわからないため
その他消費者一般	男性	40～49 歳	日本の米に含まれる濃度が高い
		50～59 歳	一般人にわかりにくい
	女性	40～49 歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と消費者の理解が不十分。除染の仕方を知らない

(6) 有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等に不安を感じている理由

(回答者数=12人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39 歳	将来的な有害微生物多様化の可能性、日本のルールと世界標準とのバランス
		40～49 歳	消費者の理解不測から来る食品の取り扱い不良
		50～59 歳	注意しても身の回りで常に起こり得る事象であることから、季節に併せて定期的に、当局による啓発が求められる
			未知、或いは新型の細菌・ウイルスの可能性 ふぐ毒で毎年死者が発生しているが画期的な対策がない
	60～69 歳	新型ウイルスや、抗生物質の不適切な使用による薬剤耐性菌の出現	
	女性	30～39 歳	危険危害に直結するが 100%安全は無く、提供側の事業者として不安
50～59 歳		有害微生物についてはまだまだ解明しきれていない部分が多くあり、今後どのようなリスクがあるのかわからないため	
60～69 歳		規制が末端のスーパー等への管理監督に事業者任せ、監督が不十分又、従業員への教育も不十分などところがある	
食品関係研究職経験者	男性	40～49 歳	微生物に関しては他の項目と異なり、その時点での対策がある程度問題なくとも、変異により無防備状態となりうるため
医療・教育職経験者	男性	50～59 歳	有害微生物が新たに発見されてくる可能性も大だから
その他消費者一般	女性	40～49 歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と、情報提供の仕方が悪すぎるために消費者の理解が低く、税金の無駄使いになっている

(7) BSE（牛海綿状脳症）に不安を感じている理由

(回答者数=5人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59 歳	ヤコブ病との関連
	女性	30～39 歳	治療方法がないため
医療・教育職経験者	男性	60～69 歳	輸入牛肉
その他消費者一般	女性	30～39 歳	BSEは食品安全委員会等での努力で少なくなったが、発症した人を見るとこわい
		40～49 歳	行政が事業者適切な指導をしているのかが不安。消費者に対し情報提供が遅いのではないかと

(8) 遺伝子組換え食品に不安を感じている理由

(回答者数=4人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59歳	組み換え遺伝子が種を越えて、環境中に広がっていることが不安
	女性	40～49歳	現時点での安全性評価には納得しているが、実際に人間が長期間食べたことのないものなので、未知のリスクがあるかもしれないから
その他消費者一般	男性	50～59歳	一般人にわかりにくい
	女性	40～49歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」。消費者はメディアから情報収集していることが多く行政からの報告は、非常にうすい

(9) 体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じている理由

(回答者数=3人)

職務経験	性別	年代	回答
医療・教育職経験者	女性	50～59歳	食の安全以前の科学者や実施者のモラルが心配
その他消費者一般	男性	50～59歳	一般人にわかりにくい
	女性	40～49歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」。消費者はメディアから情報収集していることが多く行政からの報告は、非常にうすい

(10) いわゆる健康食品に不安を感じている理由

(回答者数=13人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49歳	規制対象外の流通、取り扱い
		50～59歳	利益追求の温床。「個人差」と言われ泣き寝入りの感強し
			特定の成分を摂取することや、体内消化のメカニズムから考えて無意味な商品が多い(過剰広告)
			いろんな成分が含まれ、事故が起こった場合何の成分が問題であったかが分かりにくい事、根拠が医薬品のように明確になっていないと感じる
		60～69歳	安全性評価・機能等が不十分のまま上市されている商品がある
	70歳以上	特定の物質だけが強調されすぎ、それだけで健康が維持されるような誤解を招く表示が多い	
	女性	40～49歳	多種・多様な健康食品があるため、情報が追いついていないように感じる
		60～69歳	誇大広告で行きすぎた知識を植え付けている
食品関係研究職経験者	男性	60～69歳	効果が判然としないものもある一方、過剰摂取の悪影響も考えられる
医療・教育職経験者	女性	40～49歳	安全性に疑問があったり、安全性が確認されていないような成分が使用されている。使用成分については、基準を設けるべきではないか
		60～69歳	利用者が健康食品に依存し過ぎる
その他消費者一般	男性	30～39歳	効能成分がどれほど含まれているか配合のないものが多く、配合が書かれていても本当に含まれているのか信用できない
	女性	40～49歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」。消費者はメディアから情報収集していることが多く行政からの報告は、非常にうすい。そして選択肢の1

(11) 肥料・飼料等に不安を感じている理由

(回答者数=4人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	選択肢の4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と、選択肢の5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」の両方。情報が少なくよく分からず不安である
	女性	60～69歳	行政からの規制やマニュアルは良いのですが、最後の実際に使用する人までに十分でないところがある
その他消費者一般	女性	30～39歳	肥料や飼料こそ、放射性物質の危険が大きいと思うから
		40～49歳	行政が事業者に適切な指導をしているのが不安。消費者は、肥料・飼料まで関知している人はまずいない

③食品の安全性の観点から不安を感じていない理由（問4）

問4 問2の事項A～K及びMにおいて、「3 あまり不安を感じない」又は「4 全く不安を感じない」を選んだ事項がある方にお聞きます。それぞれの事項について、不安を感じない理由を選択肢1～8の中から1つつ選んでください。

（1）食品添加物に不安を感じていない理由

（回答者数=3人）

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	海外製品に対しては非常に不安がある（毒ギョウザ事件など）
		50～59歳	自分自身の知識（自己防衛）
	女性	30～39歳	ラベルにすべて表示してあるので、選択して購入できる

（2）農薬に不安を感じていない理由

（回答者数=2人）

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	海外製品に対しては非常に不安がある（水際（税関検査など）での規制機能が働いているのか不安）
医療・教育職経験者	女性	50～59歳	関係講座受講していたので

（3）家畜用抗生物質に不安を感じていない理由

（回答者数=1人）

職務経験	性別	年代	回答
その他消費者一般	女性	20～29歳	あまり取り沙汰されていないので

（4）器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じていない理由

（回答者数=4人）

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49歳	小さな企業では出来ない職種なので安全性は会社の存続にかかわるのでリスクになりうる化学物質は使用しないと思われる
		50～59歳	危険とは思っていないが、自分で判断するだけの知識は無い
	女性	50～59歳	業界による自主基準などの取り組みがされているので
医療・教育職経験者	女性	40～49歳	あまり意識したことがないため

(5) 汚染物質（カドミウム、メチル水銀等）に不安を感じていない理由

(回答者数=2人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59歳	自分自身の知識(自己防衛)
		60～69歳	自然界における微量汚染であり、個体差における摂食方法を間違えなければ安全

(6) 有害微生物（細菌・ウイルス）による食中毒等に不安を感じていない理由

(回答者数=7人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59歳	自分自身の知識(自己防衛)
		60～69歳	有害微生物各種の特徴を知り、個人的対応が可能
		70歳以上	家庭では、衛生管理に十分注意して食材を用意している。また、外食のばあいは、衛生管理の行き届いた店での飲食を心がけている
	女性	30～39歳	保管温度管理など、自己防衛がしやすい 事業者と個人の自己管理にゆだねられる点が多いため
		40～49歳	死に至った事件もあるが、家庭では加熱殺菌などの温度管理で、事故や化学物質のリスクよりよほど自己防衛が出来ると思うから
食品関係研究職経験者	男性	40～49歳	個人で責任を持つべきと考えるから

(7) BSE（牛海綿状脳症）に不安を感じていない理由

(回答者数=7人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	海外製品に対しては非常に不安がある(海外の基準で輸出されている場合は特に)
		50～59歳	それほど大きな被害報告が無いから
			自分自身の知識(自己防衛)
	60～69歳	各国の防疫体制が整備され、ここ暫く起きていないから	
	女性	30～39歳	過去に大きな問題となったので現在は規制が厳しく、事業者も法令遵守していそう
医療・教育職経験者	女性	30～39歳	食べることがあまりないため
その他消費者一般	女性	20～29歳	その後、特に耳にしなくなったから

(8) 遺伝子組換え食品に不安を感じていない理由

(回答者数=5人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49歳	小さな企業では出来ない職種なので安全性は会社の存続にかかわるのでリスクになりうる化学物質は使用しないと思われる
		50～59歳	家畜飼料の多くは遺伝子組み換えと思われる、日本の食糧事情から輸入食料は不可欠、直接食材として食していなくても間接的に食しているはず、世界的にも遺伝子組み換えの食物を使用せざる事情と、各国で規制をかけた食物で生産されているのであれば、ある程度の科学的根拠はあるのではないかと感じている
			それほど大きな被害報告が無いから
			危険なのか
			自分自身の知識(自己防衛)

(9) 体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じていない理由

(回答者数=3人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49歳	小さな企業では出来ない職種なので安全性は会社の存続にかかわるのでリスクになりうる化学物質は使用しないと思われる
		50～59歳	食品としてみた場合の気持ち悪さはあるが、可能性のある危害・課題が判らない。抗生物質を含めた薬剤は、食品衛生法(農薬等)で規制されている 自分自身の知識(自己防衛)

(10) いわゆる健康食品に不安を感じていない理由

(回答者数=26人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	怪しいものは買わないよう自分なりに調べている
			有効性を信じないので食べないのだが、食べないのだから不安を感じることもない
		50～59歳	個人でコントロールできそう
			回避可能
			摂取しない
		60～69歳	利用しない
選択肢の5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分」が出来る業者から購入すればよい			

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	女性	20～29 歳	あまり買う機会が無い為
		30～39 歳	自分はほとんど食べないため
			原料や効能は表示してあるため、自己責任では
			使用については個人にゆだねられるため
		40～49 歳	信用出来ないメーカーのものは購入しないから自分には関係がない
50～59 歳	あまり摂取していないので		
食品関係研究職経験者	男性	40～49 歳	個人で責任を持つべきと考えるから
医療・教育職経験者	女性	50～59 歳	あくまでも自己判断できちんと使用するという前提のものであるから
		60～69 歳	確かな効果が期待できないし、健康増進という大きな宣伝が嫌なので、関心が全くない。購入して食べるつもりもない。無関心である
その他消費者一般	女性	20～29 歳	あまり大きな問題を聞いたことがないので
		30～39 歳	利用しない為
			自己防衛できそう
			よく口にするとし、信頼できるルート(ドラッグストア)で購入するため
		40～49 歳	もともと関心がなく使用する気がないので
			利用頻度が低い
50～59 歳	特に気にしていない		
50～59 歳	使用していないため		
60～69 歳	利用しないから		

(11) 肥料・飼料等に不安を感じていない理由

(回答者数=4人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59 歳	行政による規制があるうえ、そのものを直接体内に入れることが無いことによる
その他消費者一般	女性	20～29 歳	あまり気にしたことがない
		40～49 歳	あまり大きな問題を聞いたことがないので
		40～49 歳	間接的な影響

④放射性物質を含む食品の健康に与える影響について不安を感じている理由（問5）

問5 問2の事項L(放射性物質を含む食品の健康に与える影響)において、「1 非常に不安である」又は「2 ある程度不安である」を選んだ方にお聞きします。不安を感じる理由を選択肢1～9の中から強く当てはまる順に3つ選んでください。

(1) 第1位

(回答者数=7人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49 歳	自分の身体的症状と、測定値から推測すると非常に不安である 原発事故が終息しておらず、汚染水漏れなどの不安要素がぬぐいきれない。また、再度災害に見舞われた時、汚染の拡大が防げない気がするため
		50～59 歳	私は被爆者二世ですが、その為と思われる大病に患って参りました。今迄の実例で放射能汚染の恐ろしさは分っている筈の国が正直に正しい情報を出そうとしない事が最大の不安です
	女性	30～39 歳	見えない、味がしないものなので、自己防衛しづらい点が不安になる
食品関係研究職経験者	男性	50～59 歳	我が国行政も政府政治屋、マスコミも、国民の半数以上が、スリーマイル、チェルノブイリのことさえ知らないまま無能無策なことをして正当化している現状から、非常に不安
その他消費者一般	女性	30～39 歳	都合の悪いことは隠ぺいされている気がする
		40～49 歳	一生つきまとうことで、先が不透明。メディアの情報が頼りの様になっている。私の情報源は、貴委員会と県政だより、新聞が主である。仙台市政だよりの情報提供はうすすぎる。食事は毎食毎日のことで、健康に与える影響は大きいと考える。科学的根拠も生体だけにどこまで本当か、どこまで合っているのか、というと10年、20年、30年…後にならないと分からないのではないかと心配である。また加工品もどこまで大丈夫なのか、安全性は保たれているのかと不安にもなることがある。目に見えないが、着実にむしばんでいる可能性はある。症状が出てからでは遅いのではないかと。結果としては治療するしかない

(2) 第2位

(回答者数=2人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	原子力行政に対して不安が多いから
		50～59歳	当局(厚労省)からの規制内容が不用意にゼロ数値を誘導し、科学的な判断のもとでの規制値となっていない。メディアの管理が出来ていないことにより、国民に不安感を煽っている。地域において被爆放置された動植物や海産物等の継続的な放射線量の評価とともにその過程で判ってきたこと、不明なことについて、定期的に世界に伝えていくことが、日本の役目と考える

(3) 第3位

(回答者数=5人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59歳	世界基準での数値を当てはめると問題ないってどうなの 当事者の気持とデスクでの対応に乖離があり、真実を公表してほしい。 原発の現場はどうなっているの、終息の目安は？、いまでも漏れるの
		60～69歳	測定対象物のサンプリング方法、測定結果の妥当性評価、判定結果～出荷時のタイムラグ 基準値以下の低レベル汚染食品についての安全性を確実に示すデータがない
医療・教育職経験者	男性	50～59歳	何に対してでもリスクがあることを、メディアも国民も理解していない点
その他消費者一般	女性	30～39歳	現在でも不安ですが、今後の未来にどのような影響があるのかが心配です

2) 食品の安全性に係る危害要因等について

①放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先（問6）

問6 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先についてお伺いします。選択肢の中から利用頻度の高い順に5つ選んでください。

(1) 第1位

(回答者数=2人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	原子力関係の測定器メーカー(日立アロカなど)
		50～59歳	勤務先企業内の情報

(2) 第2位

(回答者数=1人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	女性	30～39歳	個人で参加している、食品安全リスクコミュニケーションの勉強会

(3) 第3位

(回答者数=6人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	専門家の講演会資料
		40～49歳	文科省
	女性	40～49歳	同業者間話題
		60～69歳	いろんな機関の研修会
医療・教育職経験者	女性	30～39歳	その他の選択肢はあまり活用なし
その他消費者一般	女性	40～49歳	県政だより

(4) 第4位

(回答者数=2人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	20～29歳	勤務先での情報
		60～69歳	県の広報誌

(5) 第5位

(回答者数=8人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	50～59歳	職場
		60～69歳	ラジオ
	女性	40～49歳	分析機関 業界新聞・業界雑誌
		50～59歳	文部科学省知っておきたい放射線のこと(高校生のための放射線副読本 教師用解説編)
食品関係研究職経験者	男性	50～59歳	近頃は情報が少なくなっているように感じる。都道府県の測定値などもなんの役にも立たない
その他消費者一般	女性	30～39歳	ラジオ(とくにコミュニティFM)ラジオで意見を出しあえたりできることもある

②食品に対する影響の情報収集の姿勢(問7)

問7 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故発生後、食品に対する影響について情報収集を行っていますか。あてはまるものを選択肢1～5の中から1つ選んでください。

(回答者数=6人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	女性	30～39歳	積極的とは言わないが常に気にして情報があれば注視している
食品関係研究職経験者	女性	30～39歳	事故直後も現在も情報を収集している
医療・教育職経験者	女性	60～69歳	気にはなっているが少々離れているので積極的な行動という言葉には当てはまらない
その他消費者一般	女性	30～39歳	スーパーで買い物する、そのときどきに考えつつ動いている程度
		40～49歳	事故直後は積極的にしていた。今までの情報から流通している食品はほぼ安全だと認識し、問6で補っている。 気にはしていても自分では調べていない

③東日本大震災前後の飲食料品に係る意思決定の変化（問8）

問 8 東日本大震災の前後で、飲食料品（産地）の購入等に係る意思決定に変化はありましたか。選択肢1～4の中から1つ選んでください。

（回答者数=6人）

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49 歳	家族などで消費するものについては、ほとんど気にしていないが、ギフトなど贈り物にする場合は、いろいろな考え方があるので控えるようにしている
		60～69 歳	東日本大震災の直後は変化していなかったが、現在は多少変化している
	女性	40～49 歳	震災直後は変化したが、風評被害などで苦しんでいる生産者のことを考えると、極力購入するようにしている
			震災後に変化し、徐々に戻りつつある
その他消費者一般	女性	40～49 歳	気持ちの問題で都度変化している
		60～69 歳	普段は変化がないが、若い世代の訪問を受けるときは産地を確認し購入する

④放射性物質を含む食品による健康影響に関する科学的知見等の認識度と安心感（問9）

問9 放射性物質を含む食品による健康影響に関連して、これまでにいくつもの科学的知見等が示されています。以下のA～Hの事項について、知っていますか。【選択肢a】の中から当てはまるものを1つ選んでください。また、【選択肢a】の1～3の選択にかかわらず、以下の事項A～Hの事項についてどう感じますか。【選択肢b】の中から当てはまるものを1つ選んでください。

(A) 食品中の放射性物質のような低いレベルの放射線量での健康影響は、主に「がん」である。生涯でおおよそ 100 ミリシーベルトを追加で被ばくすると、健康影響の可能性が高まることが科学的に確認されている。

(全回答者数=236人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=56人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	20～29歳	しっかりと科学的に証明されている
		30～39歳	生涯でその値まで蓄積することはないと思うから
		40～49歳	健康影響のあるボーダーがわかっているという事は、それをもとに基準を定める事が出来るから
			読んだとおり
			食品由来で生涯 100 ミリシーベルトを超える可能性は低い
			到達できそうにないから
		50～59歳	がんについては説明内容を信じるしかないと考え、放射能以外の影響のほうが値優位を払う必要があると考える為
			専門書による確認事項
			ある程度の知見を持っている方であれば知っている話です
			科学的に確認されていれば、格差はあっても安心できる
		60～69歳	科学的根拠のある数値だと思うから
			リスクはゼロではない
	信憑性のある情報としての前提条件の上で受け止めるしかないのでは		
	書籍等での知識		
	現状で通常の生活をしていれば特に問題なし		
	食品安全委員会等のメールマガジン等によるネット情報に納得		
70歳以上	食品安全委員会のHPに記載		
	ケララ州、パイロットは高い値で浴びているが、誇大な報告はない		
	自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため		
	大きなリスクではない		
女性	70歳以上	人類への被害と恩恵の経験の大きさ故	
		データが豊富	
	20～29歳	科学的に確認されている為	
	30～39歳	原発事故後に人が食品から摂取した放射性物質の増加量は 100 ミリシーベルトには到底及ばないため	
		明確な数値で示されていることにより、それを考慮している食品が流通していると考えられるため	
	40～49歳	100ミリ以下でも被ばくしない方が可能性が低いから	
		がんという病名がはっきり示され、“科学的に確認されている”という言葉1つで安心感が大	
		化学的根拠があると専門家が言うなら信じられると思うから	
50～59歳	100 ミリシーベルト以下なら大丈夫と思える		
	この種を専門とする先生がテレビ話していた		
	科学的に確認されているため		
50～59歳	科学的にわかっていることとわからないことをきちんと区別して防護的な措置をとっているから		
	通常生活で摂取しない量と思われる		

職務経験	性別	年代	理由
食品関係研究職経験者	男性	40～49 歳	通常の生活をしている限り 100mSv を超える可能性は低い
		50～59 歳	設問Hと被るが、ガンになるリスクは他にも高いものがあるため
		60～69 歳	現況、問題ないレベル ICRP の見解のため
医療・教育職経験者	男性	40～49 歳	被曝レベルが科学的に確認されているから
		50～59 歳	科学的根拠が具体的に示されているので 100mSv の意味を理解できていると思うから
	女性	30～39 歳	あきらめのような感じ 科学的根拠があるため
		40～49 歳	検査済みの食品が流通していると思うから がんは誰もがなるといってもおかしくないから、自分で早期発見に努力すればいいこと だと思う
			科学的な裏付けがある それだけの量の放射線を浴びる事は今のところないから 一般論的な話なので安心感というよりもさほど気にならない
			50～59 歳
		70 歳以上	チェルノブイリの事故以来いろいろ報告されている
その他消費者一般	男性	30～39 歳	いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、 自分にとって不利な情報でも安心感につながる
		40～49 歳	ここまで累積して被曝することはないと考える
		50～59 歳	よく聞くから
	女性	40～49 歳	「科学的に確認されている」から 確認が取れているため
		50～59 歳	自分は生涯100ミリシーベルトは受けないだろう
		70 歳以上	健康影響が生ずる数値ではない

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=68人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務経験者	男性	30～39 歳	自然放射線以外で放射線を浴びること自体、安心できない(※安心感ある、なしの間 はおかしい。間に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安 心をひっぱりだそうと感じてしまう)	
			放射線とがんの因果関係は 100mSv 以下では証明できていない 100 ミリシーベルトがどのくらいか、この情報だけではわからない	
			もっと低線量被曝でも、健康に影響があります 個体差がある	
		40～49 歳	この説明だけでは自然界から生涯受ける放射線量に関する情報がなく、100ミリシーベ ルトがどの程度のものか理解できない 歴史的諸外国とレベルがこれと同等なのかわからない それより少ない場合の状況がわからない 100 ミリシーベルト被曝の状況が想像しにくい文章である為	
			50～59 歳	100mSv が如何ほどのものが不明で、食品に限っての放射線が発ガンの可能性の 様に受け取れる文面に安心感が抱けない 放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大 きい為、心配すべきなのか否かさえはっきりしない 放射能はコントロールできない この話だけでは不安が助長される 100 ミリシーベルト以下では健康影響があるかどうかわからない。健康影響がないとい う確認がない 自分の被ばく量がどの程度かわからない その時によって基準や単位がまちまちで分かりづらい。とても不安です 将来子供たちへ影響を考えると不安

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務 経験者	男性	60～69 歳	年齢、性差等との関連が示されていず、漠然としすぎた情報である	
			科学的根拠を裏付ける実績がまだない	
			「健康影響の可能性が高まる」という表現が漠然としすぎている。また、その根拠を十分に理解していない	
			チェルノブイリのデータ以外十分なものがない	
			100 以下なら本当に安全なのかデータで示してもらいたい	
			疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方が良いことは真理である	
			個人差があると考えます	
	女性	30～39 歳	100mSv(レントゲンや航空機で浴びる放射線と比較等)の具体的な説明がなく、健康影響の程度も記載がないから	
			本当なのか	
			自然界にはない不自然な状態だから	
		40～49 歳	科学的に確認されていても、個人によってどのような影響をおよぼすか、被ばく量だけでは、わからないから	
			生涯とは何年間をさすのかわからない	
			がんがいつ発病するのか不安	
50～59 歳	100ミリシーベルト以下の安全性の証明にはならないと思うから			
60～69 歳	大人に関しては安心感がある。子供は若いうちに健康被害が出るのではないかという漠然とした不安がある			
食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	健康影響が主に「がん」であるのではなく、「がん」以外のものは調べにくいため明らかになっていないことを明言しない点で、科学的な知見とは言い難い。巧妙な詭弁である。「他の健康影響は明らかになっていない」と明言するのが科学的良心であると考え	
			一般的な理解度という視点を鑑みれば、安心感を感じるに至る情報ではないと言える。一般生活者は「安全」か「安全でない」の両極の情報に軸を判断するからである	
			調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定のできないことだから	
	女性	60～69 歳	食品中から生涯でどの程度の放射線量を摂取するかが記載されていないので不安	
			今後の被爆するかの可能性が不明なため	
			過去の事例が少ないため	
その他消費者 一般	男性	40～49 歳	放射線による健康被害の場合、放射線が目に見えない、においが無い等、人が感じられるものがないので、いくら数値で大丈夫と言っても、不安はぬぐいきれないと思う	
			50～59 歳	信憑性に欠ける
			60～69 歳	科学的数値のみだけでは安全性が理解しにくい。具体例が欲しい(以下同じ)
	女性	20～29 歳	自分がどのくらい食品から放射性物質を摂取しているかわからないので、この結果をみても安心材料とはならないから	
			30～39 歳	体格や年齢で差があるのではないかと思うので
		40～49 歳	科学的に分かっていても、自分の被ばく量は分からない。また子供は別とも思う	
			科学的に確認されていても、人によって異なるのではないか。主にがんであって、他の症状があったとき、関連性をどう見解するのか	
			低レベルの放射性物質でも被曝すると健康に被害があるのではないかと感じてしまうから	
			科学的見解であるだけで、これだけでは特に安心感には結びつかなかった	
			内部被曝の健康影響についてはデータ不足ではないかと思う	
			今後何があるかわからない	
個人差があるため				
自分の被曝量がわからない				
まだ健康被害があらわに出ない段階なので将来が不安				
現在ではこのように言われているが、本当にそうなのか不安である。科学的に確認されているとしても、100ミリシーベルトではないのではと疑っている				

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	女性	50～59 歳	少量を20～30年摂取した場合を細かく追跡しているデータが多数あるとは思えない がんと聞くとこわい
			原発がたくさんある日本の中に住んでいる限り、安心という文字はないと思います 内部被曝に関する基準が不明瞭なため
		60～69 歳	どんな影響があるか分からないから
			原子力発電所を数多く抱えているのでいつ何が起こるか不安である 生産地の安全性が信頼できない

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=33人)

職務経験	性別	年代	理由		
食品関係業務 経験者	男性	40～49 歳	科学的な印象がある。どの位確からしいかは検討していないので不明 定期的な健康診断等などを受けているが、健康に不安を感じていない 科学的に確認されているから		
		50～59 歳	よく知られるようになっている がんの発病経験があり、食品がすべてのガン発病に起因するとは思えない 100ミリシーベルトを追加被曝する事態を現時点では考えないから		
		60～69 歳	蓄積されたデータの信憑性 食品に含まれている量は少ないと考えている		
		70 歳以上	科学的根拠		
	女性	30～39 歳	信じるしかない 科学的に証明されているから 数値がはっきり表れているから 科学的に確認されているので 信頼性の高い結果であると感じるため		
		40～49 歳	広島や長崎の事例も含め、仕方のないことであり、今となっては逃げられるものでもない。 広島や長崎の方々が被ばくしながら、今も元気で生活している方が多数いら らっしゃることからも、多少の数値では不安はない		
		50～59 歳	現代社会において「がん」は不治の病ではなくなった。早期発見で治療ができるから		
		60～69 歳	数値で示されている		
		食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	科学的に確認されている
		女性	60～69 歳	具体的に示された数字である	
医療・教育職 経験者	女性	50～59 歳	科学的根拠があるから		
	女性	60～69 歳	科学的に証明されているから		
	女性		100ミリシーベルトの量はかなり多い。少し安心である 生涯100ミリシーベルトは追加して被ばくしないであろうと思うが、原発があるかぎり被 ばくしないとは言い切れない		
その他消費者 一般	男性	30～39 歳	なんとなく		
	女性	20～29 歳	可能性が低くとも「がん」の可能性が少なくとも有る限り、不安はある 他の原因による発がんリスクとあまり変わらない数字であるから		
		30～39 歳	昨年1年間の食品からの放射性セシウムの摂取量を見ると、これが原因で生涯で10 0ミリシーベルトまで到達することはないということがわかったから		
			科学的に確認されているとされているから 100ミリシーベルトも被曝することがないと思う		
		40～49 歳	感覚的に納得できるから 科学的根拠があるのなら納得できる		
		50～59 歳	各方面から様々なデータ、英知を結集し取り出した結論を全面的に信頼している 科学的に確認されているから		

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=67人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30~39歳	科学的な根拠を実際に自分で確認したことがないから(具体的な論文等を自分で未確認のため)
	男性	40~49歳	知識不足の為
		40~49歳	ゼロに近い方が、より安全だと理解する
		40~49歳	どの程度被爆しているかわからないので、安心材料にはならない
		40~49歳	生涯どのくらい影響を受けるかわからない
	男性	50~59歳	専門家による安全に関する根拠が分かりづらい
		50~59歳	許容範囲の数字の算出根拠を理解していないから
		50~59歳	よくわからない
		50~59歳	事故も含め生涯に浴びる放射線を管理することは不可能
		50~59歳	理解度が低い
	男性	60~69歳	追加で被ばくしない保証はないから
		60~69歳	過去の知見があるとは思えない
		60~69歳	知らないから
		60~69歳	自然体にまかせる
		60~69歳	良く判らないから
		60~69歳	がん以外の症候群
	男性	60~69歳	可能性としてリスクゼロではないから
		60~69歳	数値の信頼性
	男性	70歳以上	発ガンと放射線量の因果関係を明確に
	女性	30~39歳	100ミリシーベルトの追加被ばくのレベルがわかりにくいから
30~39歳		「化学的に確認されている」が漠然としている	
30~39歳		生涯でおおよそ、という漠然とした数値に疑問	
30~39歳		自分の被ばく量がわからないので	
女性	40~49歳	誰でも被害にあう可能性はあり死亡理由でも高い順位にある病気なので不安です	
	40~49歳	データとしての信頼感が感じられない	
	40~49歳	普段食品をとるのに放射線量は都度わからない為知らず知らずに被爆している可能性がある	
女性	40~49歳	数字と実際の体への見えない影響との関係が不安	
	50~59歳	全ての項目に漠然とした不安がある	
女性	50~59歳	知識不足	
	50~59歳	知識不足	
食品関係研究 職経験者	男性	20~29歳	がんに対して恐怖心があるため
		40~49歳	ポジティブデータしか紹介されていないから。以降すべて、知見から何が言いたいのか、はっきりしていない。誘導的な知見の紹介である
		50~59歳	なんか信用できない がんリスクが高まるので
		60~69歳	安心感と言う不可解な判断基準では回答不可
	女性	30~39歳	がんの原因は放射性物質の影響だけに限らないから
40~49歳	追加で被爆するという文言が気になるから		
医療・教育職 経験者	男性	30~39歳	やっぱり怖いですね
		40~49歳	科学的根拠に信頼性がない
		50~59歳	自分と家族が当てはまるような気がします 数値を示されても、自身の健康への影響の程度が分からない
	女性	30~39歳	発言者がどのような人かわからないので
		40~49歳	自分が追加被ばく以上に被ばくする可能性があるかもしれない ピンとこない
		50~59歳	自分が食品から、どのくらい被ばくしているか不明なので 自分自身で内容をはっきり確認していないから

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	男性	30～39 歳	がんになる不安が増す
		50～59 歳	自分の状況が分からないので がんだけなのか、また、どのようながんなのか不明で不安である
		60～69 歳	測定結果が分っていない 〇シーベルト以下であれば安心であると言われてもその本意が理解できない。即ち、安全であるとは言い切れない
	女性	20～29 歳	目に見えないものであるから安心感を持てない 自分がどのくらい被ばくしているか分からないから 根拠は？
		30～39 歳	原発事故以来、どの程度食品中に放射性物質が含まれているか不安な為 100 ミリシーベルト以下での影響がはっきりしていないから 低線量の被曝に関するエビデンスは少ないと思うから 放射性物質は健康に影響するから 被ばくしない為の対策方法はないのか、シーベルトの量が全くわからない
		40～49 歳	具体的な量が把握できない 低レベルでも発癌リスクがあるから 「おおよそ」や「可能性」など、不確実な用語によって信憑性が低い印象を受ける
			聞いたことがあるがよくわからないから 人体への影響が大きいので安心できない よくわからないからです 良く分からないから
			目に見えないものだから 具体性がない
			50～59 歳

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=5人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	40～49 歳	100 ミリシーベルトを追加で被曝しても、対象全ての群において健康影響の可能性が高まるとは思わない
	女性	60～69 歳	専門家で確認されているならば安心
医療・教育職 経験者	女性	40～49 歳	説明が具体的
その他消費者 一般	女性	30～39 歳	今の医療技術は進んでいるので
	女性	30～39 歳	科学的にとのことなので、信じるしかないため

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=7人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	30～39 歳	低いレベルで癌になってしまうというのは、すごい影響力が放射線にはあると思うから、安心感はない
		40～49 歳	これらの情報があってもだから何なのか、ではどうしたらいいのかが分からなければ何にもならない
医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	癌で死ぬのは嫌です
	女性	30～39 歳	健康被害が否定できないため
		60～69 歳	多く受ければ受けるほど、リスクが大きくなる
その他消費者 一般	女性	30～39 歳	どのような方法で確認をとっているのかこの文章からはわからないので
		50～59 歳	自分の被曝量が全くわからないから

(B) 昨年の原発事故以降の1年間で、日本人が食品から摂取した放射性物質は、0.002 ミリシーベルト程度（東京）～0.02 ミリシーベルト程度（福島や宮城）と厚生労働省により推計されている。他にも、京都大学や消費者団体など複数の団体が、おおよそ同程度と推計している。

(全回答者数=234人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=23人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30～39歳	陰膳調査の結果であるので信頼性があり、また基準値の根拠となった年間1mSvの値からはるかに低い値であるので安心できる
		40～49歳	過去の論文から正しいと判断できる
		50～59歳	複数の団体が同じ結果を出している為 絶対はあり得ないと思うし、統計調査結果が事実であれば心配なし
		60～69歳	書籍等での知識 新聞で読んで安心はしている 科学的最新の根拠 自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため
	70歳以上	安全・安心に信頼が持てる機関からデータを公表 ごく微量で安心	
	女性	30～39歳	信じるしかない 逃れられない事実であり、向かい合って行きたいと思う為
		50～59歳	複数の団体が摂取量調査を実施したことで、同様の結果であったこと。またその結果で得られた数値に問題がなかったから
	食品関係研究 職経験者	男性	40～49歳
男性		50～59歳	基準値を上回る食品の流通は制限されたため
男性		60～69歳	当初より数字の発表が安定してきた
医療・教育職 経験者	女性	40～49歳	複数の団体が言ってるのならそうだと思う 一年間でこの量ならまず問題ないと考えられるから
その他消費者 一般	女性	30～39歳	複数の団体が同じ意見だと安心できる
		40～49歳	異なる複数の機関の結果において同一傾向が見られたことは、信頼できる情報に感じられる
		50～59歳	福島県に住む自分は、他の県の方よりも外部も内部も比較的多く被ばくしていると考えているが、危険な数値ではないと思っている 少ないので
		60～69歳	行政や専門家、費用飛車

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=24人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30～39歳	放射線とがんの因果関係がわかっていないから
		40～49歳	Aと同様にこの説明だけでは、0.002ミリシーベルトの相場観が実感できない 推計であり確定していないから
		50～59歳	大気や環境の汚染としては受容られるが、限定されているはずのエリアが宮城・福島 の広範囲に渡っている。さらに、東京よりも10倍汚染された食品を摂取している悪い 印象を受ける。現地の0.02mSvが許容値の5000年に相当していることの記載がない
		60～69歳	事故の経過が十分に公表されていない 自分の被ばく量がどの程度かわからない 本来増えなくてもいいものが増えたので、いくら少ないといっても納得しがたい 調査が不十分 疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方が良いことは 真理である 統計数値であるから
	女性	30～39歳	本当なのか
		60～69歳	やはり、被爆という事実は確定している現状安心感があるとの断定は言えない
	食品関係研究 職経験者	男性	30～39歳
50～59歳			調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定のできないことだから 全体で平均化されたデータであるため。個々の事例では異なると思います
医療・教育職 経験者	男性	50～59歳	情報を信頼できない 推計なので
	女性	30～39歳	データの信憑性に疑問を感じる
		50～59歳	場所によって個体差があるから
その他消費者 一般	女性	20～29歳	統計をとったものと同じ食事をしているわけではないので、自分にその値を当てはめて 考えていいのか不安である
		40～49歳	「およそ」や「可能性」など、不確実な用語によって信憑性が低い印象を受ける。 数値の把握ができていないから
		60～69歳	抽出者の食に対する意識レベルで異なると思うから

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=59人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	40～49 歳	Aを根拠に健康影響がないと言えるから
			特になし
			被ばく量は想定範囲内
			影響がごくわずかだから
		50～59 歳	各団体の数字がでている
			現在避難指示が出るのが、遅すぎたと思います
			対比が分かりやすい
			現実的に影響が無視できることがわかる
		60～69 歳	過去のデータでは、心配するようなデータではない
			摂取放射性物質の数値が低いと思われるから
			科学的根拠のある数値だと思うから
			数値は分からないが、各種団体の見解から
	信憑性のある情報としての前提条件の上で受け止めるしかないのでは		
	日本全国の市場流通食品で健康被害のリスクは低い		
	70 歳以上	数値で示されることによる安心感(平均寿命を乗じても生涯被ばく量より少ない)	
		0.02ミリシーベルトを50年にわたり被ばくしても総被ばく量は1ミリシーベルトと100ミリシーベルトに比較して大変小さい	
		自然環境からの被曝量、医療被曝量を考慮しても累積線量は安全域と考えてます	
		測定値が変動する	
いわゆる閾値を大きく下回る現実			
大きなリスクではない			
女性	20～29 歳	自然環境からの影響に比べて低いから	
		そのデータ集積、分析、管理法が進展している	
	30～39 歳	データが豊富	
		大差がないため	
	40～49 歳	複数の団体で数値が同程度と推計している為	
		原発事故後に人が食品から摂取した放射性物質の増加量は100ミリシーベルトには到底及ばないため。できれば事故前と事故後の比較データをHPのわかりやすい場所においてほしい。大差ないことが広まればよいと思う	
		Aの値から考えると、100年摂取してもかなり低い値だから	
		意外と少ないと感じると思う	
50～59 歳	Aと合わせて、福島・宮城では100年生きると仮定すれば、許容の2倍量の放射性物質を摂取したとイメージしやすい。外部被ばくは??		
	きちんとしたデータを取っているので		
60～69 歳	データとしての信頼感		
	消費者団体の出している値だから		
食品関係研究 職経験者	男性	複数の団体等の結果が同じなので	
		複数の団体の推計値であり、心配のない程度の摂取量だから	
医療・教育職 経験者	男性	広島や長崎の事例も含め、仕方がないことであり、今となっては逃げられるものでもない。広島や長崎の方々が被ばくしながら、今も元気で生活していらっしゃる方が多数いらっしゃることも、多少の数値では不安はない	
		高い数値ではない	
	女性	出来るだけ多いデータがあればある程安心	
		50～59 歳	数値的に低いので
		60～69 歳	現況、問題ないレベル
			複数の結果がほぼ同様で低い値であること
30～39 歳	仕方が無い		
	40～49 歳	説明が具体的	
50～59 歳		研究やデータ等収集しての結果	
	60～69 歳	複数の団体で同じ結果なので	
60～69 歳		生鮮食品だけではなく、多くの加工食品も摂取しているので全国の平均値として安心感がある	
	60～69 歳	より多くの研究・調査の結果が出ている点は安心感がある	
60～69 歳		複数の団体が推計しているため現在は不安はないが、原発がある以上事故が起こらないとは言い切れないため安心できない	

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	男性	30～39 歳	なんとなく いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、自分にとって不利な情報でも安心感につながる
		40～49 歳	この程度であれば大丈夫ではないか
		50～59 歳	多くの機関で確認されているから
	女性	30～39 歳	自然放射性物質による摂取量と比べると、昨年1年間の食品からの放射性セシウムの摂取量は値が小さいことがわかったから
			定量値が得られているから
			複数機関の推計によるものなので
		40～49 歳	厚生労働省によりとのことなので、信じるしかないため
			一般の人にとっては影響のない値であるといえる
			複数の団体によって確認されているため
			50～59 歳
70 歳以上	健康を害する数値ではない		

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=60人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30~39歳	自然放射線以外で放射線を浴びること自体、安心できない(※安心感ある、なしの間はおかしい。間に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安心をひっぱりだそうと感じてしまう)
			Fの記述と矛盾する。「追加の」等の文言が必要なのではないか
		40~49歳	データへの不信感
			個人差が大きいと思います
			影響を受けていないことは感じるが、閉鎖された地域があると思うと不安
			これまでどのくらい被爆しているのかわからないので安心材料にはならない
	50~59歳	被災地食品が10倍程度危険である印象を与えかねない	
		頭で分かっているが、未体験のことなのでまったく不安がないわけではない。なれも必要	
		専門家による安全に関する根拠が分かりづらい	
	60~69歳	摂取量幅の設定の根拠が不明	
		よくわからない	
		その時によって基準や単位がまちまちで分かりづらい。とても不安です	
女性	30~39歳	平均的な話であって、平均でないケースもあると思われるから	
		事故も含め生涯に浴びる放射線を管理することは不可能	
	40~49歳	理解度が低い	
		知らないから	
	50~59歳	自身の基準で判断	
		良く判らないから	
食品関係研究 職経験者	男性	東京・福島や宮城に限っての情報	
		0.002ミリ~0.02ミリという幅がそもそも適切な値といえるのだろうか	
	女性	摂取量、影響量には個人差があるため	
		検査をすり抜けている食品もあるのではないかと不安になる	
医療・教育職 経験者	男性	東京に比べて福島・宮城は10倍もの差が示されると不安になる為	
		マスコミの報道(ガンが福島で多発している等の)を聞くと一律、0.02と言われても安心出来ない	
食品関係研究 職経験者	男性	実際の見えない影響が不安	
		全ての項目に漠然とした不安がある	
		事故以前の数値は想定であり、この結果は今後数年間経過をみなくてはならない	
		良くわからない	
	女性	食品以外からも体内に取り込んでいるから	
		地域差があることは確認したが定期的に情報収集し、公表されていない	
		行政だけでなく複数の団体が調査しているため	
		あくまで推定値であるため	
	医療・教育職 経験者	男性	なんとなく信用できない
			安心感と言う不可解な判断基準では回答不可
		女性	あくまでも推定値だから。例えば福島県内では放射性物質の汚染が不均一で、そのレベルが明らかでないから
			推計値の計算方法に信頼性がない
医療・教育職 経験者		男性	平均的な数値であり、局所的な数値ではないのでは？
			数値を示されても、自身の健康への影響の程度が分からない
	女性	一部のデータのみから評価している	
		被爆事例が少ないため	
医療・教育職 経験者	男性	発言者がどのような人かわからないので	
		どういった調査が行われたのかがよくわからないため	
	女性	実際自分の住んでいる地域がどうなのか具体的にわからないので不安	
		事故のあった場所は高レベルだと納得と同時に不安	
医療・教育職 経験者	女性	福島から離れているので実感が無い	
		70歳以上	

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	いろんなデータが同様というが、害になるのかわかるとは別のことで不安である
		60～69 歳	自分の被ばく量が分っていない
	女性	30～39 歳	原発事故前を比べてどうかと思うから 今後どこでどのようなことがあるかわからないので、ここ一年の話をされても何の安心感もない気がします
		40～49 歳	受けないに越したことはない 原発事故以来話題が絶えないから あくまでも一般推論
			どうしても今の国は信用できない 本当か…とわからないから 信用できない
			良く分からないから
		50～59 歳	被爆の怖さがある 累積プラス内部被曝により基準が違ってくるから 推計されているだけだから
	60～69 歳	あくまでも限られた中の推計で個人的なものでない	

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=30人)

職務経験	性別	年代	理由		
食品関係業務 経験者	男性	20～29 歳	意外と少ない		
		30～39 歳	そのとおりだとしたら影響が限定的なので こういうデータはもっと周知できるようにしてもらいたい		
		60～69 歳	知らなかったがこの情報で 計算上生涯中には影響を受けない数値の為		
	女性	30～39 歳	東京であってもホットスポットがあり、地域によって異なるから。また、天候によっても増減すると思うから 推計した団体の名前が出ているので安心 複数の団体が、同じ見解を示しているから 思った以上に少ないので 複数の調査機関が同じように推計しているのでデータがより信頼できる 四国にすんでいるので遠い		
			40～49 歳	過去のデータでかつ複数の団体が同程度としている 推計ではあるが数字で確認することで安心につながる 思ったよりも低い数値だった為	
			食品関係研究 職経験者	男性	60～69 歳
		医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	死なない体内被曝量でした
	30～39 歳			複数の団体で同じ見解が出ているのであれば信頼性がある 厚生労働省の他、大学や消費者団体の推計も同程度という記述があるの	
	女性		50～59 歳	少ない数値だから 想像している線量よりずっと少ない	
			60～69 歳	複数の団体がおおよそ同程度と推計しているから	
その他消費者 一般	女性	20～29 歳	調べられたものを信じるしかない 数値がとても低いこと、平均より大きく外れていてもそれほど問題のある数値にはならないから		
		30～39 歳	はっきりとした数値が示されている為 政府だけでなく、消費者団体も推計しているので信用できそうだから 複数団体で調査し同程度の結果が出ているので		
			40～49 歳	複数の団体が発表しているなら納得できる	
		50～59 歳	各方面から様々なデータ、英知を結集し取り出した結論を全面的に信頼している 行政と民間の推計が一致しているから 厚生労働省だけでなく、京都大学や消費者団体などの複数の団体が、計測している値である為		

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=38人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30~39 歳	福島東電事故由来の放射性物質による被爆? 放射能は目に見えず、自分がどの程度被曝しているのかよく、分からないから
		40~49 歳	摂取量には個人差がある
			歴史的諸外国とレベルがこれと同等なのかわからない 平均値では、安心できない
		50~59 歳	放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大きい為、心配すべきなのか否かさえはっきりしない
			未知のホットスポットがあり、予想外に被曝している可能性がある 放射線量の単位は一般社会では扱わないためよくわからない
	60~69 歳	行政側で情報を公表しないものがあると思う 推計では判断しにくい	
		汚染度が違う	
		平均値は意味無し	
	女性	30~39 歳	他地域についてわからないから もともと事故より前のことは誰も気にしていなかったから、その数値だから安心とはいえない
		40~49 歳	これらの情報があってもだから何なのか、ではどうしたらいいのかが分からなければ何にもならない 個人差があると思うから
地域格差があるのでデータに信頼がおけない			
50~59 歳	知識不足		
食品関係研究 職経験者	男性	40~49 歳	ポジティブデータしか紹介されていないから
	女性	30~39 歳	食品の検査結果を信用していないから(測定方法や一部の試料にすぎないから)
		40~49 歳	初めて知った情報だから
医療・教育職 経験者	男性	50~59 歳	平均値は信用できない
	女性	40~49 歳	情報を目にしたことがないから 値は推計である
その他消費者 一般	男性	30~39 歳	数値の安全性がわからない
		50~59 歳	数字が意味するところが分からないので 信憑性に欠ける
	女性	20~29 歳	食品から放射性物質を摂取していることが不安である 正確なデータがないので
		30~39 歳	この1年ではなく、今後も被曝は続くと思うから 同程度と場所があいまい
			1年で0.02ミリならこの先生涯この量を摂取してもAの100ミリには達さないということだが、Bの文章だけだと安心できない 科学的に分かって、自分の被ばく量は分からない。また子供は別とも思うし
		40~49 歳	推計であって、実際はどうか分からない。自宅には計測できるものもないし、下処理をして食したとしても、どの程度軽減されているかわからない 東京と福島・宮城の人が摂取した放射性物質の違いがどの程度なのかわからない 福島県や、近隣の県では、もっと多くの放射性物質を摂取している可能性があるから 数値を言われてもピンとこない
			50~59 歳

(C) 核実験や原発事故がなくても、もともと食べ物には、カリウム40などの自然放射性物質が含まれており、肉や魚、野菜では、食品1kg当たり100~200ベクレル程度とされている。

(全回答者数=229人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=80人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	20~29歳	もともと存在しているところで事故後いきなりでたわけではない
		30~39歳	安心とかではなく、事実であり、自然放射線なので仕方がない(※安心感ある、なしの間はおかしい。問に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安心をひっぱりだそうと感じてしまう)
			Bの調査結果と合わせてみれば、原発由来の放射性セシウムの影響が放射性カリウムと比較して小さいことがよくわかる
			知っていた
			自然界にある放射性物質の説明は必要
		40~49歳	自然にその程度の量があるということは、現在の基準値と比較して安心につながると思われる
			特になし
			科学的な根拠がありそう
			普段の生活をしていても被爆しているという事実は、放射能に過敏に反応しすぎなくても良いと思えるから
			心配しても仕方がない
			放射性物質はもともと自然界に存在しており、その事を事前に知っていた為
			自然界では当然のことと理解している
			安心感はあるが、それなら何でセシウムを100ベクレルで規制するのかといった疑問に答えていく必要がある
			ごく自然な事象で影響が考えにくいから
			実際そのようであることは講演等で聞いたことがある
		50~59歳	事故と無縁の放射性物質の存在が理解できる
			自然界のことで体験済みであるため
			今回の事故の影響が定量的に把握できる
			どうすることもできない事案
			人類誕生以来継続しているものであるから
		60~69歳	ある程度の知見を持っている方であれば知っている話です
			自然界存在し食品にも含まれているのであれば心配はしない
			自然放射性物質の用語から漠然とした安心感
			自然界に放射性物質がある事を理解して
			書籍等での知識
			食物の健康影響には正負の両面があるが、これらを意識していれば問題なし。過去の実績が物語る
			人間の生活にとって必要不可欠のものだから
			リスク(0ゼロ)は不可能
人体影響の単位は極めて微量のため心配ない			
科学的根拠			
自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため			
70歳以上	数値上で見る上で限りなく少の為		
	特に安心というわけではないがこれまでも食していることから		
	新たな技術の応用も研究されている		
			当然のこと

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	20～29 歳	人間が今までその影響を受けることなく生活している為 人間は常に放射性物質とともに生きている、一つのよい例
		30～39 歳	今まで知らなかった被爆の数値が示されるのは、消費者が差別をする事を避ける重要事項だと思われる 今まで特に影響がないので 自然界に、昔からあるものだから
			もともとあるということが少し安心である
		40～49 歳	もともと自然界に存在するものであるのだという暗示のような安心感 長年日本人が食べてきたもので、健康被害が出たとは聞かないから
			自然界から受ける放射能レベルは推定数値化で測るしかないから
		50～59 歳	人類がこれまで食べてきた食品にすでに放射性物質が含まれていたが、そのことによる影響よりも科学の発達で寿命は延びてきており、健康への影響は少ないと考えられるため 必要物質も摂取量の問題であるのは他のモノも同様のため
60～69 歳	個々の差はあるにしても、在ることは試算されているから		
食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	自然放射性物質の局在と、人工放射性物質の局在に違いがあるにもかかわらず、線量だけで比較することに意味があるのか不明である。自然放射性物質に関しては、ことさら恐れる必要は無い 自然界で生活するのに当たり前の事なので、特段不安を感じません
		40～49 歳	もともと存在しているものであれば問題ないはず
		50～59 歳	これまでもずっと起こっていたことであるため 当然である
		60～69 歳	安心感の有無ではなく、しょうがないとあきらめるための数字ですね 公的資料で広く知られている
	女性	40～49 歳	自然放射性物質についてはその影響が大きくないことが明らかだから 以前から知られていることだから
	医療・教育職 経験者	男性	40～49 歳
50～59 歳			100～200 ベクレルの意味が分かるし、機器で測定して実感しているから
女性		40～49 歳	いろんな産地の環境まではわからないから、そこまで気にしない 過去にこの事が原因で健康に影響が出たとは聞いていないから 一般論的な話なので安心感というよりもさほど気にならない
		50～59 歳	実験値に基づくから 科学的に得られた数値だから
			自然界の食べ物には本来自然放射性物質が含まれていることは、あまり神経質に(他にも)ならないように納得できる
		60～69 歳	現在は不安がないが、原発がある以上事故は0ではない。自然界への影響がでるのではと不安
その他消費者 一般	男性	30～39 歳	以前から放射線物質をとりこんでいる いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、自分にとって不利な情報でも安心感につながる
		20～29 歳	自然に放射性物質があることは普通のこと
	女性	30～39 歳	今まで自然放射性物質を摂取していた事実を知ったから なんとなく
			新しい規制値に納得できる ふつうのことだから
		40～49 歳	信用できるデータ その数値分を摂取しても害がないのだろうか 納得できる数値だから
			そのようなことまで気にする人は精神面で生きていけないと思う 量が微量なので
		50～59 歳	人間の口の中に入るまでの過程だから、納得出来ます 自然放射性物質は人為的被害ではないから 初めて知り、安心した

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=28人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	40～49歳	冊子等で記載されたものを以前見た事がある
		50～59歳	内容には安心感があるが、文章内に核実験と原発を記載する必要があるのか。岩石や宇宙線による自然被曝の数値も記載し、それによる発がんのリスクも高くないことの記載が欠けている
			放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大きい為、心配すべきなのか否かさっぱりしない
			自分の被ばく量がどの程度かわからない
		その時によって基準や単位がまちまちで分かりづらい。とても不安です	
		60～69歳	この説明では放射線物質に良し悪しがないことが説明されていない
	自然放射性物質に原発事故放射性物質がプラスになる		
	疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方が良いことは真理である		
	科学的技術根拠に裏づけされていません 食品安全委員会のホームページに記載 産地による差		
	女性	30～39歳	地球上の生命である限り、放射性物質や放射線とはきっても切り離せない関係であるため、ある程度は基本的な環境として受け入れなければならないと思う。ただ、やはり事故は心配
A、Bでシーベルト表記だったのに、ここではベクレル、そういった統一感のなさも不安にさせる要因の1つだと思う			
40～49歳		核種が異なるとSv換算が異なり、人体への影響に触れていないから そんなことはいいわけにならない “核実験や原発事故がなくても”という一文が安心の1つになりますが、“～200ベクレル程度”という曖昧な表現が不安になってしまう為 特に魚はどこの海を泳ぎ保有している量が不明	
食品関係研究 職経験者	男性	40～49歳	自然界の放射能に原発事故分が加算された場合に言及していないから
		50～59歳	安心して食べられない 調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定のできないことだから
	女性	30～39歳	事故前に測定された情報はなく、信頼性に欠けるから
医療・教育職 経験者	女性	30～39歳	分かっている不安がある
		40～49歳	自分で測定できないから
その他消費者 一般	女性	40～49歳	今回のことが起こって消費者は関心を高めた。今までなぜ情報がうすかったのか？行政は食の安全安心をどう考え、行ってきたのか分からない 言い訳がましい
			自然放射性物質に加えて、事故由来の放射性物質も摂取することになると考えると安心材料にはならない 数値の把握ができていないから
		60～69歳	情報量が少なすぎる

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=56人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30～39歳	自然界にはもともと放射性物質があると大学で勉強したから
		40～49歳	通常にこの程度は被爆しても大丈夫と思える
			自然放射性物質だから
		50～59歳	自然界に存在するから
			人為出なければやむをえない
	もともと自然界において含まれているなら仕方がないと思うから		
	60～69歳	なんとなく	
		数値は知らなかったが、自然界に放射性物質が存在するから	
		事実であるから	
		信憑性のある情報としての前提条件の上で受け止めるしかないのでは	
女性	30～39歳	放射性物質の実態が理解されてゆく	
		大気中から取り入られているが量的には安全の範囲内	
		大きなリスクではない	
		歴史が存在	
	70歳以上	数値	
食品関係研究 職経験者	男性	30～39歳	信じるしかない
		40～49歳	原発事故以前と変わらない事柄であるから
			安心感というより、聞いたことがある話であるため
			根拠のあるデータ結果であると感じるため
			もともとの被ばく量が明らかであるため
50～59歳	事実として容認		
医療・教育職 経験者	女性	30～39歳	自然界に昔からあるものだからどうしようもない、ではどうしたらいいのか
		40～49歳	広島や長崎の事例も含め、仕方がないことであり、今となっては逃げられるものでもない。広島や長崎の方々が被ばくしながら、今も元気で生活している方が多数いらっしゃることも、多少の数値では不安はない
			元来の食品にも含まれているため
			元々そういうものだと思うから
			核実験がなくても放射の物質張る程度地球上にはある、それに立ち向かい方法が移設
60～69歳	数値で示されている		
その他消費者 一般	男性	30～39歳	自然に摂取されているものだから
		60～69歳	現況、問題ないレベル
医療・教育職 経験者	男性	30～39歳	仕方が無い
		40～49歳	科学的根拠が具体的に示されているので
	女性	30～39歳	自然被ばくもあるため
		40～49歳	信頼できる専門家から直接聞いたことがある
			自分への健康被害が出ていないため
		50～59歳	説明が具体的
			自然界に存在する限り仕方がない
60～69歳	自然に存在するものならば、今まで明らかな被害はないため		
その他消費者 一般	男性	30～39歳	なんとなく
		40～49歳	自然界由来であるから
		60～69歳	被災地の食品は購入しない

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	女性	20～29 歳	原発事故前に算出された値であり、原発事故によって操作されていないと思うからこの科学的知見に納得
		30～39 歳	定量値が得られているから
			放射性物質をもともと摂取していることが分かる文章だから
			放射性物質が0ではないと思っていたので
		40～49 歳	原発事故前には曖昧だった自分の知識が、専門家の情報提供などにより深まったので
			自然に含まれているものだから
			食べ物にはもともと放射性物質が含まれているのを知っているから
			自然界に放射性物質があることは知っていた
		50～59 歳	もともとあるものには対応できていると感じる
			これも以前より聞くことが多く、納得できている
長年や野菜や魚を摂取しても100%の人が癌になっていない			
60～69 歳	もともと食品に含まれていて、昔から食べられているから		
		60～69 歳	自然放射能物質

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=49人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30～39 歳	原発事故とは関係ないから
		40～49 歳	カリウム40は確かにありますが、もう少し少ないです
			歴史的諸外国とレベルがこれと同等なのかわからない
		50～59 歳	もっと濃度の高い食品が出回っている
			核実験や原発事故の影響のない食品を如何にして調達したかが不明？
			原発事故が発生して初めてこのような数字が公の場に出てきた
	女性	60～69 歳	漠然と
			自然界の放射線を理由に事故の不安は和らがない
			理解度が低い
		30～39 歳	知らないから
			健康影響を追加被ばく量で論じているので、比較しようがない。また、シーベルトの単位で健康影響を考えているので、ベクレルと言われてもピンとこない
			これまでシーベルトで説明してきたのだからここもシーベルトで説明してもらいたい
40～49 歳	良く判らないから		
	地域差があるから		
	原発事故後、魚やきのこ等ではかなり高い数値が出ていたため		
50～59 歳	本当なのか		
	現状では事故後の実数値が知りたいので、比較すべきだ		
	元々含まれているという話は聞くが、今回の事故とは話の次元が違う		
60～69 歳	現代癌が増加している理由かもしれないから		
	食べなくてもいいものがあるのなら食べない事にこしたことはない		
	全ての項目に漠然とした不安がある		
食品関係研究 職経験者	男性	知識不足	
		これらは微量だから	
		これらは微量だから	
医療・教育職 経験者	男性	20～29 歳	食品中に放射性物質が含まれているため
		50～59 歳	ベクレルの意味がわからない
		60～69 歳	安心感と言う不可解な判断基準では回答不可
	女性	50～59 歳	だから安全とはいえない
		60～69 歳	数値を示されても、自身の健康への影響の程度が分からない
			被爆事例、症例が少ない
		30～39 歳	ベクレルについてよく知らない
		50～59 歳	発言者がどのような人かわからないので
			自然放射性物質と原発事故の放射性物質の拡散には違いがあると思うし、その影響が明確になっていないと考えるので
60～69 歳	食品にふつうに含まれていることへの不安		
70 歳以上	記載内容がわかりにくい		
	農産生産物は土から影響を受けやすい		

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	自然と人為的な放射能の影響が同じと思えない
		50～59 歳	自然放射能物質があるから抵抗力があるともいえるのかわからないが、これに放射能が追加されればどうなるのか不明で不安
	女性	20～29 歳	なくても含まれているのであれば、今は膨大であると考えてしまう 自然放射性物質と原発からの放射性物質は別物であり、比較することはできない。原発からの放射性物質は事故が起こらなければ摂取せずに済んだものである 正確なデータがないので
		30～39 歳	自然界であってもいまはより多く放射能を受けていると思うと不安だから 自然放射線と原発事故の放射線は一緒でも同じように考えるのはおかしい。原発事故がなければ摂取しないで済んだし・・・
		40～49 歳	基準がよくわからない
			もともと含まれているから安心かと問われても、安心とは言えない
			よくわからないから不安
		50～59 歳	良くわからないから
	60～69 歳	良くわからない 人体に影響を及ぼす値がわからないから 自然放射性物質からの影響がある事は分かるがそれらの数値の複合による影響が分からない	

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=9人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	50～59 歳	通常の状態がわかり比較しやすい
		60～69 歳	何も無い日常生活の放射線被ばくを知ることで過敏な反応が緩和される 知らなかったがこの情報で
	女性	50～59 歳	自然の食べ物からも放射性物質は取り込まれるから
医療・教育職 経験者	女性	30～39 歳	常識
		50～59 歳	そんなものだと思っている
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	なんとなく
	女性	30～39 歳	個人的に調べるすべもないことなので、情報は基本的に信じているため 長年それで問題がなかったから

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=7人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	30～39 歳	なぜ自然放射性物質が含まれるのか疑問
		40～49 歳	食べ物に正直それほどまでの放射性物質が含まれているとは考えなかった為
食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	他のものの健康リスクを述べていて、本質とは異なる議論になっているため
医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	病気にならないのかな
	女性	30～39 歳	過敏になっているため
その他消費者 一般	女性	30～39 歳	産地やちょっとしたずれ(汚染)も考えると、ひとくりにそう思えない
		40～49 歳	どの程度までだと安心できる数値なのかわからない

(D) カリウム 40 などの自然放射性物質も、ヨウ素 131 やセシウム 137 などの原発事故由来の放射性物質も、人の健康影響のメカニズム (DNA の損傷) は同じである。健康影響の強さは、核種や年齢により異なり、乳幼児ではカリウム 40 の方がセシウム 137 よりも 2 ~ 3 倍程度影響が強いが、成人ではセシウム 137 の方がカリウム 40 よりも 2 倍程度影響が強いとされている。

(全回答者数=227 人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=30 人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務経験者	男性	30~39 歳	自然界にある放射性物質の説明は必要	
		40~49 歳	科学的な根拠がありそう	
			普段の生活をしていても被爆しているという事実は、放射能に過敏に反応しすぎなくても良いと思えるから 事実だから	
		50~59 歳	事実として科学的な判りやすい文面	
		60~69 歳	報道などからの情報 書籍等での知識 ヨウ素の甲状腺に与える影響は幼児により多い 放射性物質に良いも悪いもないことがよく理解できる 年齢、核種により差はあるが実効線量計数は 10^{-4} から 10^{-6} であり問題となる SV 数量にはならない 科学的根拠 自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため 大きなリスクではない	
			70 歳以上	データによる 定説
			女性	30~39 歳
	40~49 歳			きちんとしたデータを取っているので情報を得ていれば大丈夫 事実として容認
	女性	50~59 歳	人間は一定量の被ばくがあっても、直ちに健康に影響を及ぼすものではないことの証明となるため、わずかな量の人工的な放射性物質だけを避ける必要がないと思ったので	
		食品関係研究職経験者	男性	40~49 歳
50~59 歳			これまでもずっと起こっていたことであるため	
60~69 歳	既成の事実である			
医療・教育職経験者	男性	40~49 歳	自然放射性物質についてはその影響が大きくないことが明らかだから	
	女性	30~39 歳	仕方が無い	
その他消費者一般	女性	30~39 歳	数字だけでは対応の仕方がわからない	
		40~49 歳	難しいけど、自然にあるものなら仕方ない	
		40~49 歳	アイソトープを使った実験をしていたので、そのへんのところは知っている	
		50~59 歳	私自身は50代なのであまり心配していない	

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=22人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	天然放射性元素と人工放射性元素の違いを明確に示していない
		40～49歳	生物学的半減期などの情報を追加しないと子どもと成人で差が出るのか理解できない。よく分からないがやはり危険と言う認識につながりかねない
		50～59歳	このリスクがなければ、人類がもっと長寿になることも考えられる
		60～69歳	疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方が良いことは真理である 科学的技術根拠に裏づけされていません 特に乳幼児に不安がある
	女性	50～59歳	全ての項目に漠然とした不安がある
食品関係研究職経験者	男性	30～39歳	自然界で生活するのに当たり前の事なので、特段不安を感じません
		40～49歳	ポジティブデータしか紹介されていないから
		50～59歳	ますます不安になる 調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定のできないことだから
医療・教育職経験者	男性	40～49歳	本当の影響が不明
		60～69歳	データ不足であり、2、3倍程度の差で健康影響を一般化しすぎる
		30～39歳	分かっている不安がある
	女性	40～49歳	DNA 損傷の原因は区別できないから 自然放射性物質と原発事故由来放射性物質とは、代謝など人への影響が異なる。同等に考えるのはおかしい
		60～69歳	乳幼児と大人では核種により健康への影響は異なるが、科学的には十分に立証されたとは言えない
その他消費者一般	女性	40～49歳	この分野は、どこで、いつ学ぶべきことなのか？だったら流通制限した方が良いかもしれない。どうすれば良いか、情報がない 自然放射性物質が健康に及ぼす程度が分からない
		50～59歳	乳幼児に与える影響はこれから出てくるので、わからないという不安がある 半減期が身体に影響が強いと感じるから
		60～69歳	情報量が少なすぎる

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=33人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	BとCの情報を合わせて、放射線カリウムの存在比と放射性セシウムとの影響度の違いを明確にすることで安心感が出てくる 健康影響のメカニズムが、核種が異なっても同じということは、放射性物質が自然界にもあるということを知っていれば安心につながると思われる	
			40～49歳	リスクは低い 核種の違いはあっても、影響は同程度な為 講演等で情報を得ている 自然科学のことで分かっている内容であれば、不安は特にない
		50～59歳		止むを得ない 正しい知識が提供されている 理屈がわかっている人には安心感提供の材料になる ある程度の知見を持っている方であれば知っている話です 自然界存在し食品にも含まれているものであれば心配はしない なんとなく
				60～69歳
			70歳以上	

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	女性	30～39 歳	信じるしかない 乳幼児にはカリウムの方が影響が強いところ
		40～49 歳	自然放射性物質と原発由来の放射性物質の健康影響の程度差が、2、3倍なら心配する程ではないから 広島や長崎の事例も含め、仕方のないことであり、今となっては逃げられるものでもない。広島や長崎の方々が被ばくしながら、今も元気で生活していられる方が多数いらっしゃることも、多少の数値では不安はない
		50～59 歳	自然界から受ける放射能レベルは推定数値化で測るしかないから これは難しいです
医療・教育職経験者	男性	40～49 歳	科学的根拠が具体的に示されているので
	女性	30～39 歳	カリウムはもともとあったもののため
		40～49 歳	何が原因でも健康に影響が出るのは「量」の問題だと思っているから
		50～59 歳	科学的根拠があるから 科学的知見に基づく
60～69 歳	現在は不安がないが、原発があるかぎり将来的には不安		
その他消費者一般	男性	30～39 歳	なんとなく
	女性	20～29 歳	科学的に納得ができる
		30～39 歳	原発事故前には曖昧だった自分の知識が、専門家の情報提供などにより深まったので
		40～49 歳	科学的解明が進んでいると思われる
50～59 歳	なんとなく、安心		

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=60人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	40～49 歳	根拠となるデータ不足では？
			歴史的諸外国とレベルがこれと同等なのかわからない
			全く安心の根拠とならない
		50～59 歳	影響は同じかもしれないが、絶対量として考えるとわからない
			いたずらに恐怖心をあおる結果になりそうである
			放射能検査で調べてもらうとほとんど出ないので安心しております
			専門家による安全に関する根拠が分かりづらい
			地域別に年代別に細かく示してほしい
			自然界の放射線を理由に事故の不安は和らがない
60～69 歳	理解度が低い		
	遺伝への影響は、何世代も後のことで、その大きさは非常に小さいと聞きました(青木真三先生)		
	知らないから		
	食品による健康影響を追加総被ばく量で考えているので、自然放射性物質の話を持ち出されてもピンとこない		
	だからどうなのか？科学的事実を述べるだけでは何を言いたいのか分からない		
	根拠に確証を持ってない 良く判らないから 安心できるわけがないのでは		

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	20～29 歳	人の健康影響のメカニズムが一緒という説明は気にならないが、健康影響の強さの説明を読むと漠然としている為
		30～39 歳	食品中の放射性物質は事故があってもなくても、食品によって多少があるので、その量や安全性が気になる
			この文章は自然放射性物質であれ原発事故由来の放射性物質であれ、放射性物質は健康に影響があると云っているようだ。どれくらいの被ばくが健康に影響を与えるか(DNA 損傷と修復のバランスが崩れるか)については述べていない
			影響のレベルが分かりにくい
			本当なのか
		40～49 歳	そんなことはいいわけにならない
			科学的に原発由来の放射線物質の方が安全だと確認されていても、経験がないため、個人に対してどのように影響するかは、わからないから
			乳幼児と成人への影響する物質が正反対だった為、その中間層はどうか?といった不安も生まれるから
			人によりといえるが影響は避けられないのだという不安
		50～59 歳	食べなくてもいいものがあるのなら食べない事にこしたことはない
原発の影響より普段の食生活の方が怖いと改めて思った			
60～69 歳	乳幼児と成人の影響の逆転現象が理解できない		
	知識不足		
食品関係研究 職経験者	男性	20～29 歳	成人と幼児でなぜ差が出るのか情報が少ない
		30～39 歳	どの程度放射性物質の影響をうけているか分からないため
		50～59 歳	意味不明
		60～69 歳	幼児にも成人にも影響があると感ず 「健康影響の強さは～」のくだりは不安を感じる
	女性	30～39 歳	比較しても安心できるような情報ではないから
		40～49 歳	同じものとはわかるが、安心感を比較するのはどうかと思う
医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	筋肉への蓄積性とか、骨髄などへの距離は? 数値を示されても、自身の健康への影響の程度が分からない
		60～69 歳	被爆事例、症例が少ない
	女性	30～39 歳	発言者がどのような人かわからないので
		60～69 歳	自然界にあること自体不安 若年層の場合は気になります
		70 歳以上	将来を担う乳幼児対策をしっかり対策をたてほしい
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	内容的にも不安であるが、この数字で健康を保持するための対応方法が周知されているのかも知らず、不安である
		60～69 歳	大人は良いが、子供の居る家庭は心配
	女性	20～29 歳	自然放射性物質と原発からの放射性物質は別物であり、比較することはできない。原発からの放射性物質は事故が起こらなければ摂取せずに済んだものである
		30～39 歳	どうしようもないから
		40～49 歳	よく分からない
			臨床的例は不十分
			たとえ影響が同じと言われても、本来なら影響を受けなかったかもしれないのに事故によって影響を受ける機会が増えたと考えると安心材料にはならない
		50～59 歳	情報収集不足
良く分からないから			
数字だけでも怖い			
60～69 歳	放射性物資が自然であろうが、原発から発生した放射能であろうが、人体へのメカニズムが同じといえど、不必要に放射能を摂取したくない		
	自然放射性物質と原発事故由来の複合汚染の危険度が分からない 化学的根拠に疑問		

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=21人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	30~39歳	安心とかではなく、事実なので仕方がない(※安心感ある、なしの間はおかしい。間に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安心をひっぱりだそうと感じてしまう) 自分は成人であり、原発事故によりまき散らされている放射性物質はより、健康に影響を与えやすいから
		60~69歳	数値は知らなかったが、自然界に放射性物質が存在するから 信憑性のある情報としての前提条件の上で受け止めるしかないのでは 知らなかったがこの情報で 個々事例に対して具体的な影響がわかること
	女性	40~49歳	あまり聞かず不安でないから
	食品関係研究職経験者	男性	60~69歳
医療・教育職経験者	女性	40~49歳	具体的な数値が出ている
		60~69歳	なんとなく
その他消費者一般	男性	30~39歳	いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、自分にとって不利な情報でも安心感につながる
	男性	50~59歳	なんとなく
	女性	20~29歳	原発事故前に算出された値であり、原発事故によって操作されていないと思うから この科学的知見に納得
		30~39歳	漠然とした安心感がある 個人的に調べるすべもないことなので、情報は基本的に信じているため その状態で長年問題がなかったから
		40~49歳	知らなかったので興味深い。もっと詳しく知りたい
			自然の量は対処できていると思う
			自然放射性物質も原発由来も健康影響のメカニズムは同じということなので、まあ仕方ないかなと
50~59歳	説明内容でわかるから		

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=61人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務経験者	男性	20~29歳	カリウムとは？具体的には何に含まれるのか？	
		30~39歳	原発事故とは関係ないから	
		40~49歳	データは理解したが、今後本当に影響が無い心配 よくわかりません	
			人体に影響を及ぼす点	
		50~59歳	放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大きい為、心配すべきなのか否かさえはっきりしない 影響の度合いをどのようにして測定したのかが不明？ ハッキリとした数値はでていないと考える	
			いつの年代でも健康に影響があつては困るし、自分の健康に影響を及ぼすものが、自然なのか事故由来なのかわからないことによる不安がある 放射性物質の名称や許容範囲は学校で勉強した記憶がない 不安要素を隠そうとする様な比較論にしか聞こえません 影響があると云っているのだから	
			60~69歳	科学的に十分に解明されていないから
				絶対的な安全は、無いことは理解しているが、この項の末尾の表現が、“されている” になっていて、この表現に一抹の不安を感じる
				いずれも程度の差こそあれ、DNAの損傷に影響する 初耳 数値の信頼性
		70歳以上	意味不明 同感である	

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	30～39 歳	乳幼児には自然由来の方が影響が強いとはいえ、原発事故由来の放射性物質が、まだ有り続け、事態の終息が見えないから
			文章が長くてわかりにくい
			自然であろうが、原発であろうが体を傷つけることは一緒なので、安心感はない 難しい 難しい事→理解ができず不安につながる 乳幼児への影響は今後の継続期間も考えて安心できない 信用しがたい
		40～49 歳	Cと同様で、事故により被爆した事と話の次元が違い、話題をすりかえられている感じを受けてしまう
			これらの情報があってもだから何なのか、ではどうしたらいいのかが分からなければ何にもならない。対応策を明確にすることの方が大切だし、現実的 カリウム セシウムの性質がわからない 現代癌が増加している理由かもしれないから
			50～59 歳
		60～69 歳	乳幼児への影響について説明されていない
食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	健康影響のメカニズムは、放射線に限って言えば同じであるが、物質の体内での挙動、局在を考慮すると、同じとは言い難い。乳幼児でカリウム 40の方が影響が強いという論文は見たことがないため、この説が妥当なのか不明である。しかし、自然放射性物質に対しては進化の過程で適応していると考えられる。チェルノブイリで人工放射性物質によって乳幼児が死んだという知見はたくさんあるが、カリウム 40で乳幼児が死んだという知見は見たことがない 他のものの健康リスクを述べていて、本質とは異なる議論になっているため
			60～69 歳
		50～59 歳	だから安全とはいえない 何を食べても病気になるのか
医療・教育職 経験者	男性	30～39 歳	自然放射性物質は日常生活でベースにあるのだから比較にならない どちらにしても、人に対して影響が生じるため だからどう影響あるのかがここからは読み取れない
		40～49 歳	値がよくわからない その値が自分自身にも必ず当てはまるかわからない不安
	女性	50～59 歳	原発事故の放射性物質には、ヨウ素、セシウム以外に影響がある物質が含まれると考えるので 健康被害がでるため 自分自身が知らないから
			40～49 歳
	その他消費者 一般	男性	40～49 歳
50～59 歳			本当に人への影響がないのか信じられない、充分にわかっていない
女性		20～29 歳	どちらにしても健康に影響を及ぼすとらえている 年齢により健康影響が違うとのこと、特に成人と乳幼児で違うということは対応の仕方をかえなければいけないのか、それはどうすべきなのかという不安が出てくるため安心感がない 実験例があるのか？
		30～39 歳	成人は原発事故由来のセシウム137の方が影響が強く、これから自分は妊娠する可能性があるため、胎児にどのような悪影響があるのか不安を感じたから 自分には小さい娘がいるので、今後の健康がより不安になる 影響の強さの定量性が理解できていないから 乳幼児と成人で影響が異なるのがなぜかよく分からないから 原発事故が実際に起きてしまっているから あまりに専門的すぎて、よけいとまどい安心はできない
40～49 歳			内容が理解しづらい 基準がよくわからない よくわからないから不安 よく知らないことなので、自分自身が理解していないため、安心できるとは言えない
			50～59 歳

(E) 人間の体内にも自然放射性物質があり、体重 65Kg の男性だと 7900 ベクレル程度と試算されている。

(全回答者数=220 人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=36 人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	20~29 歳	きちんとしたデータだ
		30~39 歳	自然界にある放射性物質の説明は必要
			人体にその程度の量があるということは、現在の基準値と比較して安心につながると思われる
		40~49 歳	普段の生活をしていても被爆しているという事実は、放射能に過敏に反応しすぎなくても良いと思えるから
			自然蓄積された放射能による汚染、という概念がない
			とにかく説明は比較しやすい単位で。食品は、ベクレル/食品キログラムで人間はベクレル/総体重では比較できない 長年自然からの影響を受けていることは知っている 自然科学のことで分かっている内容であれば、不安は特にならない
		50~59 歳	事実として科学的な判りやすい文面
	既に人間に存在するものであれば許容限界を越えなければ心配はしない なんとなく		
	60~69 歳	信憑性のある情報としての前提条件の上で受け止めるしかないのでは 書籍等での知識	
		食物を摂取する以上リスクはあるが、それ以上の満足感・充実感等がある。今まで大きな健康上の支障もなく生きて来られているということでしょうか	
食品を摂食している限り、また、地球上に生きている限りゼロにはなりえない。 自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため 大きなリスクではない			
70 歳以上	データによる		
女性	40~49 歳	もともとあるということが少し安心である	
	50~59 歳	すでに体の中にも放射性物質があり、新たに取り込む放射性物質による内部被爆ばくに対して神経質になる必要がないと判断できるため	
		当然のことと思うため	
60~69 歳	人間の体内にも放射能物質が以外とあることも知ってもらうことも必要		
食品関係研究職経験者	男性	30~39 歳	自然放射性物質に関しては、進化の過程で克服してきたものなので、大きな影響は受けないと考える
			自然放射性物質との共存、という観点での食育指導を行っていますので、特段の不安はありません
		40~49 歳	もともと存在しているものであれば問題ないはず
		50~59 歳	これまでもずっと起こっていたことであるため
60~69 歳	既成の事実である		
医療・教育職経験者	男性	50~59 歳	そういう状況で進化してきている。いまさら逃れられない
	女性	30~39 歳	自然被ばくもあるため
		40~49 歳	結構自然にあるんだな
			一般論的な話なので安心感というよりもさほど気にならない
50~59 歳	存在しているか狩り仕方ない		
その他消費者一般	女性	20~29 歳	科学的に納得ができる
		40~49 歳	もともとその程度の放射性物質はあることがわかる
			自然の状態でも放射線をあびることは知っているから
50~59 歳	人間の手にはどうしようもないことである		

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=16人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30～39 歳	これだけの情報だけでは安心感を得られない。追加で放射性物質を取り込んでしまったら、より悪影響があるのではないと思われるのではないかと 由来がわからない
		50～59 歳	放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大きい為、心配すべきなのか否かさえはっきりしない このリスクがなければ、人類がもっと長寿になることも考えられる
		60～69 歳	何故かという説明がないこと、また、だから安全ということにはならない 疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方が良いことは真理である 科学的技術根拠に裏づけされていません
		70 歳以上	根拠不明
	女性	30～39 歳	そんなことはいいわけにならない
		50～59 歳	全ての項目に漠然とした不安がある
		60～69 歳	あくまでそう言われているのレベルなのであるから確定ではない
医療・教育職 経験者	女性	40～49 歳	由来が自然からか区別できないから
その他消費者 一般	女性	40～49 歳	Cと同じ理由で体内に存在する放射性物質に加えて事故由来の放射性物質を摂取すると考えると安心できない 7900 ベクレルに対する単位がわからないから
		50～59 歳	数字をみると不安
		60～69 歳	情報量が少なすぎる

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=53人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務 経験者	男性	30～39 歳	安心とかではなく、事実である(※安心感ある、なしの間はおかしい。間に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安心をひっぱりだそうと感じてしまう)	
			日常、自然のことで人工的なものでないから	
		40～49 歳	リスクは低い 放射性物質はもとから自然界に存在しており、その事を事前に知っていた為 事実だから この程度はすでに自分自身が持っていると思うと安心である 事故と無縁の放射性物質の存在が理解できる 実際に数値を言われてもわかりません	
			50～59 歳	漠然とした安心感 止むを得ない 理解できれば安心できるが最初の感じは良くない ある程度の知見を持っている方であれば知っている話です
			60～69 歳	漠然とした安心感 数値は知らなかったが、自然界に放射性物質が存在するから 事実であるから 放射性物質の実態が理解されてゆく 低い数値 人間ほぼ平等に受けているので
		70 歳以上	宇宙と植物、食物連鎖などの広い視野を持つ必要	

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	20～29 歳	自然に体内にあるものだと理解している為
		30～39 歳	人の中にこれだけの放射性物質がある。1ベクレルもだめ、という愚かなことをいう人に、よく知ってもらいたい
			被爆は特別なことでない事を知ることは、安心感を与えられる
			多いので驚いたが、変えられない事実だから
			文章が短くて分かりやすい
			ちゃんと試算されているので
			基準になるような値が試算されているので
		40～49 歳	7900 ベクレルがイメージしにくい、人間の体内にも自然放射線が存在していることは分かる
			体内にあるものは、必要なために存在していると思うから
			人間も自然の一部だという安心感
事実として容認			
食品関係研究 職経験者	男性	50～59 歳	前々からのことだから
	女性	60～69 歳	比較の根拠が具体的であるため
		40～49 歳	根拠があると思うから
医療・教育職 経験者	男性	30～39 歳	自然の摂理だから
	女性	30～39 歳	その通りだと思うから
		40～49 歳	過去にこの事が原因で健康に影響が出たとは聞いていないから 具体的な数値が出ている
		60～69 歳	現在は不安がないが、原発があるかぎり将来的には不安
その他消費者 一般	男性	30～39 歳	身近なものに感じる いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、自分にとって不利な情報でも安心感につながる
		40～49 歳	もともと自分にあるものだから
	女性	20～29 歳	原発事故前に算出された値であり、原発事故によって操作されていないと思うから
		30～39 歳	元々、自然放射性物質があることがわかり、原発事故による放射性物質への過度な不安が軽減される為
			食品中に自然に含まれている放射性物質の値の方が小さいことがわかったから
			事故に関係なく存在するものなので 個人的に調べるすべもないことなので、情報は基本的に信じているため 本来的なことだから
		40～49 歳	自然界に放射性物質があることは知っていた 今回の原発事故による被曝量がもんだい
		50～59 歳	そうなのだと、わかり安心

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=47人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	40～49歳	大まかな日本人という区分どうなんですか？平均値の出し方が???ですそれがどういことなのか分からない点
		50～59歳	7900ベクレルの体内物質は太古の時代からあったのか、また未来にわたって影響が出ないと言えるのかわからないから
			存在していることは知っていても数字まで理解している国民はほとんどいない自分の被ばく量がどの程度かわからない理解度が低い
		60～69歳	数値の理解が出来てない知らないから
			新たな被ばくに対する不安であって、人類が有史以来個有している放射性物質は、安心を深めることには繋がらない
		女性	30～39歳
	40～49歳		自然体に…
			良く判らないから
			設問の意図がわからない
	食品関係研究職経験者	男性	20～29歳
30～39歳			自然放射性物質がそもそもあること自体不安である
40～49歳			C,D同様、話のすり替えにしか聞こえない
50～59歳			これは正常なのか…その数字の実際の悪影響が不明
60～69歳			人間の体内にも放射性物質があるため
女性		30～39歳	これだけでは、7900ベクレルが多いのかどうかかわからない
		40～49歳	試算されているからどうしたのですか。結論がない
			意味不明
			調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定できないことだから
			安心感と言う不可解な判断基準では回答不可
医療・教育職経験者	男性	30～39歳	D同様、この情報では安心感を得ることはできない
		40～49歳	試算の根拠がわからないから
		40～49歳	個人差もあり、そのことによる影響が不明
	女性	50～59歳	数値を示されても、自身の健康への影響の程度が分からない
		60～69歳	被爆事例、症例が少ない
		30～39歳	発言者がどのような人かわからないので
		60～69歳	体内にあること自体不安
			だからと言って、食品中から沢山摂取するのはどうかと思う疑問を感じる
		70歳以上	医療用のX線、CTなども多使用すると蓄積されるのではないかなんとか
その他消費者一般	男性	30～39歳	なんとか
		50～59歳	自然放射能物質があるから抵抗力があるとでもいえるのかどうか知らないが、これに放射能が追加されればどうなるのか不明で不安
		60～69歳	被ばくした人だともっと高いのではないのか放射線量について国民は過剰な誤意識を持っているように感じる。数字で安心・安全といわれても納得性が乏しい
	女性	30～39歳	あくまで試算だから本当はどうかわからないからどうにもできないから
		40～49歳	面白いと思うが、安心に結びつくかと言われると特にそうでもない
			これによって、何も健康被害がないといわれれば安心できるが漠然としたデータでは納得できない
		50～59歳	良く分からないから
			漠然と怖い
			原発がたくさんある日本の中に住んでいる限り、同じ条件ではないので、安心という文字はないと思います
		60～69歳	想像より多いので不安
	化学的根拠に疑問		

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=29人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務経験者	男性	40～49歳	Dの情報の関連で科学的な印象	
		50～59歳	正しい知識が提供されている	
		60～69歳	受け入れられる 知らなかったがこの情報で	
	女性	30～39歳	確認されているので 人間ならば誰しもあることなので安心感はあると思う 根拠のあるデータ結果であると感じるため	
		40～49歳	人間の体内にもあるというのは安心できる 過去から続いているから 特に理由がない 体内の放射性物質のことは知らなかったが、その状態で長寿の方が沢山いるのだから、微量の放射性物質を心配する必要はないと感じたから	
		50～59歳	もともとそういうものだと思うから	
		60～69歳	体内の適応性はある 数値で示されている	
		食品関係研究職経験者	男性	60～69歳
	医療・教育職経験者	男性	40～49歳	科学的根拠が具体的に示されているので
50～59歳			今までと同じレベルの状態だから	
女性		50～59歳	数値がきちんと示されているから 自然なものなので	
その他消費者一般	男性	60～69歳	よくわからないから	
		50～59歳	自然の摂理なので	
	女性	20～29歳	自然界由来のものだから→人災による放射性物質という点で不安がある 定量値が得られているから。	
		30～39歳	放射性物質が体内にすでに存在していることが分かる文章だから 漠然とした安心感がある こういう表現だと、身体測定のレントゲン検査の考えで、まだ受け入れられる	
		40～49歳	人間の体内にも自然放射性物質があることを知ったから はっきりとした数値をだされれば安心	
50～59歳	自然なら仕方がないから			

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=39人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	原発事故とは関係ないから	
		40～49歳	データは理解したが、今後本当に影響が無いか心配 もっと少ないです	
			全く安心の根拠とならない	
		50～59歳	Cの自然界の野菜に比べると多い 自然界にも放射性物質がある事は分っているが、7900ベクレルがどんな量なのか 解りかねます 結果的に影響があるように思えるから 自然界の放射線を理由に事故の不安は和らがない	
			60～69歳	余計に不安になった だからどうなのか？ 科学的事実を述べるだけでは何を言いたいのか分からない。 根拠に確証を持ってない
				納得不可 数値の信頼性

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	30～39 歳	地球上の生命である限り、放射性物質や放射線とはきっても切り離せない関係であるため、ある程度は基本的な環境として受け入れなければならないと思う。試算方法が気になる なぜ自然放射性物質が含まれるのか疑問 本当なのか 試算方法を知らないのでは
		50～59 歳	よくわからない 知識不足
食品関係研究 職経験者	男性	60～69 歳	食品のように1kg当たりのベクレルでは125程度になります。一般食品の基準がこれより低いと言われても、気分はよくありません
医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	追加で被爆したので
	女性	30～39 歳	子のデータがどう安心材料になるのかわからない ピンとこない
		40～49 歳	試算をどの程度に考えたらいいのかわからない その値がすべての人に当てはまるかが分からない
		50～59 歳	自然放射性物質と原発事故の放射性物質には違いがあると思うので そうですかと言えない
60～69 歳	個体差や、地域差は、この数字から大きく離れることはないのだろうか		
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	知らないため。また、自然とは違う
	女性	20～29 歳	それ以上増やしたくない 正確なデータがないので
		30～39 歳	Bで述べている量と矛盾していると感じた
		40～49 歳	体重で判断すべきことなのか？このことをどう受けとめ、どういかせばいいのかわからない 自然なのか人為的が蓄積されたのか 基準がよくわからない 男性でも年齢によっては数値は変わらないのか よくわからないから不安
			50～59 歳

(F)日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、平均1.5ミリシーベルト程度(うち食品からは0.4ミリシーベルト程度)である。

(全回答者数=225人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=65人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	30~39歳	安心とかではなく、自然放射線は存在し事実である(※安心感ある、なしの間はおかしい。間に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安心をひっぱりだそうと感じてしまう) 知っていた 自然界にある放射性物質の説明は必要
		40~49歳	普段の生活をしていても被爆しているという事実は、放射能に過敏に反応しすぎなくても良いと思えるから 原発事故に係らず、ごく軽度の被ばくは日常生活で受けている為 当然のことと理解している このような説明をAやBと合わせて提供することが重要です 事実だから 長年自然からの影響を受けていることは知っている
		50~59歳	事実として科学的な判りやすい文面 自然のものは受け入れるしかない 人類誕生以来継続しているものであるから ある程度の知見を持っている方であれば知っている話です 自然界存在し食品にも含まれているものであれば心配はしない なんとなく
		60~69歳	報道などからの情報 信憑性のある情報としての前提条件の上で受け止めるしかないのでは 書籍等での知識 日本以上に自然界からの放射線量の場所もあるが健康被害が特定できないということ は、日本が安心できるということ 地球のオゾン層の破壊や宇宙からの放射線を浴びるから 新聞でよく見ます 食品を摂食している限り、また、地球上に生きている限りゼロにはなりえない 科学的に低い、インド、ブラジル。中国などは高いが誇大な報告はない 自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため 計算上子供を除き大人には許容数値の為 歴史存在 世界の平均より低いから
		70歳以上	と今までにないロマンを感じる データにより理解できる 同感である
		20~29歳	特に体に悪さをする値ではない為
		30~39歳	100ミリシーベルトには到底及ばないので 国内においての産地差別を無くす為に、安心できる情報だと思う
		40~49歳	日本は数値が低い 自然界からの線量をうけていても今現在健康でいられる 自然界では放射線を浴びているものだから
		50~59歳	食品に対して放射性物質を含まないものを求めたところで、外部被ばくは避けることができないし、この環境で過去から日本人が生活してきながら長寿国であることも事実だから

職務経験	性別	年代	理由
食品関係研究職経験者	男性	30～39 歳	自然界から受ける放射線は外部被ばくであり、内部被ばくとは明確に区別する必要がある。そのため、進化の過程で DNA を修復する酵素の働きで十分対応できていると考える 自然界で生活するのに当たり前の事なので、特段不安を感じません
		40～49 歳	もともと存在しているものであれば問題ないはず
		50～59 歳	これまでもずっと起こっていたことであるため
	女性	60～69 歳	既成の事実である 比較の根拠が具体的であるため 一般的な知見
		40～49 歳	低いレベルだから
		40～49 歳	科学的な根拠がある
医療・教育職経験者	男性	50～59 歳	そういう状況で生活してきている。いまさら逃れられない
		30～39 歳	原発事故による放射能汚染と関連づけて考えていいことなのかわからないため
	女性	40～49 歳	レントゲンや CT なんかもするから個人差はありそう 世界でもっと線量の高い地域があるけれど普通に人が暮らしているから 一般論的な話なので安心感というよりもさほど気にならない
		50～59 歳	そのとおり
		60～69 歳	量が少ないことには安心感を覚える 現在は不安がないが、原発があるかぎり将来的には不安
		30～39 歳	日常と密接にかかわっていることがわかる
その他消費者一般	男性	20～29 歳	自然に放射性物質があることは普通のこと
	女性	30～39 歳	食品以外にも、元々自然放射線を受ける要因があったことがわかったから 少ない数値だから もともと耐性があるとわかる
		40～49 歳	自然の状態でも放射線をあびることは知っているから 数種類の開示情報に矛盾がないから
		50～59 歳	人間の手にはどうしようもないことである 食品からは、少ないので 健康を書さない程度ということなので、安心感につながります
		60～69 歳	特に新しい情報ではない
		30～39 歳	これだけの情報だけでは安心感を得られない。追加で放射性物質を取り込んでしまったら、より悪影響があるのではないと思われるのではないか 基準値がベクレル単位であること、桁が違うことから、この情報では基準値が妥当なのか判断しづらく、安心につながりにくいと思われる

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=20 人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務職経験者	男性	30～39 歳	これだけの情報だけでは安心感を得られない。追加で放射性物質を取り込んでしまったら、より悪影響があるのではないと思われるのではないか 基準値がベクレル単位であること、桁が違うことから、この情報では基準値が妥当なのか判断しづらく、安心につながりにくいと思われる
		40～49 歳	わかりません
		50～59 歳	放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大きい為、心配すべきなのか否かさえはっきりしない この数字が高いのか低いのかかわからないし、その影響も不明である
		60～69 歳	余計に不安になった
			疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方が良いことは真理である 偏差値が明確にされていない
	70 歳以上	食品からの被曝量の割合は知られてない	
	女性	40～49 歳	この文だけでは逆に食品選びにかなり気を付ける必要性を感じて緊張感を持ってしまふ
60～69 歳		安心感がないからといって、現状からの回避、国外などへの逃避は困難なのだから仕方がないというのが本音である	
食品関係研究職経験者	男性	40～49 歳	だからどうしたのですか。結論がない
		50～59 歳	調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定的できないことだから
医療・教育職経験者	女性	30～39 歳	ホットスポットが怖い
		40～49 歳	自分で測定できないから

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	女性	40～49 歳	人によるのではないか？食品の摂取の仕方などにもよるのではないか？
			日本のデータだけでは安心感はない
		60～69 歳	国内においても場所が異なれば数値も異なると思う
			自然界から受ける放射線量に事故由来の放射線を受けると考えると安心できない
		100ミリシーベルト	

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=72人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務 経験者	男性	30～39 歳	日常、自然のことで人工的なものでないから そのとおりだとしたら影響が限定的なので	
		40～49 歳	統計的な資料に基づいた計算との印象。参照データがどの様なものかを確認する必要はある リスクは低い 常に被爆していると思うと安心である 食品からの被曝量が少ないことが理解できる 自然科学のことで分かっている内容であれば、不安は特にな この数値の件を心配してもしょうがないと思っております	
			50～59 歳	正しい知識が提供されている もともと自然界において含まれているなら仕方がないと思うから 食べ物ではなく一般的な話だから？
			60～69 歳	数値は知らなかったが、自然界に放射性物質が存在するから 事実であるから メディアなどからの情報により理解 納得 真実を知っての安心感 一方で少しの不安も 厚労省のホームページから知っていた 大きなリスクではない
				70 歳以上
		30～39 歳		確証されているので 地球上の生命である限り、放射性物質や放射線とはきっても切り離せない関係であるため、ある程度は基本的な環境として受け入れなければならないと思う。この値が『自然』なのか『一部人工』なのかが、気になる。文明活動によって、増加させることはないのか？ わかりやすいので 今まで特に影響がないので 根拠のあるデータ結果であると感じるため
			40～49 歳	事実として容認 自然界に昔からあるものだからどうしようもない、ではどうしたらいいのか 食品からとる割合が示しており、安心 過去から続いているから 100年受け続けたとしても、150ミリシーベルト程度で、心配する程の値ではないから 広島や長崎の事例も含め、仕方がないことであり、今となっては逃げられるものでもない。広島や長崎の方々が被ばくしながら、今も元気で生活している方が多数いらっしゃることも、多少の数値では不安はない
	50～59 歳			地域差があることは、福島原発の影響があった地区においても立証されている 自然のものだと思うから 食品以上に注意すべきモノがある
	60～69 歳	この情報提供も必要 数値で示されている		
	食品関係研究 職経験者	男性	50～59 歳	前々からのことだから
			60～69 歳	現況、問題ないレベル 自然の放射線量がかなり低いため
		女性	40～49 歳	根拠があると思うから

職務経験	性別	年代	理由	
医療・教育職 経験者	男性	30～39 歳	みんな同じ条件で生活しているから	
		40～49 歳	科学的根拠が具体的に示されているので	
	女性	40～49 歳	信頼できる専門家から直接聞いたことがある 自分への健康被害が出ていない 具体的な数値が出ている	
		50～59 歳	事実だから 自然界で共存しているのだから 自然に受けるものだから	
		60～69 歳	人の一生に受ける量に不安 なんとなく	
			なんとなく	
その他消費者 一般	男性	30～39 歳	いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、自分にとって不利な情報でも安心感につながる	
		40～49 歳	低量では安全であると再認識できる	
	女性	20～29 歳	自然界であればしかたがない 原発事故前に算出された値であり、原発事故によって操作されていないと思うから 自然界由来のものだから→人災による放射性物質という点で不安がある	
		30～39 歳	自然界でも放射線を受けることがわかり、原発事故による放射性物質への過度な不安が軽減される為 テレビなどでもそのように言っていたから 定量値が得られているから もともと放射性物質を受けて生活していることが分かるから	
			テレビでそう聞いた。安心できるレベルとの事 事故に関係なく存在するものだから 個人的に調べるすべもないことなので、情報は基本的に信じているため 専門的すぎず、身近な見解で安心できる	
			40～49 歳	自然界からも放射線量を受けていると知ったから 特に安心感には結びつかないが、現実を受け入れる気持ちにはなる 自然界に放射性物質があることは知っていた 知識として知るべき情報 しかたないかなという妥協もある安心 これについても、よくテレビなどでも説明していることが多く、納得できる 具体的な事例のため
				50～59 歳

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=48人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務 経験者	男性	20～29 歳	疫学的なデータなのか？	
		40～49 歳	そのような話はテレビラジオの話題に上らないでのわからない 原発からの特殊事情は自然界と比べて多大である この数値が安全であれば安心する	
			50～59 歳	自然界の定義が不明？ 差が小さくて意味がよくわからない 細かな地域別の放射線量を示してほしい 従来の自然界から受ける放射線量を聞いても何の不安解消にはならず、福島の影響がどれだけ広がるかを考えると怖い 自然界の放射線を理由に事故の不安は和らがない 理解度が低い
		60～69 歳		自然界は福島原発事故で汚染されたから 知らないから 食品による健康影響を追加総被ばく量で考えているので、自然放射性物質の話を持ち出されてもピンとこない だからどうなのか？科学的事実を述べるだけでは何を言いたいのか分からない 良く判らないから

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	女性	30～39 歳	もともと食品からが約1/4となると、少しでも被爆しない為に、選んで食べないといけ ないと思うから
			それが安心につながる点とは言えない。今は非常時、震災後の数値変化の動向から 判断
			基準になるような値が試算されているので
			生涯 100mSv からは、結構高い値と感じた
			本当なのか
			原発事故後、増えるであろうことが予測できるため
		現状はどうなのかを知りたい	
		40～49 歳	異常気象になるともっと高い値になる？ その数字の積み重ねを想像すると大きく不安
50～59 歳	全ての項目に漠然とした不安がある 知識不足		
60～69 歳	自然界の放射物質を故意に増やさないように		
食品関係研究 職経験者	男性	20～29 歳	自然界からも被爆しているため
		30～39 歳	これだけでは、1.5 ミリシーベルト程度が多いかどうかわからない
		50～59 歳	歳を取ると累積する
医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	追加で被爆したので 数値を示されても、自身の健康への影響の程度がわからない
		60～69 歳	被爆事例、症例が少ない
	女性	30～39 歳	発言者がどのような人かわからないので
		50～59 歳	自然界から受ける放射線量ががんのリスクが高まる実例を確認できないので 自然界から常に受けているのだから、食品からはできるだけ受けないようにしたい
		60～69 歳	原発の事故による放射線量の増加ほどのくらいなのか不明
		70 歳以上	普通の状態ならば心配はないだろう
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	内容的にも不安であるが、この数字で健康を保持するための対応方法が周知されて いるのかも知らず、不安である
		60～69 歳	基準値以下でも汚染された地区の食品があるので安心できない
	女性	20～29 歳	どこの誰が出した研究結果なのか分からないので
		30～39 歳	原発事故前と後では状況が違うから
		40～49 歳	よくわからないから不安 良く分からないから
		50～59 歳	心配
			人体に影響を及ぼす値がわからないから 調べる機関がはっきりしてない
		60～69 歳	原発後過去、現在データは異なるはず

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=6人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	50～59 歳	漠然とした安心感 止むを得ない
			数値がはっきり表れているから
	女性	30～39 歳	自然界なら安心できる
40～49 歳		数値化されたデータであるため	
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	どうしようもないので

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=14人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	40～49 歳	データは理解したが、今後本当に影響が無いか心配
		50～59 歳	放射線量の知識を植え付けるためには、学校での授業に取りあげることが最低限必要
		60～69 歳	Bの数値(0.002シーベルト/年・東京)の違い⇒使う数字は、慎重に選び統一することが、必要 根拠に確証を持ってない
	女性	30～39 歳	その数値がどのくらい影響力があるのか書かれていないため
		40～49 歳	特に理由なし いずれにしても食品から受ける放射性物質の多さを知る
食品関係研究 職経験者	女性	30～39 歳	国際値では1ミリシーベルト/年とされているように、情報がばらばらだから
医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	避けられない状態なので仕方がない
	女性	30～39 歳	追加で受けると健康を害する程度がわかっていればいいと思うので重要ではない 食品由来となる割合が意外と多い
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	知らないため
	女性	30～39 歳	Bで述べている量と矛盾していると感じた
		40～49 歳	基準がよくわからない

(G) 日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、地質によっても異なるため、日本国内でも0.4ミリシーベルト程度の地域差があるが、それらの地域によるがんリスクの差は科学的に確認されていない。

(全回答者数=226人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=50人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	30～39歳	安心とかではなく、自然放射線は存在し地域差を立証するのは難しいのはわかる(※安心感ある、なしの間はおかしい。間に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安心をひっぱりだそうと感じてしまう)
			自然界から受ける放射線量の地域差0.4mSvとBの調査結果の福島と東京との食品から摂取した放射線量の地域差0.018mSvを比較すれば、食品の原産地を気にすることが無意味に思える
			ラドン由来の話をすべき
		40～49歳	普段の生活をしていても被爆しているという事実は、放射能に過敏に反応しすぎなくても良いと思えるから
			ごく軽度の被ばくでは、リスクに差が無い為
			Fと同様にこのような説明をAやBと合わせて提供することが重要です
		50～59歳	事実だから
			僅かな被曝量の差が影響しないことが理解できる
			事実として科学的な判りやすい文面。一方、海外の自然放射線数値の高いところでも、発がん率に差異のないことの説明が不足
		60～69歳	自然のものは受け入れるしかない
			自然界存在し食品にも含まれているものであれば心配はしない
			なんとなく
書籍等での知識			
70歳以上	日本以上に自然界からの放射線量の場所もあるが健康被害が特定できないということ		
	は、日本が安心できるということ		
	癌リスクは科学的に確認されていることは理解出来る		
	地質により異なるため仕方のないこと		
女性	納得		
	科学的な根拠がある		
	自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため		
食品関係研究職経験者	男性	30～39歳	「以上のように各項目でなく、全体を通し安心
			同感である
		50～59歳	その差による影響は確認されていない為
			100ミリシーベルトには到底及ばないので
		60～69歳	科学的に証明されていないことがあるということも、大切な情報であると思う
			特に何も感じなかった
日本の国内で癌の発生率に大きく差異が生じていないことから、0.4ミリシーベルト程度の違いで発がん率が大きく変化することはないという証明になるから			
地域差は大きな差ではない			
30～39歳	自然界から受ける放射線に対しては、進化の過程で適応していると考えられるため地域差が見られなくても妥当な結果であると考え		
	自然界で生活するのに当たり前の事なので、特段不安を感じません		
	書かれている通り、科学的に差が確認されていないため		
50～59歳	既成の事実である		
	自然の放射線量がかなり低い		
	比較の根拠が具体的であるため		
60～69歳	一般的な知見		

職務経験	性別	年代	理由
医療・教育職 経験者	男性	40～49 歳	これまでの経験則的なもの
		50～59 歳	そういう状況で生活してきている。いまさら逃れられない
	女性	30～39 歳	原発事故による放射能汚染と関連づけて考えていいことなのかわからないため
		40～49 歳	ガンはそこまで気にするのかな
		50～59 歳	我が山口県は他の地域より元々値が高いのを知っているから 差が小さいから
60～69 歳	現在は不安がないが、原発があるかぎり将来的には不安		
その他消費者 一般	女性	20～29 歳	科学的に納得ができる
		30～39 歳	おそらく低線量でのリスクの差は定量化できないから その程度の放射線量なら許容できるとわかる
		40～49 歳	西日本は、比較的高いと聞いたことがあるから 数種類の開示情報に矛盾がないから
		50～59 歳	そのようなことまで気にする人は精神面で生きていけないと思う 地域差では、あまり心配していない 福島県以外であれば、安心につながります
		60～69 歳	特に新しい情報ではない

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=22人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	40～49 歳	データ不足では？
		50～59 歳	確認できないだけなので安心につながらない 確認されていないことが、無いことではない
		60～69 歳	確認されていないという漠然とした言い方は不親切である。60年、70年代の冷戦時代の放射線量とその後の癌のリスクの相対データなどがあればわかりやすい 調査が不十分 疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方が良いことは真理である そのとおりである
	女性	30～39 歳	事故前なら安心感があるが、今は原発事故由来の放射線量が増え、これから差が出てくると思うから 科学的という言葉さえ疑問 科学的な確認がないので
		40～49 歳	恐れるべき対象を地域では決定できないのがわかった
		50～59 歳	全ての項目に漠然とした不安がある
食品関係研究 職経験者	男性	50～59 歳	調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定のできないことだから
	女性	30～39 歳	科学的に確認されていない情報が一人歩きしているように感じるから
医療・教育職 経験者	女性	30～39 歳	ホットスポットが怖い 分かっている不安がある
		40～49 歳	がん予防の方法は確立されていないから 科学的な根拠がない がん発生率など高い地域で、放射線量の影響と思われる場合は調査すべき
		60～69 歳	はっきりとわからないことには安心できにくい
その他消費者 一般	女性	60～69 歳	地域別のリスクを把握出来るよう望みます 約30年たつチェルノブイリ原発後の現実を調査したたしかな

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=49人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	20~29歳	知っている
		30~39歳	その通りだと、感じるから(地域差があるのなら、その地域には人は住んでいないと思うから。もしくはその地域の人は淘汰されていて、住民がいなくなっていると思うから)
		40~49歳	記述の仕方が科学的な印象
			リスクは低い
			この程度の差であれば不安はない
		50~59歳	ある程度影響があると思われるのなら、既に研究しているのではないかと、とおもうので
		60~69歳	止むを得ない ある程度の知見を持っている方であれば知っている話です 食べ物ではなく一般的な話だから?
	70歳以上	科学的根拠のある数値だと思うから 真実を知っての安心感 一方で少しの不安も 大きなリスクではない	
	女性	30~39歳	日本だけの問題ではない 根拠ある評価故
			信じるしかない
			地球上の生命である限り、放射性物質や放射線とはききても切り離せない関係であるため、ある程度は基本的な環境として受け入れなければならないと思う わかりやすいので 数値がはっきり表れているから 今まで特に影響がないので
		40~49歳	日本は数値が低い 事実として容認 特に理由なし
			自然界に昔からあるものだからどうしようもない、ではどうしたらいいのか 過去から続いているから
			自然界におけるものよりも食品による影響が大きい事を裏づける 広島や長崎の事例も含め、仕方のないことであり、今となっては逃げられるものでもない。広島や長崎の方々が被ばくしながら、今も元気で生活していらっしゃる方が多数いらっしゃることも、多少の数値では不安はない
50~59歳			地域差があることは、福島原発の影響があった地区においても立証されている
60~69歳	人間にはある程度以上までは許容できることが伺える		
食品関係研究 職経験者	男性	40~49歳	もともと存在しているものであれば問題ないはず
		50~59歳	地域差が無いので
		60~69歳	納得できる
	女性	40~49歳	根拠があると思うから
医療・教育職 経験者	男性	30~39歳	みんな同じ条件で生活しているから
	女性	40~49歳	地域差は健康に影響が出る量に比べると値が小さいものだから 具体的な数値が出ている
		50~59歳	研究結果だから
		60~69歳	地域差がない事は安心 なんとなく
その他消費者 一般	男性	40~49歳	低量では安全であると再認識できる
	女性	20~29歳	原発事故前に算出された値であり、原発事故によって操作されていないと思うから 地域差というよりも遺伝などによるものが大きいと思っているので
		30~39歳	0.4ミリシーベルトの違いでは発ガンのリスクにはつながらないように思えるから 漠然とした安心感
			個人的に調べるすべもないことなので、情報は基本的に信じているため
		40~49歳	科学的に確認されているから 自然界に放射性物質があることは知っていた なんとなく安心できる
		50~59歳	説明内容でわかるから
			不安を感じない

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=50人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	40~49歳	大まかな日本人という区分どうなんですか？平均値の出し方が？？？です
			原発からの特殊事情は自然界と比べて多大である
			癌という発生原因がはっきりしないためその影響についても考え不安となる
		50~59歳	放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大きい為、心配すべきなのか否かさえはっきりしない
			現在確認されていないことは、未来を担保しない
			細かな地域別の放射線量を示してほしい
	女性	60~69歳	私は広島県人ですが、被爆した広島県人のガン発症率は他地域と比べ相当高かった様に記憶しています
			理解度が低い
			漠然としている情報 良く判らないから
		30~39歳	科学的確認がなされていない点 数値の信頼性 リスク差はないのかと思うがあったから安心感あるともいえないのでは
			確認されたとしても地域差だけでは十分な情報にはならないため さらなる研究データが必要と思われる
			確認されていないので 科学的に確認されていても不安であるのに、確認されていないことは、もっと不安に思うから
40~49歳	“科学的に確認されていない”の一文が入っているだけで不安につながる為		
	癌のリスクが確認でき安心 やはり科学的に証明された方が安心		
	遺伝の影響もあるのでは		
50~59歳	知識不足		
	科学的な確認が認証されていないという事実への解決策を見極めることは難解である 将来に不安を感じる		
	60~69歳		
食品関係研究 職経験者	男性	20~29歳	現代の科学技術では検出されないだけかもしれないので、不安
		40~49歳	確認されていないからどうしたのですか。結論がない
		50~59歳	本当かな？
	女性	40~49歳	科学的に確認されていないから
医療・教育職 経験者	男性	40~49歳	原爆投下の歴史がある長崎では癌の発生率が高かったと言う報告があるのでは？
		50~59歳	追加で被爆したので
		60~69歳	被爆事例、症例が少ない
	女性	30~39歳	発言者がどのような人かわからないので
		40~49歳	自分の住んでいる地域の実際の放射線量がわからない
		70歳以上	がんのリスクを放射線量に限って調査するのはどうするのかかわからない
その他消費者 一般	男性	30~39歳	なんとなく 科学的に確認されていないので
		50~59歳	リスクの差も科学的に確認されておらず不安である
			信憑性に欠ける
		60~69歳	安心材料とは言えない
	女性	30~39歳	地域差があるということは、同じ県内においても各市町で自然界から受ける放射線量が異なり、元々どの程度各市町で自然界からの線量の差があったのか、原発以前の正常値は今やわからないのではないかと思ったから
			確認されていないため 原発事故が起きてしまった以上、以前とは違う状況だから
			地質によってということですが、このあたりの調査・研究の成果がない
			気にしすぎてどうなのかと思う。今、できることしかできないし、今後の対策がリスクを軽減できる可能性はある
		40~49歳	「リスクの差が確認されていない」という結果は「もわっ」としていて、納得感に欠ける
			曖昧 地域によってリスクの差は存在すると思う
			地域によるリスクの差を明らかにして欲しい
			良く分からないから
50~59歳	心配		

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=20人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務経験者	男性	30~39歳	そのとおりだとしたら影響が限定的なので
		40~49歳	この数値の件を心配してもしょうがないと思っております
		50~59歳	漠然とした安心感 具体的で分かりやすい
		60~69歳	現時点で確認されていないなら、地域差はないと理解するから 事実であるから
	女性	40~49歳	1ミリシーベルト以下の差は心配する程の値ではないから 確認されていないことを正直に公表しているため
		50~59歳	自然のものだと思うから
60~69歳		この情報提供も必要	
医療・教育職経験者	女性	50~59歳	地域に差はないので
その他消費者一般	男性	30~39歳	いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、自分にとって不利な情報でも安心感につながる
	女性	20~29歳	そこに住んでいたらしかたがない 自然界由来のものだから→人災による放射性物質という点で不安がある
		30~39歳	この科学的知見に納得
		40~49歳	がんリスクはそれに影響されるものではないとわかる 「科学的に確認されていない」から
		50~59歳	事故後がん罹患率が高くなる可能性が出てくる

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=35人)

職務経験	性別	年代	理由		
食品関係業務経験者	男性	30~39歳	基準値がベクレル単位であること、桁が違うことから、この情報では基準値が妥当なのか判断しづらく、安心につながりにくいと思われる		
		40~49歳	今まで、このようなデータを目にする機会が無かった わかりません 科学的に確認されていない 科学的に確認できていない点		
		50~59歳	知識がないから不安を駆りたてているのが現状 自然界の放射線を理由に事故の不安は和らがない		
	女性	60~69歳	科学的に確認されたデータが少ないから 知らないから Fと同じになるが、いろいろな数字が出ると、混乱が生じ不安になる為 食品による健康影響を追加総被ばく量で考えているので、自然放射性物質の話を持ち出されてもピンとこない 自然体に… 根拠に確証を持ってない		
		30~39歳	文末の言いまわしが不安になる 地域により癌リスクの差が確認されていないので安心感はない 確認されていないからと放っておくことに疑問→不安材料		
		食品関係研究職経験者	男性	30~39歳	科学的に確認されていないため
		医療・教育職経験者	男性	50~59歳	知らない事ですので心配です 数値を示されても、自身の健康への影響の程度が分からない
女性	30~39歳		確認されていないということは、安心材料にはならない リスク評価がなされていないため		
	50~59歳		自然界から受ける放射線量でがんのリスクが高まる実例を確認できないので わからない		
	60~69歳		未確認の状態だから 原発の事故による放射線量の増加はどのくらいなのか不明		

職務経験	性別	年代	理由
その他消費者 一般	男性	50～59 歳	知らないため
	女性	20～29 歳	正確なデータがないので
		30～39 歳	地域によってリスクが異なるのであれば、情報が欲しい
			Bで述べている量と矛盾していると感じた
		40～49 歳	リスク高い地域がどこか不安
			科学的にも確認されていないので
			科学的に確認されていなくても不安は払しょくされない。返って、確認されていないからこそ不安を感じる
	50～59 歳	やはり、科学的根拠が欲しいもので数値が曖昧なものは安心できるとは言えない	
自分の居住地域の放射線量を知らないから			
		科学的に確認されていない点	

(H) 国立がんセンターによると、放射線によるがんリスクと、生活習慣によるがんリスクは、以下のように比較されている。

- ・喫煙や大量飲酒によるがんリスクは、放射線量に換算すると 1,000-2,000 ミリシーベルト程度
- ・肥満や痩せすぎ、運動不足や塩分の摂り過ぎによるがんリスクは、放射線量に換算すると 200-500 ミリシーベルト程度
- ・野菜不足や受動喫煙によるがんリスクは、放射線量に換算すると 100-200 ミリシーベルト程度

(全回答者数=236人)

1. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=25人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務経験者	男性	30~39歳	現在の食品の基準値が年間1mSvを超えないよう設定されたことと比較して、がんに関するリスクを生活習慣によるところがはるかに大きいことを示すことは安心感につながらると思う 人間の個体差は大きく遺伝的要素や環境で同じ兄弟でもまったく違う結果が疾病に表れたりするので、一律でリスク比較は難しいと感じた	
		40~49歳	Aを根拠とすれば、放射能によるガンのがんリスクが、生活習慣に関する他のことより低いと言えるから 大変分かりやすい説明です 被曝リスクが分かり訳す説明されている	
		50~59歳	事実として科学的な判りやすい文面 過去の実例で出た数字だと考える 原発事故とは別に面白いデータ、今回の放射能汚染より興味深く事故による放射能には心配しない	
		60~69歳	書籍等での知識 内容自体良く頭の中で理解しにくい部分はあるが、比較対象としての現実性・具体性が分かり易い 自然界にも放射性物質が存在するし地球自体が放射線を浴びていると考えているため 大きなリスクではない	
		70歳以上	感を持つ、理由を述べた」	
	女性	30~39歳	喫煙、飲酒、野菜不足、運動不足の方が現在の放射性物質よりずっとリスクが高いということが科学的に示されている。受動喫煙すら、100ミリシーベルト以上のリスクがあると知って驚いた	
		40~49歳	低レベルの放射線より癌リスクの高いものが沢山あるので、放射線に関しては安心感があるが、最近の子供たちの食生活を聞いていると、生活習慣に起因するがんが将来増えるのではないかと心配である。悪い生活習慣のリスクをもっと教えるべきだと感じる	
		50~59歳	放射線被ばくは、避けることはできないが、生活習慣による発癌性のリスクは自らの行動で低減することが可能であり、影響力も大きいことがわかるから	
	食品関係研究職経験者	男性	50~59歳	他にガンになるリスクが高いものがあるため
			60~69歳	既成の事実である
医療・教育職経験者	女性	30~39歳	現在の福島原発の映像をみて現時点での放射能の拡散が無いとは思えず、長期的なリスクがあると考えるため	
		40~49歳	そう、ガンは誰でもなるから 塩・タバコ・酒などに比べるとガンリスクが小さいことが分かるから	
		60~69歳	生活習慣による健康被害が最も不安である	
その他消費者一般	男性	40~49歳	放射線を過剰に恐れる必要はない	
	女性	40~49歳	新しい規制値に納得できる	
		50~59歳	喫煙している人が低線量被ばくを気にするのは、本末転倒だと以前から思っていた	

2. 選択肢 a①よく知っている 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=22人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	30～39 歳	がんのリスクを放射線に換算するのはおかしい。放射線もリスクの1つである。たばこを吸わない方がいいように、放射線も余計に浴びない方がよい(※安心感ある、なしの間はおかしい。問に対してどう思うか等にしたほうが、よい。これでは、科学的根拠から安心をひっぱりだそうと感じてしまう) こういうものと福島原発事故を混同させていくのが良くないと思います 基準値がベクレル単位であることから、この情報では基準値が妥当なのか判断しづらく、安心につながりにくいと思われる
		40～49 歳	リスク差だけが先行して議論されるものではない
		50～59 歳	放射線被曝量と健康との関係性については、閾値のはっきりしておらず、個人差も大きい為、心配すべきなのか否かさえははっきりしない 細かな生活習慣のデータに基づく被ばく量を換算してほしい
		60～69 歳	自らわかってすること、今回のように避けられない事実とを比較しても説得力はない。福島周辺で今後数十年にわたって疫学調査をして、その影響度を調べることを是非して欲しい(既にやってくれるとは思いますが) 疫学的安全性ではそうだろうが、できるだけ排除できるものは排除した方がよいことは真理である 科学的技術根拠に裏づけされていません
	女性	30～39 歳	受動喫煙のほうが害が大きい。数値はごまかしがある
		60～69 歳	リスクはあくまで個々人の差異(遺伝などの由来もあると思う)があるわけだから、リスクは確証できていてもそれだけの要因とは断定できないと思うから
食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	生活習慣によるがんリスクは自業自得の面が大きく、改善することが可能である。しかし、現在の人工放射性物質によるがんリスクは、不検査の食品が出回り、空気中、飲料水中にホットパーティクルが含まれれば回避することは難しい。また、東電と政府の人災によって引き起こされた事故で、なぜ日本国民が望まないがんリスクを背負わされなければならないのか理解に苦しむ。生活習慣のがんリスクと放射性物質によるがんリスクを比較するのは一見妥当なように感じさせるが、巧妙な論旨のすり替えである。国立がんセンターのような国立の機関が、一般人をミスリードしようとするのは不可解である 自分が喫煙者なので、放射性物質とは全く関係ないところで不安を感じます
	女性	30～39 歳	換算することの意味がわからない。いずれも健康被害につながり、安心感はない
医療・教育職 経験者	男性	50～59 歳	単純に数値で比較できるのでしょうか？
		60～69 歳	習慣病と放射線影響を比較できない
	女性	30～39 歳	分かっている不安がある
		40～49 歳	生活習慣によるがんのリスクと、放射線量によるがんのリスクを比較すること自体おかしい。条件等がちがいきすぎる
その他消費者 一般	男性	40～49 歳	この比較は、いくら今回の被ばく線量と、飲酒や喫煙などと、がんリスクを比較したところで、不安の解消にはならない。がんが怖いと普段から思っている人は、当然禁煙しているし、節酒や食生活も気を使っている
	女性	30～39 歳	定量根拠が不明な情報だから
		50～59 歳	がんと聞くとなぜか不安になる
		60～69 歳	個人差がありすぎるため、この程度の情報では安心できない

3. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=48人)

職務経験	性別	年代	理由
食品関係業務 経験者	男性	40~49歳	リスクは低い
			放射線によるリスクより、生活習慣によるリスクの方が影響が大きい為
			興味深い比較でわかりやすいから
			他にリスクが高いものがあるのは理解している
		50~59歳	同列には比較できないが、発がんリスクから考えると安心である
			喫煙や食事について関心があるため
	女性	30~39歳	常識的な判断に役立つ
			揚げられているようなリスクは自分で制御できる
		40~49歳	ある程度の知見を持っている方であれば知っている話です
			なんとなく
			事実であるから
			信憑性のある情報としての前提条件の上で受け止めるしかないのでは
60~69歳	喫煙・飲酒・野菜不足・運動不足は積極的に避けるべきである		
	身近なリスク比較は、安心感を与えるから		
70歳以上	生きていく限りリスクゼロはあり得ない		
	人間を取り巻く環境には多くのリスクがあることの認識		
食品関係研究 職経験者	男性	いかに日頃の生活習慣の方が怖いかが一目でわかる	
		より具体的に	
	女性	根拠ある評価故	
		信じるしかない	
		この情報は、大変有難い。詳しい情報をもっと広く伝えて欲しい	
		根拠のあるデータ結果であると感じるため	
	女性	生活習慣でリスクを避けられるという安心がある	
		特に理由なし	
		驚くべき数値ですが逆に規則正しい食生活を行えばリスクが少なくなる事がわかる	
		桁違いの数字の差より喫煙飲酒を抑制できる	
女性	広島や長崎の事例も含め、仕方のないことであり、今となっては逃げられるものでもない。広島や長崎の方々が被ばくしながら、今も元気で生活していられる方が多数いらっしゃることも、多少の数値では不安はない		
	ガンセンターの科学的根拠あるデータであるなら自らの生活スタイルを正す		
女性	50~59歳	他の因子の方が大きいので	
	60~69歳	納得できる	
医療・教育職 経験者	男性	40~49歳	どのような場合でもリスクがつきものであり、心配しすぎはよくないことがわかったから
		30~39歳	根拠があると思うから
	女性	30~39歳	たばこや生活習慣も危ないから
		40~49歳	屁理屈で、ただの計算値
		30~39歳	わかってはいる
		50~59歳	実質身に降りかかっている実感がないのでわからない！ そう言うものかな・・・と思う
その他消費者 一般	男性	60~69歳	食品摂取状況により発がんリスク上がることのエビデンスあるから
		30~39歳	本人の責任に帰するが喫煙等に比べ放射線によるがんリスクは少ないことは、ホッと する
	女性	30~39歳	なんとなく
		30~39歳	いろいろな情報を知ることにより正しい判断をする上で役に立つように思える。だから、 自分にとって不利な情報でも安心感につながる
		20~29歳	科学的根拠に基づいて算出されているという点で安心。自己で放射線と生活習慣につ いて考える参考になる
		30~39歳	健康に気を使うのならば他に優先すべき事項があることがわかる
女性	30~39歳	生活習慣によるがんリスクと比較することにより、原発事故による放射性物質への過 度な不安が軽減される為	
	40~49歳	子供が家庭にいないので気にならない	
		国立がんセンターの統計データだから	
	50~59歳	一般に認知されていると思われる知識と差異がないから	
女性	きちんと比較対象をもっているものは納得感がある		
	50~59歳	がんと放射線量数字で比較基準の根拠が不明	

4. 選択肢 a②何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=46人)

職務経験	性別	年代	理由		
食品関係業務 経験者	男性	30~39 歳	放射性元素に対する不安を除ける話ではない 自然界にある放射性物質については安心感があるが、日本人の失敗によりまき散らした放射性物質について、安全であるから良いとは開き直りたくない。自分たちの失敗をもっと真摯に受け取り、悔い改めるべきだと考えているため、いくら科学的な根拠があっても、安心だとは思いたくない		
		40~49 歳	比較するのに違和感があります。 人によってリスクの度合いが違うと思いますのでこれを放射線量と比べる意味がどこにあるのか理解不能 野菜不足、受動喫煙のリスクと同じなら、十分問題であると感じる		
		50~59 歳	他の要因との比較からの安心感はありません。その他の要因であればどうなるのかが不安です 理解度が低い		
		60~69 歳	日本ではまだリスクという概念を理解できていない。だから我々は堂行動すればいいのかわを丁寧に説明してもらいたい。食品安全委員会の文書は科学的事実説明に終わっているものが多く、これでは我々の不安は解消できない 良く判らないから		
	女性	30~39 歳	数値ははっきり出ているが、比較のし方がよく分からないから 0ということはないと思うが、微量でも存在するという事は、少なからず不安なリスクを感じます 本当なのか 喫煙や飲酒は、個人の選択で影響を受けるが、放射線は、望まないうちに、体内に取り込んでいられるかもしれないから		
		40~49 歳	3つの項目に当てはまらない人にとっては原発事故前まで受けずに済んでいた放射性物質の量が増えたことには変わらないので 逆に日常生活に不安を覚える これらの情報があってもだから何なのか、健康維持の姿勢・効果は個人的な問題・状況によるものであり、不安とも安心とも一言では言えない 大量飲酒はどれくらいか 知りたい		
		50~59 歳	これまでのデータであり、福島原発事故後のデータではない 知識不足		
		食品関係研究 職経験者	男性	20~29 歳	喫煙によるリスクが非常に高いのは理解できるが、放射能に対するリスクが0ではないので、不安
				40~49 歳	比較から何が言いたいのですか
				50~59 歳	調査手法は科学的でも、だからどうなのか結論断定のできないことだから
医療・教育職 経験者	男性	60~69 歳	被爆事例、症例が少ない		
	女性	30~39 歳	発言者がどのような人かわからないので		
		40~49 歳	比較する対象が適正でないのではないかと		
		50~59 歳	数値への転換基準がよく解らない		
		60~69 歳	日常生活で注意が必要と感じる		
			科学的に得られた数値だから		
問9の質問は、昨年の原発事故によるがんリスクは心配ないと言っており、質問の表記に不快感を覚えます。予防対策は知っていても現在死亡原因第一位のがんに罹患するのは、ある面に寿命とも捉えられてきていると思うからです。今知りたいのは原発事故発生からの変化していく状況(把握)・・・だと思います					

職務経験	性別	年代	理由		
その他消費者 一般	男性	60～69 歳	安心材料とは言えない		
		30～39 歳	ある程度、自ら防ぐことが可能なものと不可能なものを比較することはできないと思うから 原発事故が起きてしまった以上、以前とは違う状況だから 生活習慣は個人で治せるものであるが、放射線は個人ではどうすることも出来ないもの、比較することの意味がわからない		
	女性	40～49 歳	放射線によるがんリスク、生活習慣になるがんリスクを受けにくい体身作りは、どうすれば良いのですか？リスクばかり言われても、改善することが優先だと思う 比較するのは難しい 放射性物質の安心につながるというよりも、他のリスクが怖くなった 生活習慣と比較しても放射線は受けにくいほうがよい 癌のリスクは、生活習慣病によるものは自覚出来るが、放射線は目に見えずわからない リスクを最小限にしたいと考えるのであれば、さらに事故由来のリスクが加わる分不安になると思う 良く分からないから		
			50～59 歳	食から、選択できずに口に入り、数量も不明で不安なのに、嗜好品との比較に納得感をもてない 喫煙や野菜不足は自分でわかるしコントロールできるが、放射線は目に見えないのでわからない がんに対しての不安 人体に影響を及ぼす値がわからないから 一番の心配は、がんのリスク、そこがあいまいである	
				60～69 歳	多くのリスクが重なる生活なので多くの情報と広い知識を正確に届けてほしい

5. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b①安心感がある

(回答者数=38人)

職務経験	性別	年代	理由		
食品関係業務 経験者	男性	20～29 歳	他の成人病などのリスクも周知されるべきだ		
		30～39 歳	生活習慣の方がリスクがあるとは知らなかった		
		40～49 歳	野菜不足が100～200ミリシーベルトと同等にはやや衝撃的 数字ででている		
			50～59 歳	納得できる 対比が分かりやすい 生活習慣によるリスクは、自らの努力で減少させることが可能であるから	
		60～69 歳	科学的根拠のある数値だと思うから 知らなかったがこの情報で		
		70 歳以上	何処まで科学的かあてにならないが、納得する		
	女性	30～39 歳	原発による放射性物のリスクが小さく感じるから このデータから、健康を考えるなら、規制値を超えたりしなければ、放射性物質に過剰に反応するより、他にすべきことがあるとおもうから わかりやすいので 「国立がんセンター」と記載があると説得力がある 数値で分かりやすい リスクのたもととして分かり易い		
			40～49 歳	データとしての信頼感 生活習慣によるリスクは各個人によるものなので原因がわかっている 分かりやすい対象比較されたデータであるため	
			50～59 歳	震災事故より自己管理の要因の方が問題	
		60～69 歳	この情報提供も必要 数値で示されている		
		食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	どれにも当てはまらないため
				40～49 歳	この数字からは全く問題ないと判断可能

職務経験	性別	年代	理由
医療・教育職 経験者	女性	40～49 歳	リスクを比較する対象の記載がある がんセンターでの調査結果だから
		50～59 歳	研究結果だから 1000ミリシーベルトを受けても、ある程度は生存できそうなので
		60～69 歳	生活習慣の乱れた人が全員ガンになるわけではない なんとなく
その他消費者 一般	女性	20～29 歳	原発事故前に算出された値であり、原発事故によって操作されていないと思うから
		30～39 歳	過去に経験したことがない放射能という問題も、よく知っている生活習慣によるがんリスクと比較すると、計算上では安心できると思ったから がんのリスクは喫煙や飲酒もあることを知っているし、それ相当くらいだろうと考えられるから
			気にする程度ではないと思うので これまでのデータから示された情報なので
			個人的に調べるすべもないことなので、情報は基本的に信じているため 大変具体的、丁寧で分かりやすい
50～59 歳	自分ががんリスクに値しない為		

6. 選択肢 a③まったく知らない 選択肢 b②安心感がない

(回答者数=57 人)

職務経験	性別	年代	理由	
食品関係業務 経験者	男性	40～49 歳	このようなことを知るとよけい不安に感じる リスクの比較が一義的にできるとは思えない	
			この件の答えになっていませんが、タイのたばこのようにリスク表示をおこなうべきだと思います リスク比較であって安心値ではない点	
			比較の手法が不明である 放射線被曝と食生活習慣を比較する事に無理がある(=非常にわかりにくい)と思います	
		50～59 歳	こんな知識を有している日本人は皆無(医者や専門家以外) 直接関係ないのにわざと安心感を出そうとしているように見える 放射線のリスクは比較にならないほど長期間に及ぶ	
			原発の放射能汚染は、一律に広範囲に影響する 比較データ漠然としている 知らないから	
			喫煙等によるリスクの放射線量換算値と比較できるので、100ミリシーベルトというリスク量の概念がイメージしやすい	
	女性	60～69 歳	程度の差こそあれ、がんリスクはある 横並びの比較は参考になる 根拠に確証を持ってない 無理な数字 数値の信頼性 今回の原発由来を心配するより生活習慣の方が問題ということが意図わからない	
			20～29 歳	例えが分かりづらい為 生活習慣によるリスクも怖い、そもそも比較対象ではない気がする わかりにくいので
				30～39 歳
		40～49 歳	リスクが高すぎる 思ったより数値が高いから	
		50～59 歳	全ての項目に漠然とした不安がある 放射線によるリスクが高いから	

職務経験	性別	年代	理由
食品関係研究 職経験者	男性	30～39 歳	他の要因とリスクを比較することで、恣意的に安全性を誇張しているように見えるため
		50～59 歳	酒も飲めないな
		60～69 歳	ベクレルとシーベルトを混同しがちで、100 や 200 などすぐにひばくしそうな値であることから
		60～69 歳	根拠に説得力がない 安心感と言う不可解な判断基準では回答不可
医療・教育職 経験者	男性	40～49 歳	長崎についても未だ様々な調査報告があるので未解明な部分があると思う
		50～59 歳	追加で被爆したので 知らなかったです。しかし、どのようにして生活リスクを作ったのでしょうか 数値を示されても、自身の健康への影響の程度が分からない
	女性	30～39 歳	生活習慣は予防や改善がある程度可能なので、これらと比較しても安心はしないと思う 比較がわかりにくい
		40～49 歳	これを読むと、現代社会人はがんになるリスクが高くなりそうであるから 健康に気をつけている人でもがんになるから
		50～59 歳	放射線によるがんリスクと生活習慣によるがんリスクとを比較するのは、無理があるように感じるので
		70 歳以上	喫煙、食塩によるがんリスクは知られているが、生活習慣の改善は容易でない
その他消費者 一般	男性	30～39 歳	数値により具体的な危険性がわかる
		50～59 歳	意味が分からない 知らないため データのことはわかったが、だからどうするのが不明で不安である
	女性	20～29 歳	換算するとわかりやすいが、それによる不安は少なからずある 本当かなあ？
		30～39 歳	少し表現が難しい 他のことが不安になった もとより放射能より生活習慣病の方が怖いと思っている
		40～49 歳	個人差が大きと思うから 比較の基準がよくわからない
			がんセンターによると・・なわけで、この数値に信ぴょう性を感じない どのような人にもある程度のがんリスクがあると思う
		60～69 歳	安易なリスク情報は理解に苦しむ

3) 食中毒について

①肉を生食する理由（問 12）

問 12 問11において食べたことがある方(1～3を選んだ方)にお聞きます。馬、豚、鶏の肉（臓器を含む）を生で食べた理由について、選択肢1～8の中から、当てはまるものをすべて選んでください。

(回答者数=24人)

職務経験	性別	年代	回答
食品関係業務経験者	男性	40～49 歳	生肉の汚染率は把握の上で食した
			地の特産品であり観光のついでに食した
			食中毒になる可能性と確率と食べたい欲求を比較して覚悟を決めて食べた
			宮崎県では鳥のさしみは郷土料理であり、今まで食中毒になったことはない
		50～59 歳	馬は規制で大丈夫と理解している。
			中では比較的风险が小さい部位と判断した
			その土地の名物であったため
			知り合いに勧められた
			量を少なくしか食べない
		60～69 歳	危険な細菌がきわめて少ないという知識
			消費者庁や食品安全委員会のHPから生肉の食中毒について事例と食さないよう指導があること。及び富山・金沢・神奈川の食中毒事例から喫食しないように心掛けている
			馬刺しは衛生基準に適合した施設だけから出荷されている
	基本的に哺乳類の肉は生で食べないようにしているが、馬刺しは広く食べられているので安全だと思っている		
	馬肉の衛生管理をある程度信用している		
女性	30～39 歳	自分が食べて、実験台になろうと思ったため	
		母が食卓に出したので	
	女性	40～49 歳	馬肉でも寄生虫のリスクが最近言われているが、一般的には食中毒の話あまり聞かない事、製造メーカーが HACCP の認証を取得もしている所などから
食品関係研究職経験者	女性	30～39 歳	食文化的背景から
医療・教育職経験者	女性	50～59 歳	信頼できるお店での提供だったため

職務経験	性別	年代	回答
その他消費者一般	女性	30～39 歳	もともと生肉は食べないがリスクについて知識がない頃に、知人宅で振舞われたり、友人に郷土料理だからと勧められて断れなかった
			一度食べて見たいと思ったので
			職場の歓迎会にてつきあいで食べざるをえなかった。こわさを知らない頃だった
			たとえあたってとしても大丈夫だと思ったため。少々あたっても食べたい
		40～49 歳	馬肉に関しては衛生管理及び流通経路など、安心できる販路が確立されていると知っているから

4) 食品安全委員会が自ら行う食品健康影響評価について

①自ら評価を速やかに進めるべきと考える物質等 (問 13)

問 13 あなたが、「自ら評価」を速やかに進めるべきと考える物質等があれば、次の選択肢の中から当てはまるものをすべて選んでください。特になければ「6 なし」を選択してください。1～5以外に進めるべき物質等があり、「7 その他」を選んだ場合においては、具体的な物質名を記入するとともに、ア(評価の必要性)、イ(危害要因に関する情報)、ウ(国内外における評価状況、管理状況等)の情報についても必ず記入してください。

(回答者数=16人)

職務経験	性別	年代	具体的な物質	評価の必要性	危害要因に関する情報	国内外における評価状況、管理状況等
食品関係 業務経験者	男性	30～39 歳	飲料水中のバナジウム	飲料水中のバナジウムの評価が必要と考える。アメリカのカリフォルニア州の水質基準で 50 μg/L といった規制値があり、根拠はラットの母体毒性からの数値である。日本国内ではこの基準を超えるバナジウム含有の天然水が販売されており、富士山麓の地下水を水道水として利用している住民の飲み水にもこの基準値を超えているものもあると考える。また、ホヤには特異的にバナジウムを濃縮する性質があり、ホヤの食習慣がある我が国においてもバナジウムの影響を検討する必要があると考える	カリフォルニア州のバナジウム規制の考え方は以下の URL を参照 → http://www.oehha.ca.gov/water/pals/vanadium.html	国内に規制は無し。カリフォルニア州の基準は上述の通り、オランダでは水生生物の生物濃縮を考慮しバナジウムの水質基準が 1.2 μg/L といった情報もある
			カルシウム塩	食品添加物のカルシウム塩は、これまで上限量が設定されてきたが、酢酸カルシウム及び酸化カルシウムの食品健康影響評価に際して、厚労省案では上限量設定が削除された。理由として、過去におけるような石灰類を混入させるような状況は想定しがたいこと、カルシウム摂取量が耐用上限量より十分に小さいこと、CODEX で使用基準が設定されていないことが挙げられている。この理由の通りであれば他の食品添加物についても上限量が撤廃されるべきと考えるが、それに際しては食品安全委員会による科学的な裏づけが必要ではないか。自ら評価が必要なほど健康影響があるとは思っていませんが	食品添加物の生産量統計、国民健康・栄養調査など	存じません

職務経験	性別	年代	具体的な物質	評価の必要性	危害要因に関する情報	国内外における評価状況、管理状況等	
食品関係 業務経験者	男性	40～49 歳	茶のしずく等	茶のしずく等の事例で新たな知見のもとで調査が必要と考えられるから	茶のしずく等の事例	特に化粧品由来の健康影響が適正に評価されていないと考えられるから	
		50～59 歳	クドア	クドアによる食中毒が頻繁に発生しているが防止の為に画期的な対策がない	生鮮ヒラメに寄生し人が生食する事により食中毒を起こす(食安発 0607 第7号)	食中毒の拡大・再発防止が可能であるため行政処分は不要とされているが食品の安全性を確保するためにリスク評価は必要である	
			ソルビン酸・人工アミノ酸	いずれも発がん性物質である事がマウス実権等で実証されています	食べてはいけない危険な添加物という本で紹介されていました	国内では認定されている添加物ですが、諸外国では特にソルビン酸は発がん性が高いと食品添加物認定はされていない国が多いと聞いています	
			放射能	放射能について、わからないことが多い	専門家の中にも、懸念派と楽観派があり、どちらが正しいのかわからない	日本が先鞭をつけるべき	
	60～69 歳	低レベル放射線					
		魚醤(キムチ)			裸陳列量り売り(百貨店内)	発酵食品なのに!何考えているの?	
			ラック色素	ラック色素、日本生協連が新たに不使用者リストに入れようとしている	日本生協連に確認ください	日本生協連に確認ください	
	女性	30～39 歳	セシウム	「セシウム」について、多くの消費者が不安に思い、実際放射能検査や、その検出限界値の詳細への問合せが来る。また、少しでも検出されると大騒ぎになっている	福島及び、その隣県地域の食品(米・小麦・牛など)	中国へ輸出できる食品として、関東圏の県の原料が含まれるものは輸出できない現状にある	
医療・教育 職経験者	男性	50～59 歳	人工甘味料	糖質ゼロがはやりだが、それで生体が正常に反応するかの根拠が少ない	ダイエット食品で、肥満になりやすいという文献はあると思います	研究を始めています。ぜひ、助成金などサポートして下さい	
		60～69 歳	寄生虫	寄生虫を起因とする獣肉・魚肉の生食による食中毒	国内産牛の住肉胞子虫による 90%以上感染(IA SR, 33, 160-161, 2012)	人に対する影響について未評価	
	女性	40～49 歳	ポリプロピレン・テフロン・フタレートとほうろ用銅版	現代において調理器具・容器の種類が多い。その中でガラス質のホウロウは、酸やアルカリ、塩分に強く、保温性が良く、材料の味や色を変化させないと言われている。食品の素材を痛めにくいということは、健康被害を防ぐ高い器具ではないか。科学的に評価してほしい(ほうろ用容器購入による)	調理器具・容器の素材は、ステンレス、アルミニウム、鉄、銅、シリコン、ラップなど多種である。使用頻度が高いため、危害要因となるものは避けるべきである	調理器具・容器は、生活必需品のため流通している。選択肢は多様で使い勝手から大きさ、形状、素材などの情報や売り場や本などで紹介されているが、あくまでも選ぶのは消費者だ。しかし、危害要因がある、または可能性があるものが存在する。これでは、食品の安全は保たれない。よって評価し食品の安全が保たれるものを多く普及させるべきである	
			豆乳アレルギー	大豆アレルギーではないが、豆乳アレルギーという人を最近よく聞く。食品表示上は大豆なのだろうが、豆乳の形で、製品に混ぜられていてもわからない			

職務経験	性別	年代	具体的な物質	評価の必要性	危害要因に関する情報	国内外における評価状況、管理状況等
その他消費者一般	女性	50～59 歳	スクラロース	「スクラロース」は、有機塩素化合物である。有機化合物にはPCB やトリハロメタン等があり、生物に害があるものがほとんどです。これをダイエット甘味料として受け入れているのか一抹の不安を覚える	コココーラ zero、ガム、低カロリー菓子、缶チューハイ、缶コーヒーなど糖分を気にする人やダイエットをする人	人間の体内には蓄積されないことが安全性の根拠となっているが、自然界での環境上はどうかなど、PCB との違いがあるとすれば調査した方がよいのではないか
			亜硝酸塩			

統計表

問 1.1 環境問題に対する不安の程度

	全体	①とても不安を感じる	②ある程度不安を感じる	③どちらともいえない	④あまり不安を感じない	⑤全く不安を感じない	⑥よくわからない	無回答・無効回答
合計	344	29.1	54.4	8.4	7.3	0.6	0.3	0.0

問 1.2 自然災害に対する不安の程度

	全体	①とても不安を感じる	②ある程度不安を感じる	③どちらともいえない	④あまり不安を感じない	⑤全く不安を感じない	⑥よくわからない	無回答・無効回答
合計	344	41.3	48.3	6.7	3.8	0.0	0.0	0.0

問 1.3 食品安全に対する不安の程度

	全体	①とても不安を感じる	②ある程度不安を感じる	③どちらともいえない	④あまり不安を感じない	⑤全く不安を感じない	⑥よくわからない	無回答・無効回答
合計	344	21.5	43.3	16.6	16.3	2.3	0.0	0.0

問 1.4 重症感染症(新型インフルエンザなど)に対する不安の程度

	全体	①とても不安を感じる	②ある程度不安を感じる	③どちらともいえない	④あまり不安を感じない	⑤全く不安を感じない	⑥よくわからない	無回答・無効回答
合計	344	20.9	46.5	18.9	11.9	1.5	0.3	0.0

問 1.5 犯罪に対する不安の程度

	全体	①とても不安を感じる	②ある程度不安を感じる	③どちらともいえない	④あまり不安を感じない	⑤全く不安を感じない	⑥よくわからない	無回答・無効回答
合計	344	15.4	47.1	22.4	14.2	0.3	0.6	0.0

問 1.6 戦争・テロに対する不安の程度

	全体	①とても不安を感じる	②ある程度不安を感じる	③どちらともいえない	④あまり不安を感じない	⑤全く不安を感じない	⑥よくわからない	無回答・無効回答
合計	344	12.8	34.3	25.0	21.5	5.2	1.2	0.0

問 1.7 交通事故に対する不安の程度

	全体	①とても不安を感じる	②ある程度不安を感じる	③どちらともいえない	④あまり不安を感じない	⑤全く不安を感じない	⑥よくわからない	無回答・無効回答
合計	344	16.6	47.7	23.0	11.3	0.6	0.9	0.0

問 2.1 食品添加物に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	11.9	41.9	34.9	11.0	0.3	0.0

問 2.2 農薬に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	13.7	49.7	31.7	4.7	0.3	0.0

問 2.3 家畜用抗生物質に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	13.7	43.6	30.8	4.7	7.3	0.0

問 2.4 器具・容器包装からの溶出化学物質に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	10.8	44.8	35.2	6.7	2.6	0.0

問 2.5 汚染物質(カドミウム・メチル水銀等)に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	18.3	46.2	31.1	2.6	1.7	0.0

問 2.6 有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	23.8	55.2	19.2	1.7	0.0	0.0

問 2.7 BSE (牛海綿状脳症)に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	11.9	36.3	37.5	12.8	1.5	0.0

問 2.8 遺伝子組換え食品に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	11.0	38.4	36.6	12.8	1.2	0.0

問 2.9 体細胞クローン家畜由来食品に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	12.5	39.0	28.8	9.9	9.9	0.0

問 2.10 いわゆる健康食品に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	11.3	44.2	34.0	8.7	1.7	0.0

問 2.11 肥料・飼料等に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	7.8	31.4	45.3	11.9	3.5	0.0

問 2.12 放射性物質を含む食品に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	38.4	35.8	20.3	4.7	0.9	0.0

問 2.13 その他に対する不安の程度

	全体	①非常に不安である	②ある程度不安である	③あまり不安を感じない	④全く不安を感じない	⑤よく知らない	無回答・無効回答
合計	344	9.6	9.9	1.5	0.6	0.3	78.2

問 3.1 食品添加物に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	185	37.8	7.6	24.9	6.5	9.7	4.3	4.3	3.8	1.1

問 3.2 農薬に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	218	23.4	6.4	30.7	5.0	9.6	10.6	8.7	3.2	2.3

問 3.3 家畜用抗生物質に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	197	21.3	6.1	35.0	7.6	12.7	5.1	8.1	3.6	0.5

問 3.4 器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	191	23.0	11.5	18.3	6.3	14.7	9.4	12.0	4.2	0.5

問 3.5 汚染物質(カドミウム・メチル水銀等)に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	222	14.4	10.8	18.5	5.9	5.0	36.5	5.0	3.2	0.9

問 3.6 有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	272	8.1	5.9	40.4	5.5	2.9	21.7	9.6	4.4	1.5

問 3.7 BSE（牛海綿状脳症）に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	166	15.1	13.9	11.4	6.6	3.6	39.8	5.4	3.0	1.2

問 3.8 遺伝子組換え食品に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	170	49.4	12.4	8.2	8.8	2.4	2.4	11.8	2.4	2.4

問 3.9 体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	177	49.7	8.5	3.4	12.4	4.5	2.8	15.3	1.7	1.7

問 3.10 いわゆる健康食品に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	191	22.5	20.9	17.8	4.2	13.1	10.5	2.1	6.8	2.1

問 3.11 肥料・飼料等に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	135	16.3	11.1	34.8	5.9	13.3	7.4	7.4	3.0	0.7

問 3.13 その他に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	67	13.4	9.0	11.9	7.5	1.5	14.9	9.0	19.4	13.4

問 4.1 食品添加物に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	158	53.2	23.4	5.1	1.9	0.6	1.9	5.1	1.9	7.0

問 4.2 農薬に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	125	39.2	43.2	6.4	0.0	0.8	1.6	5.6	1.6	1.6

問 4.3 家畜用抗生物質に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	122	25.4	36.9	11.5	0.8	2.5	4.9	14.8	0.8	2.5

問 4.4 器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	144	20.1	25.7	16.0	2.8	2.8	3.5	18.1	2.8	8.3

問 4.5 汚染物質(カドミウム・メチル水銀等)に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	116	15.5	45.7	9.5	4.3	2.6	0.9	12.9	1.7	6.9

問 4.6 有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	72	15.3	22.2	20.8	15.3	1.4	2.8	5.6	11.1	5.6

問 4.7 BSE(牛海綿状脳症)に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	173	25.4	40.5	8.1	11.6	0.0	1.7	4.6	4.0	4.0

問 4.8 遺伝子組換え食品に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	170	37.6	18.2	3.5	4.7	1.8	12.9	11.8	2.9	6.5

問 4.9 体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	133	30.1	22.6	1.5	3.0	0.8	9.8	21.8	2.3	8.3

問 4.10 いわゆる健康食品に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	147	15.0	13.6	6.8	3.4	0.7	5.4	24.5	18.4	12.2

問 4.11 肥料・飼料等に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	197	16.2	32.5	8.1	2.5	1.0	7.6	21.3	2.0	8.6

問 4.13 その他に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	7	0.0	28.6	14.3	0.0	0.0	0.0	28.6	0.0	28.6

問 5.1 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について不安を感じている理由(第1位)

	全体	過去に経験したことがない事態のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	安全性についての科学的根拠が納得できない	新しい規制値では納得できない	食品の検査体制に不安を感じる	政府の情報公開が不十分	周囲が心配しているので自分も心配になる	その他	無回答・無効回答
合計	255	44.7	14.9	7.5	12.2	1.6	4.3	10.2	0.0	2.7	2.0

問 5.2 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について不安を感じている理由(第2位)

	全体	過去に経験したことがない事態のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	安全性についての科学的根拠が納得できない	新しい規制値では納得できない	食品の検査体制に不安を感じる	政府の情報公開が不十分	周囲が心配しているので自分も心配になる	その他	無回答・無効回答
合計	255	9.8	28.6	6.3	18.4	1.2	16.5	15.3	1.6	0.8	1.6

問 5.3 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について不安を感じている理由(第3位)

	全体	過去に経験したことがない事態のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	安全性についての科学的根拠が納得できない	新しい規制値では納得できない	食品の検査体制に不安を感じる	政府の情報公開が不十分	周囲が心配しているので自分も心配になる	その他	無回答・無効回答
合計	255	9.0	15.7	11.0	16.5	2.7	15.3	22.0	2.4	2.4	3.1

問 6.1 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第1位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	344	44.2	24.1	2.0	1.7	4.1	10.5	0.6	3.5	2.9	1.2
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		0.3	0.3	2.3	0.6	0.3	0.3	0.0	0.9	0.3	

問 6.2 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第2位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	344	15.7	43.9	3.5	2.6	2.9	8.4	2.9	5.2	3.8	1.7
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		0.9	0.6	2.9	0.3	2.0	1.5	0.0	0.3	0.9	

問 6.3 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第3位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	344	7.0	5.5	12.8	2.9	10.8	22.7	3.2	6.7	4.9	2.6
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		4.1	2.6	2.3	0.6	2.6	5.2	0.3	2.0	1.2	

問 6.4 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第4位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	344	3.8	6.7	7.3	2.9	8.7	11.3	5.2	12.8	6.7	6.7
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		5.2	4.4	3.8	0.9	3.8	4.7	2.0	0.6	2.6	

問 6.5 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第5位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	344	5.2	4.7	8.7	3.8	4.7	11.9	4.7	6.1	7.6	8.4
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		6.1	5.5	4.1	0.3	4.1	6.4	2.6	2.3	2.9	

問 7 食品に対する影響の情報収集の姿勢

	全体	事故直後も現在も積極的にしている	事故直後は積極的にしたが、現在は積極的に収集していない	事故直後は積極的に収集してはなかったが、現在は積極的にしている	事故直後も現在も積極的に収集していない	その他	無回答・無効回答
合計	344	32.0	42.2	5.5	16.0	2.9	1.5

問 8 東日本大震災前後の飲料品の購入等に係る意思決定の変化

	全体	東日本大震災の前後で変化はない	東日本大震災の直後は変化した、現在は以前と同じに戻った	東日本大震災以降で変化し、現在も続いている	その他	無回答・無効回答
合計	344	30.2	22.1	44.2	1.7	1.7

問 9.1.A 認識度:食品中の放射性物質のような低いレベルの放射線量での健康影響は、主に「がん」である。生涯でおおよそ100ミリシーベルトを追加で被ばくすると、健康影響の可能性が高まるのが科学的に確認されている。

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	53.2	42.2	4.4	0.3

問 9.1.B 認識度:昨年(2011年)の原発事故以降の1年間で、日本人が食品から摂取した放射性物質は、0.002ミリシーベルト程度(東京)~0.02ミリシーベルト程度(福島や宮城)と厚生労働省により推計されている。他にも、京都大学や消費者団体など複数の団体が、おおよそ同程度と推計している。

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	22.4	51.5	25.9	0.3

問 9.1.C 認識度:核実験や原発事故がなくても、もともと食べ物には、カリウム40などの自然放射性物質が含まれており、肉や魚、野菜では、食品1kg 当たり 100～200 ベクレル程度とされている。

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	50.0	42.7	6.7	0.6

問 9.1.D 認識度:カリウム 40 などの自然放射性物質も、ヨウ素 131 やセシウム 137 などの原発事故由来の放射性物質も、人の健康影響のメカニズム(DNA の損傷)は同じである。健康影響の強さは、核種や年齢により異なり、乳幼児ではカリウム 40の方がセシウム 137よりも2～3倍程度影響が強いが、成人ではセシウム 137の方がカリウム 40よりも2倍程度影響が強いとされている。

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	22.4	42.2	35.2	0.3

問 9.1.E 認識度:人間の体内にも自然放射性物質があり、体重 65kg の男性だと 7900 ベクレル程度と試算されている。

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	24.7	45.1	29.9	0.3

問 9.1.F 認識度:日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、平均 1.5 ミリシーベルト程度(うち食品からは 0.4 ミリシーベルト程度)である。

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	38.1	51.7	9.9	0.3

問 9.1.G 認識度:日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、地質によっても異なるため、日本国内でも 0.4 ミリシーベルト程度の地域差があるが、それらの地域によるがんリスクの差は科学的に確認されていない。

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	32.3	44.8	22.7	0.3

問 9.1.H 認識度:国立がんセンターによると、放射線によるがんリスクと、生活習慣によるがんリスクは、以下のように比較されている。・喫煙や大量飲酒によるがんリスクは、放射線量に換算すると1,000-2,000ミリシーベルト程度・肥満や痩せすぎ、運動不足や塩分の摂り過ぎによるがんリスクは、放射線量に換算すると200-500ミリシーベルト程度・野菜不足や受動喫煙によるがんリスクは、放射線量に換算すると100-200ミリシーベルト程度

	全体	よく知っている	何となく聞いたことがあるが、はっきりとは知らない	まったく知らない	無回答・無効回答
合計	344	22.4	41.0	36.3	0.3

問 9.2.A 安心感:食品中の放射性物質のような低いレベルの放射線量での健康影響は、主に「がん」である。生涯でおおよそ 100 ミリシーベルトを追加で被ばくすると、健康影響の可能性が高まることが科学的に確認されている。

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	45.1	53.8	1.2

問 9.2.B 安心感:昨年原発事故以降の1年間で、日本人が食品から摂取した放射性物質は、0.002 ミリシーベルト程度(東京)～0.02 ミリシーベルト程度(福島や宮城)と厚生労働省により推計されている。他にも、京都大学や消費者団体など複数の団体が、おおよそ同程度と推計している。

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	50.0	48.8	1.2

問 9.2.C 安心感:核実験や原発事故がなくても、もともと食べ物には、カリウム40などの自然放射性物質が含まれており、肉や魚、野菜では、食品1kg 当たり 100～200 ベクレル程度とされている。

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	63.7	35.2	1.2

問 9.2.D 安心感:カリウム 40 などの自然放射性物質も、ヨウ素 131 やセシウム 137 などの原発事故由来の放射性物質も、人の健康影響のメカニズム(DNA の損傷)は同じである。健康影響の強さは、核種や年齢により異なり、乳幼児ではカリウム 40 の方がセシウム 137 よりも2~3倍程度影響が強いが、成人ではセシウム 137 の方がカリウム 40 よりも2倍程度影響が強いとされている。

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	41.0	57.0	2.0

問 9.2.E 安心感:人間の体内にも自然放射性物質があり、体重 65Kg の男性だと 7900 ベクレル程度と試算されている。

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	56.4	41.3	2.3

問 9.2.F 安心感:日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、平均 1.5 ミリシーベルト程度(うち食品からは 0.4 ミリシーベルト程度)である。

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	63.7	34.3	2.0

問 9.2.G 安心感:日本において自然界から受ける1年間の放射線量は、地質によっても異なるため、日本国内でも 0.4 ミリシーベルト程度の地域差があるが、それらの地域によるがんリスクの差は科学的に確認されていない。

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	53.8	44.5	1.7

問 9.2.H 安心感:国立がんセンターによると、放射線によるがんリスクと、生活習慣によるがんリスクは、以下のように比較されている。・喫煙や大量飲酒によるがんリスクは、放射線量に換算すると1,000-2,000ミリシーベルト程度・肥満や痩せすぎ、運動不足や塩分の摂り過ぎによるがんリスクは、放射線量に換算すると200-500ミリシーベルト程度・野菜不足や受動喫煙によるがんリスクは、放射線量に換算すると100-200ミリシーベルト程度

	全体	安心感がある	安心感がない	無回答・無効回答
合計	344	48.3	50.0	1.7

問 10 肉の生食についてのリスクの認識度

	全体	重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している	下痢程度のリスクがあることは知っている	リスクについてほとんど又は全く知らない	子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っている	無回答・無効回答
合計	344	90.7	29.9	7.8	72.7	0.9

問 11.1 馬の生の肉の生食の場所と頻度

	全体	飲食店で食べたことはないが自宅で食べたことがある	飲食店で食べたことがあるが、自宅で食べたことはない	飲食店でも自宅でも食べたことがある	食べたことはない	無回答・無効回答
合計	344	4.4	22.7	7.8	63.7	1.5

問 11.2 馬の生の臓器(レバー等)の生食の場所と頻度

	全体	飲食店で食べたことはないが自宅で食べたことがある	飲食店で食べたことがあるが、自宅で食べたことはない	飲食店でも自宅でも食べたことがある	食べたことはない	無回答・無効回答
合計	344	0.0	6.4	0.9	90.1	2.6

問 11.3 豚の生の肉の生食の場所と頻度

	全体	飲食店で食べたことはないが自宅で食べたことがある	飲食店で食べたことがあるが、自宅で食べたことはない	飲食店でも自宅でも食べたことがある	食べたことはない	無回答・無効回答
合計	344	0.3	0.9	0.3	95.3	3.2

問 11.4 豚の生の臓器(レバー等)の生食の場所と頻度

	全体	飲食店で食べた ことはないが自宅 で食べたことがあ る	飲食店で食べた ことがあるが、自 宅で食べたことは ない	飲食店でも自宅 でも食べたことが ある	食べたことはない	無回答・無効回答
合計	344	0.6	3.5	0.3	92.2	3.5

問 11.5 鶏の生の肉の生食の場所と頻度

	全体	飲食店で食べた ことはないが自宅 で食べたことがあ る	飲食店で食べた ことがあるが、自 宅で食べたことは ない	飲食店でも自宅 でも食べたことが ある	食べたことはない	無回答・無効回答
合計	344	3.2	18.0	2.6	73.5	2.6

問 11.6 鶏の生の臓器(レバー等)の生食の場所と頻度

	全体	飲食店で食べた ことはないが自宅 で食べたことがあ る	飲食店で食べた ことがあるが、自 宅で食べたことは ない	飲食店でも自宅 でも食べたことが ある	食べたことはない	無回答・無効回答
合計	344	0.3	11.0	0.6	85.2	2.9

問 12 肉を生食する理由

	全体	好物だった ため	飲食店の お勧めメニ ューだった ため	周囲が食 べていた ため	鮮度が良 ければ大 丈夫だと 考えたた め	飲食店で 提供され るものは 安全であ るはずだ と考えた ため	家庭用と して販売 されてい るものは 安全であ るはずだ と考えた ため	自分の体 力・体調 であれば 大丈夫だ と考えた ため	その他	無回答・無 効回答
合計	146	36.3	43.8	22.6	39.7	28.1	8.2	25.3	15.8	4.8

問 13 自ら評価を速やかに進めるべきと考える物質等

	全体	鉛	オクラキ シン	ヒ素	アルミニ ウム	アクリル アミド	なし	その他	無回答・ 無効回答
合計	344	34.9	18.6	32.0	32.3	30.2	34.3	6.7	2.3